

被爲在候處至急御發艦可然段被仰越候ニ付直ニ御乗船御拔鑑被爲在候

十二月廿五日朝廷萬機親裁につき博く天下の公儀を探り偏黨の私なきを以て衆と休戚を同らし
舊法制度の美は長く之を保存せんと欲するを以て列藩は宜しく聖意を奉體し勤王の實効を顯は
し民人は心を安して其業に従ふべき旨を達せらる

〔王政日新録〕(熊本縣 鹿本縣)

別紙之通參與衆御役所より申來候付右寫御廻達致候夫々御順達相濟候ハ、御戻し可被成候以上

紀伊中納言内

十二月廿五日

林

寬

輔

加賀 宰相中將 様

御留守居中様

松平 陸奥守 様

細川 越中守 様

松平 美濃守 様

松平 因幡守 様

松平 備前守 様

同 同 同 同 同

寫

本文一通別紙書一通可相達旨參與衆被申渡候仍申入候也

十二月廿五日

參

與

役

所

紀伊中納言殿

家來中

別紙之通被仰出候ニ付其領内に不洩様領主方篤ト可被申渡候事

一徳川内府字内之形勢を察シ政權を奉歸候付 朝廷おるて萬機御裁決被遊候ニ付而之博く天下之公議をとり偏黨之私なきを以衆心と休戚を同じ徳川祖先之制度美事良法之其儘被差置御變更無之候間列藩此聖意を體し心附候儀之不憚忌諱極意高論シテ救總補正ニ力を盡し候上勤王之實効を顯し下民人之心を失えず 皇國をして一地球中ニ冠絶しむる様碎勵可致旨御沙汰候事

徳川内府字内之形勢を察し政權を奉歸候付 朝廷おるて萬機御裁決被遊候付而之博く天下之公議をとり偏黨之私なきを以衆心と休戚を同じ徳川祖先之制度美事良法之其儘被差置御變更無之旨被仰出候間人々公明正大之聖意を奉戴各安心して其家業を營候様可仕者也

但巨細條々之儀之猶追而被懸示儀も可有之事

年號支月

十二月廿五日徳川慶勝松平春嶽朝命を報じて大坂に下る

〔王政復古帳〕

此御下坂者最前之處ハ右御内沙汰之通期限を以被奏成功候様との事ニ候得とも大分御都合宜先期限無之候御下坂被仰付候事

尾張 大納言 様

松平 大藏 大輔 様

右者御用有之昨廿五日京地御發途御下坂ニ相成候間此段御達仕候以上

十二月廿六日

林 新 九 郎
津 田 山 三 郎
青 地 源 右 衛 門

溝 口 孤 雲 殿
三 宅 藤 右 衛 門 殿

〔池邊悖右衛門日記〕

同(十二)廿七日 一昨日尾越兩老公御下坂ニ付鬼塚同道越之酒井及訪様子承り今度降官ハ御辭官ニて前之高付獻地ハ王政復古ニ付政府御入目丈ハ領地の内ニ取納公議の上御確定との儀尾越へ御内沙汰ニ相成七日及限り御受有無御返答之答との事登城榎本監察に逢ひ様子相尋大分胸下り候様子ニて御内沙汰ハ異議無之様子也鬼塚今晚より歸京鶴殿も一同歸京桑之山脇島原飯島訪來る

〔坂本彦兵衛覺書〕

十二月廿九日

世子昨日大坂御着來正月元日御入洛と注進
一尾越兩公下坂ノ上内府公拜謁此際斷然と官位封土還奉有之愈以誠實ヲ被表度左候得ハ於 朝廷削封等之御評議有之候とも爲宗家死を以盡力セント陳言有之候處内府公大ニ感悅萬事御依頼有之近日中輕隊ニ而上京之儀茂御受有之候由

十二月廿五日三條實美等五卿大坂に着す

〔王政復古帳〕

五卿業御事去ル十九日太宰府御發途ニ相成候由ニ而秋吉又助古閑富次外ニ番士八人隨從ハムし今日此許に致着候尤五卿業者長州に御立寄之由ニ付少し御後ニ而今夕より明朝に懸テ御着船可相成との事ニ御座候又助列御地迄可致隨從哉否哉之儀者外四藩士申談候上相決候答ニ候任幸便右之段迄申達候以上

十二月廿四日

馬 場 彦 左 衛 門

木 村 得 太 郎 殿

被仰越通致承知候以上

十二月廿七日

〔池邊悖右衛門日記〕

同(十二)廿五日、十一日立十六日立之官御着坂十八日 世子御發途佐賀關より御乗船之段申來る五卿着坂薩邸へ一泊
ニ付御見舞御使者相勤五卿より着京迄ハ不相替警衛御頼有之位復舊ニ付是迄之御警衛は爰許ニて引分是よりハ御頼ニ付御供此方よりも相願

十二月廿五日伏見市中取締掛參與田宮如雲市中の警備緒につきたるを以て庶民安堵して生業に服すべき旨を示達す

〔王政復古録〕

伏見市在彼是混雜之趣相聞候付取締之儀 朝命蒙り當屋敷に致出張且諸藩に市中見廻之儀 朝廷方被 仰付亂妨之者 捕押方之御備相立候間散亂之者共何をも居宅に立歸生業可安候 右之趣町中に可觸知者也

市中取締掛參與

十一月廿五日

田宮如雲

同廿八日

右書付於伏見御觸ニ相成候段牧田壽太郎を差出候由ニ而御留守居を達有之候事

十二月廿五日江戸の薩藩邸に浪士屯集の聞あり幕府庄内其他數藩及び幕兵に命じ之を討伐せしむ

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

御同席觸寫

稻葉美濃守殿御渡候御書付寫壹通相達候間被得其意御同列中不殘様無遲滯早々可有通達候答之儀之先々從銘々不及挨拶各より木下大内記方に可被申聞候以上

十二月廿六日

大目付

松平大和守殿

丹羽左京大夫殿

右留守居

當節惡徒共市中致暴行且野州其外おるて徒黨を結ひ不容易事共取巧候付此程夫々御召捕相成候處右同志之者とも松平修理大夫屋敷内ニ潛伏せし居去廿三日夜市中御取締として出張罷在候酒井左衛門尉人數屯所に亂入炮發およひ候所業難捨置同人より召捕引渡之儀及懸合候處理不盡ニ發炮およひ候付無餘儀戰爭相成候就而ハ猶脱走之輩も難計候間右様之もの及見聞候ハ、連ニ召捕自然手餘候ハ、討捨之上早々訴出候様可致萬一見聞候共其儘ニ差置候ものハ可被所重料候右之趣御料私領寺社領共不洩様可被相觸候

右之通萬石以上以下之面々に可被達候

十二月

〔江戸返達御用狀扣〕

覺

松平修理大夫様御上屋敷に兼而浪士屯集せし居市中等ニ而亂妨有之趣ニ付昨朝六時過御廻方酒井左衛門尉様間部下總守様松平伊豆守様其外公邊御役方騎兵撤兵歩兵とも凡千人餘取圍酒井左衛門尉様御廻方打寄右修理大夫様御留守居御門前に呼出何歎談判御座候由之處無程右留守居打果直ニ三田壹丁目角左衛門尉様御廻方より大砲打懸候由修理大夫様御屋敷より火ノ手相發夫より双方戰爭ニ相成尤朝五半時頃より相始四半過迄戰爭浪士凡六七十人程同所退散芝田町通行筋所々放火せし品川邊より小船ニ而沖之方ニ乗出修理大夫様御手船蒸氣船に乘移候由ニ御座候尤浪士打死見聞之處左之通

一死骸 壹

但御隣阿州様御下屋敷内ニ有之

一死骸 貳

但首無之薩州御屋敷内ニ有之

一死骸 貳

但薩州御屋敷に右同斷

一死骸 壹

但同所西門前ニ有之

一首 壹

但薩州屋敷内ニ有之

一死骸 壹

但松木丁路治ニ有之

一死骸 四

但門前明地ニ有之首無之

一死骸 壹

但新網町代地ニ有之

右之外打死手負不少山ニ御座候得共取々之風聞ニ而睨ニ相分不申候

一薩州様御藩上下六拾人程名乗出候付鳥居丹波守様御預之山

一三田小山御末家鳥津淡路守様御上屋敷に浪士屯集之趣ニ付右御屋敷にも御廻方より發炮ニ而燒失浪士何方に立去候哉

睨ニ相分不申淡路守様御家來四十人程名乗出候付酒井左衛門尉様御預之山

右之通外使共承込申候付此段申上候以上

十二月廿六日

澤村脩藏

〔全書〕

御城使代役水野大三郎より左之通之書付差出候事

昨廿五日薩藩御討取之手續荒増左之通

薩州家通用門
前より三田邊

西應寺町邊

阿州様御中屋敷内

羽州上ノ山

七曲りより新町邊

酒井左衛門尉様

水野眞次郎様

間部下總守様

松平伊豆守様

松平隠岐守様

松平主殿守様

内藤金一郎様

右之通ニ而取巻候間自分御人數差出之分左之通

右之内内藤様御人數余程働ニ相成候由尤御同人様井伊家より御出ニ付御里方御人數數多參居候付都合宜御働との噂ニ御座候

一主殿頭様ニ之諸手ニ下藥を御送ニ相成候由

右之外騎兵隊歩兵隊遊撃隊ニも人數多取巻ニ相成居申候

右之通取巻通用門より酒井家隊長之者重役に而會可致旨申入候處留守居篠崎某罷出應接中切懸直ニ同人首級を取直様物見之内に炮發いたし夫より前後左右より打込候由

但酒井家口上之趣ニ之内より三發打出候間酒井家よりも發炮ハムし候との事ニ候得共全ク中よりハ打出不申酒井家より無謀ニ打込候由傳承仕候是ハ前夜三田之始末も有之少しハ私意も相見候との噂ニ御座候

一右應接中留守居を討取直ニ發炮及候間浪士ニも一方ハ阿州様御屋敷一方ハ因州様分家松平主稅様御屋敷に打テ出右ニ付鯖江様上ノ山様御人數双方打合ニ相成間部様ハ收軍ニ而此手より押出し上ノ山様御人數余程相働九人討死有之浪士も討取候得共多數ニ付此手も收軍ニ相成通新町之方に脱走ハムし候付此所ニ而遊撃隊打合ニ相成右之内遊撃隊長長半藏討死夫より同町之方に脱走仕候

一七曲りニ而討合之節賊徒より木戸を締間より鐵炮打出し候間討手手負多有之候由

一田町に脱走之分凡五十人計田町邊所々放火ハムし又品川邊も放火ハムし鈴ヶ森より船ニ而落逃候由

右之通船ニ而落逃候由ニ付公邊御軍艦貳艘ニ而追懸ニ相成申候何方ニ而賊討取相成候哉其末更ニ相分不申候事

〔全書〕

一御城使水野大三郎より差出候書付寫

薩藩之内召捕ニ相成候名前左之通

慶應三年

柴田良助 兒玉彌右衛門 東郷七之丞
 齋藤八郎 川崎四郎右衛門 半田源七郎
 齋藤直次郎 堀 勘兵衛 津太郎左衛門
 入江駒之丞 細井 猶喜 堤 彦十郎
 山本辰次郎 澁谷勝徳 玉置周次
 玉置健藏 前倉武市 桑山半助
 比野友吉

右之者目見以上ニ御座候

宇都武右衛門 米 善八郎 關 助之丞
 安藤武八 川口源次郎 村岡誠之進
 米 平太郎 柳瀬半助 比野乙吉
 折田善次郎 前田勇吉 川口源藏
 齋藤八郎 婦人 壹人 下女 壹人
 子供 三人 家来下男五人
 右者降参又生捕ニ相成候未タ何方ニ御預共相分不申候
 小山御末家ニ而
 椎本孫一郎 新原健之進 中島七郎
 前田源之進 深郷才之進 郡司直助
 一廿五日晝九時比麻布本村町崎天真寺に浪人三人逃込候付步兵追懸参同所ニ而少々打合何方に歟其未逃去行衛相分不申候

中澤納次 郡司尉十郎 相川惣兵衛
 齋藤利兵衛 相川惣藏 兒玉伏兵衛
 橋本徳十郎 岩本幸兵衛 田民鐵藏
 小林萬藏 恒谷半兵衛 赤塚市郎右衛門
 内田清吉 中武次右衛門 田中金次郎
 岩本國次郎 未家留守居
 右之御鐵地 田代繁之丞
 外ニ中間十人
 右酒井家ニ而生捕
 十人積 玉置掛 玉置七次郎
 六人積 新番寄合 落谷甚次郎
 五人積 醫師 小 林 存 三十九
 當時落谷甚次郎厄介 五十九
 留守居粗足 花 咲 金 藏
 五兩三人ふち 吉 田 半 藏
 同 小 野 片 吉
 製造方 中 野 片 吉
 留守居方 飯 島 慶 次 十五
 壹人積 右之外中間小者休之者六人
 右之分酒井紀伊守家來に預

候

一廿五日夜小山島津様御屋敷保科彈正忠様松平伊豆守様間部下總守様御人數ニ而取巻居候處何方に潜伏居候哉切テ出右
 人數之内伊豆守様御人數打合ニ相成御同方九人打死有之候由何方に立去候哉相分不申候

芝築地同朋町之者

重 兵 衛

右之廿五日小具足着生首一ツ提步行候由酒井家より兼而廻し者ニ入置候由

品川宿問屋場に出役

御代官手代之者

右者品川宿出火ニ付取消候様差圖仕候處浪士より殺害ニおよひ候由

一浪上之分鮫頭より船ニ而退出候處公邊御軍艦相廻居候付直ニ羽田方上陸夫より二子渡相渡稻毛之方に逃去候由

一右之内溝之口宿ニ申所ニ而五人取押昨廿六日笹田ヶ谷宿迄連越候由其余之分甲州路に逃去候賊三島邊より逃去可申

公邊御役々手を盡し御尋之由

右之通承込申候間申上候以上

十二月廿七日

水 野 大 三 郎

〔時體探索書〕

慶應三年 慶應三ノ卯十二月廿七日仕出江戸御留守居方物書ヲ御國御奉行所御物書へ之下廻

今日履被差立候付得貴意申候一昨廿五日朝五時比三田薩州侯上屋敷出火之處不穩風聞ニ付段々探索として罷越候處通
 りハ金杉邊將監殿櫓其外所々撤兵隊等初相固居火元近クニ寄付出來兼火燃之内ニハ大小之炮聲も相聞所々之物見ふと

ハ腹巻杯ニ而横行いたし夕八時頃ニ至り右御屋敷ハ大概及鎮火所々之人數も引上ケ候付漸往來も出來候付外使等探索いたし候處惣薩州侯屋敷内へ浮浪多潜伏所々暴行之候内去ル廿四日夜酒井家廻方芝七曲りそばや跡屯所ニ相成居候處同所ニ數人罷越炮發いたし多分怪我人も有之候由右一條急ニ事起り候哉廿五日未明酒井家人數ハ薩館取圍居段々談判之上双方發炮ニ相成及出火大分之間争ニも相聞其内御屋敷横銅門より多人數切抜ケ候處同所間部下總樣御人數相固メ居候付御人數も余程手負も爲有之趣ニ相聞右切抜候五六拾人之徒ハ田町通品川を出候由右之者とも相を隠候ためか所々放火いたし候内田町御藏屋敷向町家に放火いたし候付早速表御長屋筋不殘御類燒御藏々々ハ無御別條恐悅龍口も有合之御人數田町に被差出候へ共不斗向家カ燃上り候付馳合不申殘念ニ御座候尤薩藩ハ少ク浪士多潜伏いたし居候趣ニ御座候右御屋敷内へ燒死又ハ首無之死骸拾二三有之馬壹疋鐵炮ニ而被討半死ニ罷成り居申候生捕も三四拾人有之候由是ハ至而下賤之者ト相見候由ニ承り申候品川に逃去候者共ハ多分舟屋神奈川方へ罷越候哉も時御座候先荒増申上候委細ハ御用狀ニ聞取書添居申候間御承知可被成ト略仕候三田小山島津淡路守様御屋敷も同時ニ燒失高輪屋敷も外側燒失御殿ハ残り居昨日カハ獵ニ見物入込闇面又ハ釘隠金物等ハ夜中盜取候趣ニ御座候日比谷衣東屋敷且御菩提所をも燒拂ふト評判仕候其後ハ何ぞ相替候儀も差而無御座只々物騒之上吳服橋ふと締切ニ相成困り申候何も取紛略如是御座候已上

極月廿七日

御留守居方
物 書 中

御奉行所

御物書中様

右ニ付京地方寫來候書付

今廿五日朝五時比芝三田邊出火薩邸之趣ニ付直様嘉三郎爲探索右邸近傍罷越見請候ニ成程薩邸ニ相違無之途中承合候

處炮戰之様子ニ付右邊へ罷越候頻ニ炮聲其數相響段々近寄候處薩邸ハ皆一圓之焰火ニ相成其中ニ而炮戰最中何方炮發彈玉如兩近付候事ハ難出來其儘罷歸申候右根元體ニ相分兼候へ共先達カ常野邊之賊徒大分薩邸に入込候趣ニ付今曉右邸に公邊カ討手被差向賊徒引渡可申由被仰付候處一向相渡候無御座候付夫カ右様之事ニ相發候趣御座候實ニ不容易動搖成行恐愕之至奉恐入候

右尼崎藩江戸表カ報告

右一通十二月三十日手ニ入候也

今廿五日朝辰之刻頃芝邊三ヶ所一時之火之手揚り全く出火と相心得皆々駆付候處虎之御門新橋其外御門々甲冑ニ而嚴重之御固メ通行相成不申追々様子承候處薩州屋敷并島津屋敷カ而四藩酒井勢公儀勢被取卷鐵炮合戰と相成或ハ首桶又之槍之先首を貫キ火中メて江戸中何れも上を下へと騒動いたし死人怪我人數不知芝邊之町人逃參候御加勢追々御繰出相成申候家業も出來不申取遣無御座今年之大變之年柄ニ而此治り方如何相成可申哉未讀火不申是全大亂之初と心配仕候此段極内々爲御知申上候

右之町飛脚カ尼崎藩に申來候由御座候

十二月廿日

〔慶應四年明治ト改元
京都江戸返達御用狀扣〕

正月四日河口より 同十一日着

妻木多彌殿より青地源右衛門聞取書寫

江府横行之賊徒薩邸ニ潜伏之踪跡者野州出流山ニ而召捕候草賊白狀并大久保出雲守陣屋を犯し候暴客共被召捕白狀之趣符台候付市中巡邏役酒井左衛門尉方カ薩邸に使者を以右潜伏之者御引渡有之度及懸台候處左様之儀者無之段堅く申

慶應三年

七五五

立即夜廿三日 庄内ノ屯所を襲撃庄内方ニ者不意を出ラレルヲ以暫解散して避之翌廿四日應援願出候付遊撃隊若干歩兵撤兵一大隊宛御指向廿五日四時方薩邸に侵入大勝利を得右兵十餘人宛之打取有之降參茂夥多之由晝九半時頃戰事濟寄ニ相成候所ニ而報告來ル

但同日品海碇泊之薩艦一艘を茂打沈メ候由眞偽未タ曉トハ相分不申薩邊兵猶末家島津淡路守邸中ニ三百人餘屯集罷在候由

十二月廿六日本藩世子喜廷鶴崎を發し佐賀關に至りて乗船す

〔機密間日記〕

一筆致啓違候雖甚寒之節御座候 太守様 上々様益御機嫌能為遊御座奉恐悅候 若殿様益御機嫌能去ル十八日大津被遊御茶屋に 御着候迄之御儀者同所方申上候通ニ御座候同十九日朝五時之御供揃ニ而 御發駕的石御茶屋ニ而御膳等被召上夕八時内牧御茶屋に 御着同廿日朝六時之御供揃ニ而 御發駕御忍ニ而阿蘇宮地に 御社參坂梨御茶屋に 御晝休ニ而夕七半時過久住御茶屋に御着同廿一日朝六時之御供揃ニ而 御發駕今市中川修理大夫様御茶屋 御晝休ニ而夕七時過野津原御茶屋に 御着同廿二日朝五時之御供揃ニ而 御發駕夕八時過鶴崎御茶屋に 御着御様子有之昨廿五日迄同所に 御滞留今廿六日朝五時之御供揃ニ而 御發駕七時前佐賀關御茶屋に被遊 御着彌以御機嫌能御膳等御快被 召上重學奉恐悅候同夕七時之御供揃ニ而萬里丸に 御乗船被遊 御渡海宮御座候此段為可申上如是御座候恐々謹言

十二月廿六日

寺尾九郎左衛門殿列

有 吉 清 助 列

右寫十二月廿八日御用人方違有之候事

〔京都返達御用狀扣〕

十二月廿六日松本より様書

追懸得貴意申候今朝御表より急飛着田上鐵之尤も到着御家老衆より之御用狀一覽仕候處探生益田勇去十九日京都出立筑前之蒸氣船より廿四日ニ歟熊本着之由其子細之京都表之儀一旦之薩之勢ヒ甚盛ニ而已ニ事破ニ茂可及處此方様諸藩被仰合候而之 朝廷御建白越土邊茂殊外同意ニ而九州一般大躰之其議ニ成只今之姿薩計孤立之躰ニ相成候よし右様之次第ニ而此節一刻も早御登京被為在候方至極之御都合との事ニ而今朝俄ニ佐賀關に御發達被仰出候先々至極之御都合恐悅之至ニ而委細何も御承知之御事ヒ奉存候得共兩三日鶴崎御滞留今日佐賀關に御發達之次第為御承知御供揃前暫時御茶屋ニ而閑を得此段計勿々申上留候以上

十二月廿六日在京我藩重臣は諸藩の同意を得十一藩連署して徳川慶喜召命猶豫の建白書を上る

〔林新九郎日記〕

一 同(月)廿四日晴、内府公大坂方登京之儀 朝廷之平田ヲ糞候ニ付建白ノ談ニおよぶ坂彦(坂本彦)筆ヲ執ル老大夫(溝口)ノ命ニ因而藤堂歸雲に訪面話ニおよぶ
一 同廿五日雨晴、建白ニ決し當日圓山ニテ十藩ヲ會し其談判ニおよぶ
一 同廿六日晴陰交、御建白持參 御所に出る五條公に献ス歸途六條公父子に拜謁兩公菓子ヲ賜ふ其夜京極藩方もらふ御菓子ニ加へ宿狀を認官脚ニ仕出

〔新録自筆狀〕

慶應三年正月

(十二月廿八日附溝口三宅より惣連名充書翰に添附せる稜書の一節)

一内府公御上京之儀愈以切迫ニ相成既ニ中三日を限成功を奏候様去ル廿二日御沙汰ニ相成(中略)此一條之初發尾越兩侯尤御盡力有之積り御内沙汰之趣御引切書御願下ニ相成去ル廿五日ハ兩侯共御下坂御座候餘程御見留之筋も有之候ト被考此節ニ成功御受合位之御様子ニ候得共外向ハ何分不安意ニ有之強而御差迫ニ相成候ハ、又々混雜ニ立至り可申其餘之御變革筋も少之寛急之御差別無之候而之如何成行候も難量ト咄合居候内徳川内府宇内之形勢云々之御沙汰有之候付旁建白之草稿出来去ル廿五日於丸山諸藩重役打寄邊談判候處何方も至極同心ニ付一昨廿六日御假建へ持參上參與衆へ相達申候

〔全書〕

(十二月廿八日附木村得太郎より奉行中充書翰の一節)

一去ル廿五日圓山放阿彌ニ而諸藩大會相催三宅方并御留守居小生も罷出猶又御建言之草稿持參咄合候處何方も同意ニ付別帛之通御連名ニ而差出申候

〔王政復古帳〕

於 朝廷萬機御裁決被遊候付而ハ博く天下之公論を被爲探候間心附候儀ハ不憚忌諱極言仕候様との趣委曲 御沙汰之旨難有奉畏候就而ハ不束之存意ニ候得とも默止罷在候而ハ御趣意ニ違却仕候間乍恐左ニ言上仕候去ル九日以来稜々大非常之御變革被 仰出候付而ハ一旦混雜ニ者及候得共御變革之柱礎者相立候形ニ付此上者精々被爲盡衆議名實相反不申候様御施行被爲在度舉而奉懇願候内徳川前内府公輕隊ニて速ニ御上京有之候御内沙汰被爲在候趣ニ傳承仕御同方者疾御了解之御様子ニ付素より 勅意之通御心得可被成候得共即今之形勢臣下ニ取候而は御上京之一條何分心遣ニ堪兼

候は必然ニ而又々紛擾難計夫も丈け々々之忠心より出候譯ニ付其儀者 朝廷よりも深御洞察御猶豫被爲在度殊ニ徳川家者癸丑以來失體之稜も不少趣ニ候得共右者専先代ニ關係いたし候儀ニ而當公ニ相成候而ハ二百五十年來の政權職掌被奉辭候も一意ニ 朝廷之御爲筋より發候御果斷ニ候得者今般更始御一新之折柄惣而人心之動搖ニ係候儀者成丈御辭酌被爲在漸を以復古之御政體御取堅ニ相成候様被爲在度奉存候一句ニ公平正大と申候而も時所位ニ因而寛急之差別も無之候而ハ相成間敷追々難有被 仰出も有之候得共何分今日之形勢ニ而者約り列藩割據之姿とも成行可申哉加之外國之觀觀茂難計皇國治安之譯を以却而皇國を傷害する之筋ニ相成候而ハ全體之御趣意ニ致相違苟も祖先より 王化ニ浴候身分實ニ泣涕憂苦ニ堪不申戰兢罷在候依之由莽を不省差當危急之條々廟堂御衆議之端ニも可相成哉と申上候三人占時ハ二人言ニ從と申古語も有之何卒其員ニ御加被下一刻も御鎮撫之御處置ニ相成猶此上之儀茂衆議之所歸を以御裁決被爲在萬民安堵之場合ニ至候様重疊奉願上候誠恐誠惶頓首敬白

十二月廿六日

松平阿波守内

長江播磨

松平美濃守内

久重四兵衛

松平陸奥守内

但木土佐

細川越中守内

三宅藤右衛門

藤堂和泉守内

藤堂歸雲

右馬中務大輔内
 山村源太夫
 立花飛騨守内
 藤谷小六兵衛
 丹羽左京太夫内
 増子現藏
 松平肥前守内
 酒井平兵衛
 宗對馬守内
 平田爲之允
 溝口誠之進内
 窪田平兵衛

十二月廿七日旭門前に於て薩長藝士四藩の練兵天覽あり

〔坂本彦兵衛覺書〕

十二月廿六日

一今朝幕監梅澤孫太郎方并津藩ノ老臣藤堂歸雲不計孤雲邸來訪終日酒宴ニ而一旦歸リニ成候處夜四時分梅澤方猶又相見
 明朝旭御門前ニ而兩三藩之兵隊練練ヲ天覽被仰出扱其天覽相濟候上右之兵隊を以奉守護直ニ薩州御巡幸と申事只今承
 り如何いたし可然哉ト相談ニ付左様之儀ハ決而有之間敷萬ニ一ツ之儀茂有之候ハ、諸藩座視傍觀ハいたす間敷此御右

舛疑似之譯を以聊ニ而も是より手を出候而ハ大ナル禍を引起可申是限ニ而他言無用ト返答

(同廿七日の内)

一今日旭御門前ニ而兵隊練練天覽薩より千六七百長より五六百藝より百六十士より六七十出候由薩よりハ大炮も出候由

〔慶應丁卯年 一新録自筆狀〕

(十二月廿八日附溝口三宅より惣連名充書翰に添附せる稜書の一節)

一昨日之旭御門前練練 散覽薩方千六七百長方六七百藝方百計士方六七十薩方之大炮も出候由ニ御座候月迫ハ申ニ不及
 主上いまた諒闇中殊ニ今日カ 先帝御法事も有之候由彼是何方カも疑惑を生懸念之次第も御座候處先無子細相濟安心
 いたし候全兵威を示ため之企と被考願童戯ニ屬候取扱と致誹謗候向も御座候

十二月廿七日三條實美等五卿入洛し直に參内す

〔慶應三年正月ノ字 京都返達御用狀扣〕

十二月廿八日 河口より

三條實美卿御以下入洛ニ付而之御留守居書上一通差上申候以上

三條實美卿御以下去ル十九日筑前太宰府御發途翌廿日迄同國箱崎に御留廿一日同所カ薩蒸氣船に御乗移直ニ御發帆
 廿二日下關御旋泊長府清末世子に御對顔廿三日三田尻ニおゐて大膳大夫様御父子へ同斷廿四日同所御出帆廿五日浪花
 御着薩邸に御止宿廿六日淀川御登舟伏見土州邸に御泊一昨廿七日無御滞御着京直ニ御參内御歸殿之上御供之藩々にお
 祝ひ之御酒肴被下置候段今度御征臣秋吉又叻古閑富次カ申出候間此段相達置申候以上

十二月廿八日

御留守居中

河口 權兵衛 殿

十二月廿七日日本藩澤村八之進に軍勞を賞する旨を達す

〔江戸京都來狀扣〕

一陣刀一本

一馬上銃一挺

一御紋附木綿御上張一

澤村 八之進

右者去年七月小倉戰爭之節所々應援等指揮行届格別骨折相働致辛勞候付被下置旨昨廿七日申渡候則御受書一通差進申候

十二月廿八日

三宅 藤右衛門
溝口 孤雲

御家 老宛
御中 老宛

十二月廿八日三條實美伊達宗城議定に東久世通禧上ノ參與に中沼了三廣澤兵助井上聞多下ノ參與に任ぜらる

〔慶應四年正月、明治ト改
京都江戸返達御用狀扣〕

正月四日河口より 同十一日着

三條様初議定參與被仰付候付而之書上一通指進申候以上
卷込

右之通舊臘廿八日被蒙仰候由ニ付此段相達申候以上

議定 三條前中納言様
伊達伊豫守様
參與 東久世前少將様

御留守 居中

正月三日
河口 權兵衛 殿

〔慶應丁卯年
一新録自筆狀〕

〔十二月廿八日附木村得太郎より奉行中宛書翰の一節〕

五卿も昨廿七日御入京直ニ御參内ニ相成申候三條卿議定東久世様ハ上ノ參與長州人も兩人下之參與被仰付候御書附奥へ差出置候間御取下御覽可被下候公明正大ハ表向ニ而裏突込甚敷半時も油斷成兼申候其他之近情機局方校書を以奥方差廻ニ相成候間御一覽可被下候

〔御書附寫〕

三條前中納言
宇和島少將

右上之參與

學習院儒

東久世前少將

右議定

中沼了三

慶應三年

七六三

長洲藩

廣澤 兵助

右下之參與

前書之通被仰付候 思召ニ付此段一應御沙汰候事

同

十二月

井上 間多

十二月廿八日德川慶喜書を德川慶勝松平春嶽に與へ奉命の意を復命せしむ

〔防長回天史〕

二十六日尾越二老侯下坂して朝命を傳ふ慶喜連に之れに承服し二十八日書を二老侯に與へ奉命の意を復命せしむ晦日二老侯參内復命す

(慶喜の書)

辭官之儀は前内大臣と可稱御政務御用途之儀は天下之公論を以て確定可被遊との御沙汰之趣謹承仕候段可然可被申上候事

(同)

御政務御用途之儀は天下之公論を以て御決定皇國高副を以て相供候様不相成候ては臣子之類撫行届不申容易に御請も難申上候間其段厚御心得御盡力有之様致度候事

十二月廿八日日本藩世子喜廷大坂に着す時に德川慶喜會見を求むれとも辭して見せず

〔新録自筆狀〕

明治元戊辰年

(正月四日附三宅藤右衛門より家老中老宛書翰の一節)

鬼塚嘉太郎今四日早打ニ而被差立候付申達候 世子君益御機嫌能舊臘廿八日大坂御着岸元日迄同所御滞留二日牧方御一泊昨三日晝時分 御着邸被爲在奉恐悅候(下略)

〔池邊悰右衛門日記〕

同(十二) 廿八日 世子御着船之段申來る早速歸邸之處既ニ御上陸相成居直ニ被召出京攝之勢林一同言上御供中無異軍次御附役被仰付御供其外關之助茂右衛門遠山等何をも安着

〔淺井鼎泉記錄〕

十二月晦日大坂へ御着之處天保山沖東風強く浪高かりしかは漸の事ニ御上陸日暮頃中比島御邸に被爲入此夜永屋伊平當直ニ罷在候處御國の諸役(池邊京都御留守居、助勸林新九、櫻田惣四郎益田藤彦等なり) 交々參邸して慶喜公御待に付速に御登城被爲在度段頻りに言上し且慶喜公よりも態々御使者被遣候て御對顔の儀被申進候得とも世子に御決心は今度御名代ニ御上京らせらましは 朝廷の召に應せらまては御事なるニ當時 朝廷に御疑茂有之慶喜公に私の御謁見ハ御本意ニ不被爲在旨ニ重役の面々にも御諮問の上永屋及御使者として 世子に御旨意逐一同公ニ被仰進候處永井主水殿承知して直ニ上申相成候處同公よりも至極御尤ニ御聽取被成候段被仰聞於是邸内議論百出 世子に御苦慮實ニ難申盡(下略)

〔林新九郎日録〕

慶應三卯五月起筆

同(十二) 廿九日晴陰交、夕刻永屋(猪兵) 世子御登城之儀ニ付世子之尊慮嫌疑云々之趣爲言上御城に罷出候ニ付池邊と共に同道登城永井監に拜謁詳ニ情狀申達御聞濟ニ付罷歸る晚鎌田來ルニ付寛話

〔坂本彦兵衛覺書〕

正月元日

慶應三年

一世子大坂御着早速内府公より御招へ付従前より而候得者御促致不待直様登坂拜謁致も奉願候儀勿論候へとも此節は朝命を奉り上京之途中殊に先達而御所二條之御間へ混雜出來其末御届限にて御下坂被爲在候趣承知仕左様の折柄公務を後として私を先よめる形に相成候而ハ於右京大夫處置之宜致失候而已ふらす内府公の御爲よを乾と宜る間敷依て先つ上京 朝命致奉りして後致下坂内外とも公然致盡力舊來の洪恩聊も而も可奉報との趣委細使者を以言上之處内府公も御感服有之候由

十二月廿八日日本藩林新九郎京都より大坂に下り池邊悰右衛門と共に徳川慶喜歸洛の爲めに奔走す

〔坂本彦兵衛覺書〕

十二月廿七日

尾越兩公此節之儀萬一御成功にいたり不申候ハ、是限御拒絶其儘坂城御滯之御覺悟に相成候由若哉左様之時にも立至り候而ハ忽大亂に付何卒此上ニ茂百苦ヲ凌御周旋有之内府公ニ茂益以御自重御恭順被爲在度其邊之儀盡力且不違世子御着坂之比合ニ茂相成候付時休言上旁今日より林新九郎を大坂表に被差越

〔池邊悰右衛門日記〕

同(十二) 廿八日今曉林下坂急し御歸京懸念之儀持來依て同道越之酒井を訪越老侯之御存意相尋勿論同様之御掛念にて夫々手續取調之上御歸京之積のよし

〔林新九郎日録〕

同(十二) 廿七日晴暖、朝飯後下坂之違有之政府ニテ木村に面會相尋候處尾越兩侯下坂内府降官削封之兩條持參ニ而上

京御勸之由ニ付老夫(溝口)當時之形勢ニ付直ニ内府上京懸念との事ニ而越公藩に懸合篤斗承合候様との事ニ付未ノ

刻京發程薄暮着伏直ニ乗船鷓鴣比着坂

一同廿八日雨、朝飯後池邊申談坂城ニ上り坊主部やニテ越公ヲ見ル夫方酒井十之允に面會右之儀聞籍候處太夫同案ニテ直ニ内府登京之運ひニ至兼候段引取候内世子御着坂之報告有之候ニ付馳歸幕過拜謁被仰付事情詳ニ言上池邊と一同也 晚田上に寛話

十二月廿八日三條實美四條隆調東久世通禧各使者を我藩邸及び秋吉又助等の旅館に遣して歸京を報し且つ在筑以來の厚意を謝す

〔京都並江戸返達御用狀控〕

甚寒之節御座候得共彌御安泰被成御座珍重之御儀被存候然者先年以來太宰府滯在中者長々不容易御厄介ニ被相成厚忝被存候此度結構被蒙仰昨廿七日無滯歸京被致候間不取敢以使御挨拶被仰進候事

三條殿御使

丹羽 羽 豐 前 守

十二月廿八日

前侍從殿昨廿七日無滯入洛直様參 内被仰出畏被存候且宰府滯在中今般歸洛等ニ付種々御手数敷深忝被存候不取敢御吹聴且御挨拶被申入候事

四條殿御使

橋 本 和 泉

十二月廿八日

東久世殿御者使

七六七

渡邊 衛

右者主人長々太宰府滞在中不一方御世話ニ被相成今般無滞歸京ニ付而茂御預御各藩中段々御手厚御世話被下候間一々御邸々々罷出御厚禮可申述之處御各邸懸隔之事ニ付乍略儀私共類役旅宿々々迄御禮被申進候間其筋に宜御達仕吳候様演舌致候事

十二月廿八日

秋吉 又 助
古閑 富 次

十二月廿九日舊幕府は新鴻開港につき外人歩行區域を定め且つ外人との間に事件の發生せる場合を豫想し令して警むる所あり

〔公義御法度書控〕

小笠原壹岐守殿御渡候御書付寫壹通相達候間被得其意無滞順達留より木下大内記方に可被相返候以上

正月四日

大目 付

細川 越中守列殿宛

右留守居

此度新鴻開港相成候付而之外國人共同所より凡十里之間歩行可致ニ付若外國人に關係致し候引合之者有之節之新鴻奉行差紙を以呼出し相尋候儀も可有之候間其段兼而相心得不都合無之様可致候
右之通新鴻最寄御料私領寺社領共不洩様可被相觸候

十二月

右之通可被相觸候

〔續徳川實記〕

廿九日(十二)月、越後國新鴻開港外國人引合令

(令達文は之を略す)

十二月廿九日三條西季知使者を我藩邸に遣して歸京を報し且つ在筑以來の厚意を謝す

〔京都並江戸返達御用狀控〕

昨夜三條西前中納言様御使者山本右膳罷越候付後藤彈助應接致候處右膳口上之趣者中納言殿ニ茂昨廿七日無滞歸洛直ニ參 内を茂被致候由然ニ筑前太宰府表ニ於てハ長々不一方御世話ニ被相成且此節歸洛ニ付而も守衛之御人數被差出彼是厚忝被存候依之御挨拶御使者を以被申述候間御國許にも御序之節可然様御傳達被下候様且又御守衛之面々茂一々御挨拶ニ相成候管之處御多數之事ニ付其儀被届兼候間是又可然様御頼ニ相成候段申述引取候付此段相達申候以上

十二月廿九日

御留守居 中

河口 權兵衛殿

十二月晦日我藩在京當局は江戸に於ける薩藩邸討伐事件の此地に波及せんことを慮り朝暮の間に奔走して調停につとむ

〔新録自筆狀〕

明治元戊辰年

正月四日自筆ニ卷込有之候

稜書

慶應三年

一 舊臘廿五日江戸表芝之薩邸兵火之様子町飛脚より尼ヶ崎に報告等三通之趣同晦日之夕相聞候付而者京地へ茂致連及阪城と薩州兵端相聞ケ可申哉之心遣不少不取敢青地源右衛門ハ梅澤孫太郎殿へ差越決而旗下を暴動無之様申入津田山三郎ハ御所に差出 朝廷々双方御鎮靜被爲在度との儀下之參與に申談孰も至極同意ニ付上之參與衆へ申入候由尤薩藩之事柄ニ付最初ハ態々岩下佐次右衛門ハ相省申談濟之上只今之會談者如斯之次第ニ候尊藩へ之定而委細之報告も爲有之ニ而可有御座と相尋候處御話ニ而初而致承用候と驚愕之弊も無之江戸之邸ニ之惣而引拂屋敷番位居殘候由申聞候由ニ而津田之致退朝孤雲御小屋へ罷越急ニ事破ニ及候勢ニ之無之段申出候

一元日以来追々相聞候趣ニ者舊臘廿四日常野へ屯いたし居候浪士多勢薩邸に入込候を旗下より相渡候様懸合候得共不相渡其いさゝひより戰爭ニ相成旗下散々敗走ニ付翌朝猶又押懸打勝遂々薩之四邸とも燒立候由尤其前之西丸 天障院様御女中部屋より火起り致炎上候由右ニ付不審之女中被召捕置候由いつき前條之浪士并に調合居候女賦ト考察之唱專ニ候事

一 廿五日之事ニ候哉品川沖へ繫有之候薩艦を回天丸へ致發炮候付五ニ炮戰相始り遂ニ薩艦を打沈候由

一 常野之浪士薩邸へ入込居候由相聞候付薩々蒸氣船を差廻引拂せ候筈之處未々廻着不致内前條之次第ニ相成甚殘念之由薩人ホノマ 山田五次郎へ相話候由(下略)

〔坂本彦兵衛覺書〕

十二月晦日

世子正月三日ニ御上京と申來

(中略)

一去ル廿三日江戸西丸燒失右ニ付而ハ段々疑惑之唱も有之候折柄芝ノ薩邸へ浪士并に之の多數入込居候由相聞候付旗下

より相渡候様懸合候得共不相渡廿四日其いさゝひより戰爭ニ相成旗下之士散々敗走ニ付翌廿五日之朝猶又押懸遂ニ打勝薩邸ヲ燒立候由注進有之候付若哉夫より京地に連及いたし幕薩爭ヲ開候様ニも相成候而ハ此砌猶更大切至極と心遣致し不取敢青地源右衛門ハ幕監梅澤孫太郎殿に罷越決而暴動無之様精々申入津田山三郎ハ御所に罷出双方鎮靜ノ儀朝廷より御世話被爲在度ト下ノ參與ニ而申談候處何方モ至極同意ニ付委細上ノ參與ニ申達置候

十二月某日長岡護美召命を辭す

〔尊攘錄御建白御國議、一新錄自筆狀〕

慶應丁卯年

今般奉蒙重大之 勅詔不肖之一庶子誠以難有仕合奉存候然ルニ方今天下之人心洵々刮目而奉窺御新政候折柄不肖之私以 勅命被爲 召候儀天下之所見恐縮慚愧ニ堪不申素より何之定算茂無之候得者於 朝廷聊御裨益ニ可相成様茂無御座微衷何分ニ茂安兼決然奉固辭候外更ニ不知措置只々奉恐入候尤國議之次第ハ此節右京大夫登京仕候間巨細之儀同人并ニ在京之重役共工御下間被成下度奉願候就而者即今 御召之儀何卒御憐愍之筋ヲ以御猶豫被 仰出被下候様泣血奉嘆願候間此旨可然様御執奏奉仰候誠恐惶頓首敬白

十二月

長岡良之助

明治元 年正月朔日本藩世子喜延病を以て大坂に滞在す

〔一新錄自筆狀〕

(慶應四辰正月四日京發早打發鬼塚嘉太郎持參之稜書節略)

世子君益御機嫌能舊臘廿八日大坂御着岸元日迄同所御滞留云々

〔淺井鼎泉記錄〕

明治元 年

世子(喜)には御船中以來御風氣にて被爲入候ニ付慶應四年正月一日丈ヶハ大坂ニ御滞留被爲在(以下正月二日につづく)

〔故護久公御事蹟調、淺井鼎泉說武藤嚴男記録〕

世子御風邪に在せられ且天保山沖波荒く荷揚延引にて御滞坂云々

正月二日日本藩世子喜廷大坂を發し京都に入らんと欲して枚方驛に宿す、舊幕及び會桑二藩の兵士等亦喜廷の從士に混して同驛に宿泊す

〔淺井鼎泉記録〕

二日(正)御發途(喜)の處同地より枚方までの間ハ幕會桑の人數許多押登り居候ニ付御途中の混雜云ハん方なし枚方御着の處御供丈ハ宿の中央に宿を取り候得とも其前後左右は幕會桑の人數相混して宿泊致し煩き限りなし此夜鼎泉當直にて罷在候處永屋(猪兵)御本陣に罷出て此混雜に乗して或ハ京地より夜襲を懸け候哉も難計ニ付御注意有之度段申出候ニ付此地北ハ大川を扣へ南ハ八幡山の山脈に接す其山間に寺あり相應の要地に有之候得者萬一の時ハ彼寺に御立除可然と申て永屋同道見分に參り候處永屋一見して成程御立除所にハ最も適當の處なりとて大喜ひ致し云々(以下正月三日につづく)

〔坂本彦兵衛日記〕

世子今朝(正月)大坂御發之處華城之兵數千太鼓其鳴らし喇叭を吹き會桑の重士は多く甲冑を披身之劍鎧提げ前後致充滿候ニ付様子相尋候處内府公近日 朝廷より被爲召多勢御引卒は不穩候間先供之撤兵隊等上京と返答ニ付無頓着其際を御通行有之然るニ右之兵隊は今晚枚方一宿と申事ニ付徒上其馳せ 世子御泊之儀兼而約束相定置候趣を以幕吏へ懸合せ候處可相成ハ御同宿申上度と折入て懇談ニ付強て斷も出來兼右驛之半其割て是ニ與へらる(以下正月三日につづく)

正月三日徳川慶勝松平春嶽に坂兵を退去せしむへしとの朝命あり

〔王政復古帳〕

一昨三日於 御所御達ニ相成候御書付寫貳通御達仕候以上(一通の書付は) (次の條に掲ぐ)

正月五日

三宅 藤右衛門 殿

津 田 山 三 郎
青 地 源 右 衛 門

尾 張 大 納 言
越 前 大 藏 大 輔

昨日より今晚ニ至り阪兵戎服大砲等携追々伏見表出張之趣如何之儀ニ有之候哉不容易進退其儘難差置は勿論ニ候得共尙前々周旋之筋も有之旁右人數早々引拂候様取計可致候若不奉命候得者不被得止之場合ニ付爲朝敵を以テ御處置可被爲在候事

正月三日坂兵上京の報頻に至るを以て薩長土藝四藩に命して伏見方面の防禦を嚴にせしめらる

〔一新録探坂報告〕

薩 州

坂兵出張不容易趣追々言上ニ付猶又伏見表防禦筋精々盡力可有之尤早々人數相加嚴重警備可致被仰出候事

正月

追而長土藝に茂同様被仰付候事

明治 元年

(本文書日附なければとも探索報告に前條の尾張大納言、越前大藏大輔二人への達文も共に一紙同筆にて連載しあり依て此に掲ぐ)

正月三日我藩兵寺町門の警衛を嚴にす

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人数 從元治元年 坂本彦衛調の内)

同日(正月)

一内府公上京ノ先供ト唱會桑ノ人数多勢鳥羽伏見兩道ヨリ推來不穩趣相聞寺町御門固場へ番頭以下追々人数繰出同日夕刻ヨリ右兩道共兵端相聞同七日大坂落城迄京攝間晝夜戰爭依之右警衛彌以嚴重申付

〔一新録自筆狀〕

正月四日自筆ニ卷込有之候

稜書(抄略)

(三日) 一寺町地場御人数之上ニ下津縫殿組共澤村八之進組半分大筒片手池部御物頭組共被差出候事

正月三日三條實美伊達宗城議定に任せられ東久世通禧德大寺實則等參與に任せらる

〔王政復古帳〕

三條前中納言

伊達伊豫守

東久世前少將

議定御役被 仰付

參與御役被 仰付

右之通御留守居方達有之候事

正月三日

〔京都並江戸返達御用狀控〕

正月九日河口より 同廿四日夜着

(前略) 別紙之通可相達旨參與衆被申渡候仍申入候也

參與

正月五日

役所

紀伊中納言殿

家來中

但別紙二通也

德大寺中納言

新源中納言

前修理權太夫

四修前徒從

穗波三位

坊城侍從

明治元年

參與助役被 仰付

(中略) 別紙之通參與御役所方申參候付右寫一通御廻達申御順達之上御廻留方御返却可被下候以上

紀伊中納言門

正月五日

御次第不同

横井次大夫

大橋左衛門

中島三郎右衛門

加賀宰相中將様

松平陸奥守様

細川越中守様

松平美濃守様

松平因幡守様

七七五

松平 備前守様

藤堂 和泉守様

御留守居中様

(中略)
春日讃岐守列々知せ來

久我様方——然者中納言殿昨日參與職御役被蒙 仰候
仍此段爲御知如斯御座候以上
正月四日

正月三日我藩老臣溝口孤雲は松平春嶽の委囑を受けて大坂に至り舊幕府吏に對して其の兵士を歸坂せしめんことを勸告し又池邊悰右衛門櫻田惣四郎は伏見に屯集せる會桑及び舊幕兵に歸坂すべく談判すれとも何れも要領を得ざりき

〔溝口孤雲瀧旅中勤勞稜書〕

一正月二日之夜越邸より口上使を以孤雲に只今之内致參邸候様被仰越候付直様罷出候處華城より數敷人數繰出之趣相聞候處一刻茂下阪引戻之儀致盡力候様存岳候より御領談ニ村早速罷歸致用意之内役々打寄今晚ハ 世子牧方御泊ニ而明日成丈速ニ御着京無之候而ハ如何様之都合ニ成行候も難計其趣騎馬物見へ申合差立跡ニ而精々致評議候處華城迄ハ路隔々根本に盡力之内出向キより事破レニ相成候而ハ詮ふき次第ニ付池邊悰右衛門櫻田惣四郎は會桑屯集之伏見に手を附可申ト相決翌三日曉七ツ時過各東西に發足

但孤雲儀着坂之上閣老初大小之監察等に數度再應及說得候而も一切貫キ不申折角之盡力水之泡と相成且滯留中追々敗軍之報知も有之候へ共更ニ驚キ之弊も無之甚不審之由悰右衛門惣四郎ハ於伏見先ツ會桑ト重疊及論判候へ共無殘處御深切深々辱く併此場ニ至り候而ハ最早致方無之ト返答新選組ニ致說得候而も同様ニ付一ト先ツ肥後屋ニ而一飯ト立寄候内戰爭ニ相成候由

〔全書〕

慶應四ノ正月四日大坂發早打御用狀

今四日大坂早打を以申達候 若殿様益御機嫌能昨三日夕八ツ時比被遊御着京奉恐悅候然之拙者儀時體之儀ニ付而致下坂如何様とそ周旋吳候様存嶽様御相談被爲在候間越ノ中根雪江土ノ深尾淵津ノ藤堂歸雲柳川ノ十時攝津など申談昨早天より爲周旋致下坂迄ニて 若殿様に御目通申上同所舟ニ乗組候尤鳥羽且伏見之様數敷會桑當り之人數と相見都而戎裝ニ而繰出居何様伏見當ニ而ハ事破ニ及可申と相考幕過着坂候然處京地之方ニ當り出火之模様ニ相見候間早速探索生御城に遣し承合候得共伏見鳥羽ニ而薩と會と炮戰夫伏見鳥羽邊出火と相成たる位之事ニて委敷分兼候間御留守居方颯波健太列早打ニ而伏見邊迄差越今日罷歸申候是以勝負等い才分兼候へ共別紙御奏聞之書付を瀧川様御持參上京之管候處 勅命無之而ハ入京難成と支へ候間引返ニ相成居候處後口を發炮いたし双方戰ニ相成すと幕兵手際不宜よし位之事ニ而何レ歟勝負且曲直も分兼申候右御奏聞之書付昨夜御渡ニ相成候間差寄馬場彦左衛門等打寄致評議候處實ニ重大事件殊ニ如何成御趣意歟得斗順逆之境も分兼右四藩爲斗申談候上登城可致と一旦約定いたし候處今朝榎本對馬守様孤雲へ急ニ御城に罷出候様御呼出ニ付罷出候處右奏聞之御書付を何卒 朝廷へ差上吳候様ニとの御領ニ付其儀ハ外藩差出候而ハ筋を得不申候間御親藩之内御差出之方可然御主意貫徹仕候之周旋之如何様共可仕と御斷ニ及候事ニ御座候右御書付末文御人數等之儀ハ舊臘十一日以來名分論を以申上候處尤ニ御聞取各別心配なしニ相濟申候是ハ孤雲及邸内之評決ニ而於京若殿様 思召之儀之如何可被爲在哉と申上置候事御座候將又今曉八半比薩御屋敷ニ落雷之如キ一發松屋二階立具も一々倒候位にて乍燃上り一間々々且庫毎ニ一發々々殘なく燒失全ク自火と相見人影一人も相見不申靜々たる様子御座候以後如何成接應ニ成行可申哉懸念此事御座候且又舊臘廿五日江戸表之儀も別紙寫之通及戰爭候事等有之如何なる紛亂を醸し成候も難計差寄御國許も屹御覺悟不被爲在而相成間敷と不取敢荒々早打を

以申達候事御座候今夕歎明日迄ニ之 若殿様御着座付而之御便通坂可仕其節猶委敷可申達と存候草々以上

溝口也

孤

雲

正月四日

御家老名當
御中老

猶々今日御城に罷出且諸藩應對ニて書狀認候寸暇を得不申他事を以得貴意候間不惡御没取可被下候以上

〔全書〕

慶應四辰正月四日京發早打鬼塚嘉太郎兵庫方汽船ニ而小島着持參之他筆狀京師變動稜書共

鬼塚嘉太郎今四日早打ニ而被差立候付申達候 世子君益御機嫌能舊臘廿八日大坂御着岸元日迄同所御滞留二日牧方御

一泊昨三日晝時分御着邸被爲在奉恐悅候近來者事體先之甘々候方ニ而御着座後御盡力筋之御運等段々致研究居候内

一昨二日之夜より又々不容易模様差起候付孤雲殿昨未明方下阪ニ相成池邊傍右衛門櫻田惣四郎ハ伏見に罷越其跡ニ而

伏見も鳥羽も頓而變動も初り可申哉之様子相聞候付 世子御通行甚以奉氣遣既ニ私儀者御打迎ニ罷出直見聞之次第

茂稜書之通双方人數之真中を御踏通其跡ニ而伏見鳥羽一時ニ戰相始り夫々今日迄之有様一ト通之是又稜書之通ニ候得

とも委敷儀之嘉太郎承知罷在候間直御聞取可被下候 世子牧方已來之御配慮勿論御一睡不不被爲在奉恐入候何良不

能委由嘉太郎に讓置候間御有恕奉願候勿々已上

正月四日

御家老殿宛
御中老

三宅 藤 右衛門

正月三日我藩溝口孤雲津田山三郎に參朝すへしとの召命あり

〔王政日新録〕(熊本縣 廳所藏)

自昨日至今日阪兵追々伏見表に出張其實如何難計候得共何分不容易形勢ニ付早々參 朝可有之總裁宮御沙汰候事

正月三日

參 與

溝口 孤雲殿

津田山三郎殿

正月三日日本藩世子喜廷权方を被しし京都に至り壬生の本藩邸に入り直に着京の旨を上申す

〔京都並江戸返達御用狀控〕

〔正月四日有吉井上青地津田江口より同十一日藩の來狀抄略〕
一若殿様一昨二日朝五時之御供揃ニ而大坂御發駕陸地御 越牧方被遊御止宿昨三日朝六時之御供揃ニ而同所御發駕夕八時

過益御機嫌能壬生御陣屋被遊御着恐悅奉存候

〔一新録自筆狀〕

正月四日自筆狀ニ卷込有之候

稜書(抄略)

一若殿様淀々鳥羽に御通行之節之(三日)會津勢及ヒ阪城之歩兵隊往還之横手田而ニ筒先を揃相備薩州勢之往還筋ニ是

亦筒先を揃相備居候付青地源右衛門御先ニ駈抜ケ御名様御通行ニ候殿方様御人數ニ而何之子細ニ而御繰出ニ相成候哉

相尋候處薩州勢ニ而薩州ハ洛中洛外巡邏被仰付置候處近日不審成者入込候由ニ付怪敷者之差留候ため人數差出置候由

御名様ニ之何之御如在も無御座候間被爲成御迪候様致返答道を塞居候薩兵往還之塘下ニ飛下り路を開折敷居向方參候

薩之大炮二挺共筒先御行列之方ニ不向様押直御通申上其場殊勝之體ニ相見候由扱 若殿様之八ツ時過壬生邸へ被遊御

着座候

〔京都並江戸返達御用狀控〕

若殿様御供松本彦作池田幸太郎より申越(節略)

大樹公近々御登京之御模様ニ而御先勢撤兵隊等一昨二日より二三千度追々大坂より御繰出ニ相成二日若殿様大坂御發駕後昨三日淀御小休迄ハ右之御人數跡先通行いたし關東右銃卒ハ大誠ニ而地押ハたし候人數も有之會桑重士ト見受候面々多クハ甲冑拔身之鐘を提下鳥羽御小休迄ハ其中を攪り割り御通行ニ而實ニ煩敷サ無申計候下鳥羽御小休に御注進之歩御小姓上鳥羽方立歸り申出候者上鳥羽へ薩長之人數大勢出張會桑之上京を遮候ため之由扱又伏見へも薩長之人數固居候段申出候よつて御供中携候鐵炮皆々玉込いたし無程下鳥羽御發駕被遊候付御道御案内として同所迄出役之青地源右衛門上鳥羽に引返薩人數之内へ及懸合候處此方様御通行ハ何之差支も無之候間勝手ニ可被成御通行此所ニ出張いたし居候子細ハ怪者上京を禁候様參與御役所より之御達ニよつて致出張居候段申出候付其中を無異儀御通行被爲濟候薩長之人數所々に押出居大砲數挺操出其外都而重上歩兵都而小銃を携敵を待懸候勢ニ而尤殺氣を含罷在候故頓斗戰場を御通懸被遊候心地ニ而實ニ煩敷サ無申計次第御座候

〔淺井鼎泉記錄〕

三日早朝枚方御發途の處幕會桑の人數も一同出發仕候ニ付御途中の混雜は昨日に異なることなし淀にて御小休有之候處三宅藤右衛門青地源右衛門其他數人御迎として同所に罷出居り一刻も早く御入京可然と申に付急き同所御發途被爲在鳥羽に御小休の時ハ混雜増々甚しく不容易形勢と相見候ニ付御供の面々皆携ふる所の小銃に矢込致す小枝橋に被爲懸候處川の北岸塘の下に在りし黒裝束したる兵隊此方に向て折敷銃に管を箠むる模様有之に付人を遣はして尋ねしむるに薩兵なりといふ怪しきもの通行致し候ニ付打拂ふべしとの命令なりと申たる由に有之候間見申候處成程 世子の御行列の右手原の中に陳羽織着たる騎馬の士壹人十人計りの供を連れ彼方に向つて進行中なり即ち幕の大監察榎本亨

造なり幕府より蒸立てたる使者なりし由なり小枝橋御通行の際ハ或は双方より發炮も難測と御供の面々心遣不一方此日非常の寒氣にて有之候得者鼎泉杯ハ殆んど手先の感覺を失ひたる程に有之候願て御供の面々の血色を見れば滿面紅色を呈して麗敷相見へ上下とも一段の勇氣を添へたる模様なれハ先つ安心いたし候かくて小枝橋を越えて川の北岸に被爲至候處彼處の山蔭此處の林中にハ薩長の人數多數埋伏し居たる所により顯ハれ出て御通行を拜觀す皆筒袖にて銃器を携ふ中には甲冑を帶したるもありし此日 世子は御歩行の處御躰格と云ひ御行裝と云ひ誠に勇壯に見へ給ひしかハ彼等太く感服したる由此より十町計り行けば壬生の御邸を望見すへし始めて壬生の御邸を望見したる時の嬉しさは何とも譬へん方なかりし夕方七ツ前無事壬生の御邸に着き給ふ御邸詰合一同の歡不一方(以下喜延參朝の條に出つ)

〔坂本彦兵衛日記〕

幕兵薩兵小枝橋狭ミ筒先を描へ觀合居候段ハ壬生邸へも追々相聞夫より重上隊大砲隊等懸立 世子只今至難極急危之地ニ被爲入候我輩乍居奉待候譯無之一同御迎ニ可罷出との義論にて押懸於情義は至極尤ニ候得とも兼て佐幕之嫌疑及受候末今日大小砲を以多勢出懸候ハ、必定裏切之形に相成如何大混雜ニ至り候も難量左候へハ却而 世子之御爲も不宣と種々談判之内小枝橋御越立之注進有之執茂先ツ致安心候此一條ニは政府甚大ニ致困窮候

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數 從元台元年 坂本彦衛調の内)
正月三日
一護久舊臘十八日俄ニ國元出發今三日入洛此節通例供廻ノ外隨從ノ兵員如左
騎士ノ子弟二十五人
郷士百人引廻五人

〔京都並江戸返達御用狀控〕

此度就御變革父越中守儀被爲召故障候ハ、私儀上京可仕旨畏罷在候處父儀は持病之疝積差發旅行難仕私儀茂無據儀ニ而相延齋臘十八日國許發足今日致着京候兼而被仰出之期限ニ茂相後恐入奉存候此段御届仕候以上

正月三日

細川右京大夫

正月三日日本藩世子喜廷慕薩双方の兵に交綏すべく勅命を下されむことを建議す

〔一新録自筆狀〕

正月四日自筆ニ卷込有之候

後書(抄略)

〔御着(世子喜廷王)後藤右衛門(宅)〕御奉行一同被召出候付齋臘九日以来之事荒方申上扱又今日ニ至切迫ニ相成候間是非ハ追而御沙汰之筋も可被爲在先ッ双方共人数引揚之儀勅諭を以御取扱被爲在度と相決直ニ津田山三郎を御所に被差出候事

但此時夕七ツ時過比

正月三日薩長土藝諸藩兵鳥伏見に於て舊幕會桑等の兵を要し互に銃火を交ふ

〔一新録自筆狀〕

正月四日自筆ニ卷込有之候

後書(抄略)

〔三月〕一タ七ツ半時過伏見之方ニ烟見へ候早速物見被差出候事

一右物見鹽山隱岐幕六ツ時分途中迄罷越聞繕候而罷歸伏見と淀之間横落と申所距伏見四丁計而大坂方歩兵と薩州勢双方炮發戰爭相始り今程之伏見へ懸り可申との事

一鳥羽之方へ罷越候歩御使番安田兵左衛門右物見引縛罷歸大坂之歩兵四大隊之由二千計も可有之是之街道筋淀之方と薩法ニ押來薩兵之田表横筋ニ大小炮相備且五人十人宛散兵を賦り相拒其内炮聲十五發茂相聞頓而火之手揚り候を見懸引取候由今分ニ而之薩之方大方勝利と相見候段申出候事

此後原田作藏罷歸申出候趣之本文茂荒目ニ有之候

一鳥羽迄物見ニ罷越候片山傳四郎夜五ツ時分罷歸上鳥羽と鯉塚之間小枝橋を渡り直ニ小枝村あり此村ニ薩勢入込罷在何故歎田家ニ火を懸候由是殿之人数と相見夫より或ハ五人或ハ十人計茂壹丁越位散々ニ繋キ有之先手と淀あたりに見懸及炮戰候と被考候段申出候事

世子小枝橋御通之節之薩之先手人数川より上ニ備居候處大坂之歩兵と淀之方ニ引候付本行之通押詰候と相見候段も申出候事

一伏見へ被差越候歩御小姓臼杵彦九郎永田鹿助右物見引縛罷歸先ッ伏見へ入込候處薩長土皆伏見之人數角々辻々ニ拾人貳拾人宛イミ京橋豊後橋近邊ニ至候而之川を隔双方人数相堅其中を通り肥後屋ニ而飯一杯と相心得立寄居候内京橋より大炮一聲響候付直ニ駈出候處豊後橋之方も一圓炮發何分通行出來兼候付丁度暮前鳥羽街道ト志一日下手ニ下り候へとも此方も炮聲且火之手揚り候付夫々田道を傳積り竹田街道ニ出罷歸候由伏見立出候後同所三ヶ所計火之手揚り一ヶ所之究而御奉行所と相見候段申出候事

一玉藥積込淀舟一艘分不致着認爲見繕夜五時分被差越候歩御小姓四ツ半時分罷歸下鳥羽迄罷越候處同所へ屯いたし居候薩人ハ是より先ハ不參方可然と申候付戰爭之様子相尋候處大坂勢引揚候付致休戰向貳拾五人死亡薩者一人手負と咄候由且土人之咄ニ大炮ニ挺分取有之候趣伏見之方ハ炮聲も致候へとも餘程稀ニ相聞候由(以下次の條に續く)

明治元年

七八三

〔池邊松右衛門日記〕

同三日、世子御着京會津兵登伏の儀ニ付越老公より被領して溝口殿ハ下阪櫻田同道して伏見ニ行く然處幕兵も内府公御上京御先供して登伏之處伏見して薩長杯より差留龍川播磨守ハ奏問を申し上京之處鳥羽街道して薩兵より差留む依之龍川押して通り候答して兩方共ニ日入前より戦争丁度肥後屋ニ居候間兵亂を避け横大路ニ至る從伏見ハ過半兵火防候は薩軍也終夜合戦鳥羽街道ハ小枝橋附近して合戦幕過幕兵より下鳥羽ニ引く

〔鶴崎長崎返達御用狀扣〕

筑前開役に昨日英國飛脚船ヲ報告之次第鎮臺に指出候書付寫

一榎本對馬守殿に正月四日八時過拜調相願御模様相伺候處昨日三日會藩幕府兩兵隊伏見七時比通り懸り候處薩兵隊押留候付步兵頭佐久間近江守内府公御上洛爲先備罷登候趣申向候處徳川家人數壹人茂上京相禁候趣相答直ニ町家より發炮大戰と相成一旦幕兵敗走及候得共會兵奮戰直ニ得勝利候由夫が相引いたす今日朝迄休戦之事

一鳥羽街道に者幕兵桑名兵罷登候處是又上鳥羽邊ニ而薩兵相支候付直ニ町家が發炮一旦幕兵敗走ニ及候得共桑名勢大炮相發候付立直し追々相進申由今四時ニ而東寺迄押上り候由

一幕兵

一新選隊

一會藩

一桑名藩

六大隊

大炮三サヲ 大炮隊五百人餘

八百人餘

三百人餘

右在坂之者ヲ御目附に京地之模様相伺候書取

(右正月十一日長崎より宮村庄之丞の報告の内十五日ニ熊本ニ附せる書)

〔京都並江戸返達御用狀控〕

若殿様御供松本彦作池田幸太郎より申越(節略)

扱壬生御陣屋御着ハ夕八過ニ而御座候處薄暮比ニ至り南方遠く炮聲相聞無程伏見方角ニ火之手ニケ所ニ上り六過ニ相成候而ハ鳥羽方角ニ茂火之手上り兩所焰之内ニ炮聲響敷相聞双方東西大合戦と被相考千木通りふと者薩土邊之人數援兵と相見數千之挑灯綺羅星之如し(中略)鳥羽方角之炮聲ハ終夜無止時伏見之炮聲今晝比迄度大炮小銃連發之聲響敷事御さ候處八刻過ニ者炮聲相聞不申候其時分御留守居方へ聞へ候注進之趣ニ而ハ關東勢大敗北ニ而從迄被押詰候由薩州別紙御用狀之通ニ而ハ仁和寺宮様を押立錦之旗翻し征伐之名義を假り候事と相聞此末如何成行可申哉先ハ大亂と相見申候事

正月四日

松本彦作

池田幸太郎

付札 朝飯後之評判ニ而ハ鳥羽之戰薩長貳千計之人數ニ關東ハ會桑四千計夫ニ步兵新撰組合而七千計ニ而薩長茂聽而禦兼候景色トミユ

伏見も双方大戰ニ而市中一圓兵火ニ而燒失勝敗腕相分不申候へ共昨夜より炮聲止候處ニ而者會桑之人數是亦淀に引上歟と相考候壬生御陣屋近邊迄も市中道具等運大混雜之弊ニ御座候

正月三日朝廷我藩世子喜延の上京を嘉賞し直に參朝すべく命せらる依て喜延病を強めて參朝す
〔京都并江戸返達御用狀控〕

細川右京大夫に

依 召上京御満足被 思召候御用之儀有之候間唯今早々人數引連參 朝可有之 御沙汰候事

正月三日

〔全書〕

明治元年

(正月四日發右筆河口權兵衛書信の一節)

御所御取次茨木左兵衛少尉昨夜四時過入來若殿様に參與衆より之御書付持參御用之儀有之候間唯今早々人數引連參朝可有之御沙汰之段御達右ニ付御請書出來直ニ御使に相渡候云々

〔京都并江戸返達御用狀控〕

(正月四日附松本彦作池田幸太郎書翰の一節)

若殿様に者前夕より少々御風氣被爲在候付即日之御參 内ハ難被爲出來御名代三宅藤右衛門殿を以御届被仰上四日朝被遊御參 内候管之處夜四半過ニ早々被遊御參 内候様申來候間押而即刻御供揃ニ而被遊御參内候然處中立賣御門内外者因州勢軍裝ニ而相固居其外九門内者勿論 御所内茂薩長藝越を初所々之人數五六萬計可有之様相見軍裝目之光ル計ニ而若殿様ハ毎之通諸大夫之間より御上り被爲在御供中而旅服之儘鐵炮を携右御上り場所迄御供仕 幸太郎彦作御所内へ仕居候所八半比御下りニ而夜明迄一條様へ被爲入被遊御休息朝五時過漸被遊御歸座

〔淺井鼎泉記錄〕

(喜延着京の條の續々)

先是津田と行違に 御所より御召狀到着し鼎泉常直にて罷在候處御書方河口權兵衛其召狀を持參し申候様は一刻度早く御參 内被爲在候様有御座度 幽齋公 三齋公の尊骸も此地御治りの事故二公の神靈なとて御保護なかるへき御不例なればとて何の子細も有之間敷と頻りに御參 内御勸申上候に付鼎泉も亦心に感ずる所有之直に其旨尊聽に達し候處召とあらは直に參 内すへし供の用意可致而して供の面々は道中服裝の儘たるへしと被仰出候に付直に御供觸致候處邸内議論沸騰し御參 内不可然とて百方御留め申上けんとしたるものもありたれとも 世子斷然御決行被爲在夜(正月三日)九ツ時頃御參 内被爲在直に御仮建に被爲入鼎泉ハ平常御 石砌の内熊ノ云々居候故直に鞋拔捨てながら

御供致し津田御先に立ち御案内申上候

斯くて天氣御伺を被爲濟候處御休息所無之に付如何ハせんと思ふ處に奥の御間に屏風圍ひ有之候ニ付就て聞けハ薩州公の御休息所なりと云ふ幸薩の御留守居内田仲之助は懸意の間柄なれば御一所に御休息頼み候旨申候處内田直に薩州公に申上げ同公にも御太慶にて御待あるとの事に世子は暫時同公と御一所に被爲入御對話被爲在候處御所よりも御暇被仰出候ニ付御退出被爲在夫より一條殿へ被爲入夜明方壬生邸へ御歸館被爲在候

因に兼て御國には 御所よりも薩長よりも始末嫌疑懸り居候ニ付 世子御參 内の際に御所警衛の人數は皆銃丸を込め大門には大砲を押し出すなど一方混雜致し 御所の御門御入の際ハ御供の面々一方心配致し候

正月三日我藩世子喜延の建議を容れ休兵の勅使を伏見へ發向し我藩兵に其警衛を命せらる乃ち銃隊を出すの準備中勅使發向を止めらる

〔一新録自筆狀〕

正月四日自筆ニ卷込有之候

稜 書(抄略)

(三日) 一伏見に 勅使四條様 被差立休兵之御沙汰被爲在候付右警衛此方様御一手に被仰付候事

但寺町方御番方四十人無足共足輕四十人

八拾人直ニ被差出候事

正月四日 一昨夜被仰出候 勅使之相止候段寺町方申出候事

〔溝口孤雲羈旅中勤勞稜書〕

一正月三日之拂曉世子牧方御立(中略)夕八ツ時過下生邸御着云々
 但幕薩双方人數引揚之儀先ツ 勅諭を以御取扱有之是非ハ追而御取調有之度ト御着早速評議相決津田山三郎早打ニ
 而被差出御建言之處一旦休兵之 勅使(四條少將長 谷美濃權介) 被仰付右警衛我藩一手ニ被命候へとも其内大戦争ニ相成御沙汰
 止(以下正月五日 止の條に出つ)

正月三日舊幕府は大坂在勤の我藩吏を召喚して慶喜の奏上書及び諸藩に告示する文を交附す
 〔一新録自筆狀、王政復古帳、諸家建白並御届書等〕

正月三日御呼出ニ付猪俣才八罷出候處御奉行衆御列座ニ而於營中大目付より相達候振ニ相心得候様との御口達ニ而御
 渡之由

御奏聞書

謹而去月イ

臣慶喜謹而去月イ過日奉奏聞候趣茂有之去ル九日以來之御事體件イを奉恐察候得者一々 朝廷之御眞意ニ無之全く松平修理大夫奸
 臣共陰謀より出候者天下之所共知殊ニ江戸長崎野州相州所々亂妨劫盜ニ及候も同家家來之唱導ニより東西齟齬し皇國
 を亂り候所業別紙之通ニ而天人共ニ所憎ニ御座候間前文之奸臣共御引渡御座候様御沙汰被下度萬一御採用不相成候得
 ハ不得止誅戮を加に可申候此段謹而奉 奏聞候

正月

慶

喜

御別紙

薩藩奸黨之者共罪狀之事

一 大事件盡衆議と被 仰出候處去月九日突然非常御變革を口實ニ致し奉侮幼主諸般御處置私論を主張候事
 一 主上御幼冲之折柄 先帝御依托被爲在候攝政殿下を廢し止參 内候事

一 私意を以宮堂上方を恣ニ黜陟せしむる事

一 九門其外御警衛と唱へ他藩之者を煽動し兵杖を以 宮闕ニ迫候條不憚 朝廷大不敬之事

一 一家來共浮浪之徒を語台屋敷に屯集江戸市中押込強盜致し酒井左衛門尉人數屯所に炮發亂妨其他野州相州處々燒討劫盜
 二 及候者證據分明ニ有之候事

〔右明朝御奏聞之書〕(形勢之部一括に此の末文あり)

諸大名に布告文

予宇内之形勢を熟考し政權を奉歸 朝廷王政一途ニ出萬國并立シことを欲す豈料や薩藩奸賊要 幼帝不盡公議矯
 詔慮僞勅を下し恣ニ公卿を黜陟し天下之亂階を醸候件々不暇枚舉依之別紙兩通之 奏聞を遂ケ大義ニ倚而 君側之惡
 を誅戮し自然本國をも征討ニ可及ニ付國々之諸大名速ニ馳登軍列ニ可相加者也尤軍資之儀者平定之後鋒先之勳勞に應
 し土地可割與候事

正月三日東國舊幕方の兵西上すとの報至る加賀彦根等諸藩兵進みて大津逢坂山等の警備を嚴に
 す

〔王政復古帳〕

東海道筋々關東奇兵隊三百人計歩兵隊千人計今四日大津驛に一泊伏見表に罷越候筈之由右者舊臘より先觸相廻居申候
 且越後高田藩も五百人計今明日之内大津泊之筈ニ有之候由且又東國御普代諸侯方御名前者相分り不申追々上坂之趣右
 ニ付大津逢坂山邊御固メ之由ニ而操出之御人數左之通

三百五拾人計

加 州 様

大津御藏屋
 數に御出張

彦 根 様

百人計
右同斷
貳百五拾人計
右同斷

佐土原様
大洲様
備前様
阿波様

但逢坂山固之由承り申候

右三日夜亥刻頃子刻頃迄ニ御座候

一膳所様御上京之處昨三日御歸邑自國御固勢田橋者柵垣嚴重ニ而往來留ニ付同所者舟渡之由ニ御座候

右之通躰上本陳弓矢八郎右衛門ヲ爲知來候付此段御達仕候以上

正月四日

池邊 棕 右衛門
津田 山 三郎
青地 源 右衛門

三宅 藤 右衛門 殿

正月三日夜仁和寺宮嘉彰親王征討將軍に任せられ翌日東寺に出張せらる

〔一新録自筆狀〕

正月八日自筆に添

稜書(抄略)

一正月三日之夜仁和寺宮様征討將軍被 仰付同四日八ツ半時分東寺迄錦旗被押立御出張同五日淀島羽ニ向御押付坂兵引退候由

〔王政復古帳〕

別紙之通外使共々達出候付此段御達仕候以上

正月五日

池邊 棕 右衛門
津田 山 三郎
青地 源 右衛門

三宅 藤 右衛門 殿

仁和寺宮様東久世様四條様御追討御惣督と歟申候事ニ而宮様ニ之御鑑着外御二方ニ之烏帽子狩衣御乘馬錦日月之御旗

貳流押立薩長久留米三藩者人數百七十八人程隨從昨四日夕八時比東寺迄御下ニ相成申候

右之通承り申候以上

正月

外 使 共

〔京都大坂長崎探索書〕

薩 州

仁和寺宮爲征東將軍御出張ニ付人數一小隊急ニ指出候様御沙汰候事

仁和寺宮軍事總裁被仰出候間御守衛兵士之指揮進退可致候事

正月三日

正月四日中將西園寺公望を山陰道鎮撫總督として丹波口へ出張せしめらる

〔京都大坂長崎探索書〕

明治元年

西園寺三位中將爲鎮撫惣督丹波口に出張ニ付急ニ人數一小隊可指出旨御沙汰候事

正月

〔防長回天史六編上〕

(明治元年春期ノ大勢及ヒ毛利氏の内)
其ノ四日朝命ヲ襲キニ義兵ヲ集メテ高野山ニ屯セル鷺尾隆聚に下シ錦旗ヲ賜ヒ大阪城ヲ攻メシメ紀藩ニ命シ官軍ヲ募
リ鷺尾トカヲ合セ王事ニ勤メシム(略注) 西園寺公望ヲ山陰道鎮撫總督トシテ丹波口ヨリ出テ山陰ヲ徇ヘシム成(長)藩
及ヒ薩藩各々命ニ因リ兵ヲ出シテ之ヲ護衛ス 我(長)藩ハ給御門守衛兵中ヨリ第四中隊ヲ抜キ此任ニ當ラシム山陰鎮撫使ノ派遣
ハ元鳳筆西巡ノ萬一アルトキニ先ツ山陰ヲ徇ヘ道ヲ開クノ意ニ出テタルモノニテ
鎮撫使ハ順次ニ山陰諸藩ヲシテ奉公ノ意ヲ明ニセシメ三月朔日松
江藩ノ警書ヲ納ル、ニ至リテ全ク其功程ヲ終ヘ關京ノ途ニ就ケリ

正月四日大津口鎮撫惣督橋本實梁柳原前光出張につき我藩在京の兵を隨行せしむへき旨を命ぜらる

〔一新録自筆狀〕

肥後

橋本少將柳原侍從大津口爲鎮撫惣督出張ニ付人數急々相成候丈練合可指出候様 御沙汰候事

正月 四日也

右ニ付上席輕輩百人被差出候山尤御請書寫有之候得共略す

正月四日我藩に久我坊城兩家の警衛を命ぜらる

〔一新録自筆狀、王政復古帳〕

細川 越中 守に

久我 中納言

右家に爲警衛人數十人可差出之事

但侍分以上之人體候事

正月四日

細川 越中 守に

坊城 侍 徒

右家に爲警衛人數六人可差出之事

但侍分以上之人體候事

正月四日

〔自筆狀並稜書〕

(慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄)
(正月八日古閑富次早打ニ而御國許に被差立候稜書の一節)

一同五日 昨夕久我様に御人數十人坊城様に同六人差出候様御沙汰候事

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數 從元治元年 坂本彦衛調の内)
同日(正月五日)

一御達ノ趣ニ付一條家に二十六人久我家へ二十人坊城家へ十二人警衛人數差出ス

正月四日我藩世子喜廷は時勢の變に際し藩邸内に議論沸騰せるを以て私に主義方針を確立して

明治元年

之を重臣及び近臣數名に内示す

〔淺井鼎泉記録〕

（三日云々世子斷然御決行夜九ツ時頃御内云々夜明テ壬生邸へ御歸館とある續き）

一壬生に御歸邸の處議論又々沸騰或ハ天下の形勢割據と可相成に付速に京地御退去あるへしと云ひ或ハ薩長の森來にて如斯形勢と相成候ニ付速に幕府を輔け薩長の後背を衝くへしと云ひ紛々として底止する所を知らず政府（政府とは藩の御奉行より出張の諸役）にては溝口翁ハ大坂に行て未だ歸京せず三宅（藤右衛門）有吉（清助）井上（嘉左衛門）木村（得太郎）永屋（猪兵衛）坂本（彦兵衛）及鼎泉等ハ一途に從來の方針を主持し世子にも確乎として動せられず被仰候には自身今度太守様の御名代と申す重任を負ひながら此變動の際に當り萬一にも誤りて朝敵の汚名を蒙り候様の事にも立至り候ハ、御家御歴代様の神靈に對し奉り且ハ太守様顯光院様（齊庭室）に對し奉りても不相濟儀に付藩士の議論は可有之候得とも最初召に應し上京致したる主意を一途に確守致し必らず動搖すへからすと因て政府の面々は一體に確乎として決する所有之候得とも外向にハ未だ發表せず是を以て藩士の議論益々囂しく邸内甚騒然たり（以下正月五日）の條に出つ

正月四日徳川慶喜、尾張外五藩主に鳳闕の守護のことを依頼す

〔三條實美公年譜〕

奏聞之次第ハ有之候得共 鞞轂之下ニ於テ干戈ヲ動かサ、ル様兼テ兵隊之者トモへ申諭置候得共彼ヨリ已ニ砲發之上ハ此上之形勢心配致候間吳々モ 鳳輩守護被致候義厚ク御頼申候以上

尾州 越前

慶喜

土州殿
細川
藝州
宇和島

正月四日八字認

正月四日幕吏榎本對馬守徳川慶喜の奏聞書を朝廷に提出せむことを我藩溝口孤雲に依頼す溝口親藩以外より傳達するは當を得ざるを以て之を辭す

〔一新録自筆狀〕

（正月四日溝口孤雲大坂より書翰の一節）

（前略）右御奏聞之書付昨夜御渡ニ相成候間差寄馬場彦左衛門等打寄致評議候處實ニ重大事件殊ニ如何成御趣意欺得斗順逆之境も分兼右四藩筋斗申談候上登城可致と一旦約定いたし候處今朝榎本對馬守様方孤雲へ急ニ御城に罷出候様御呼出ニ付罷出候處右奏聞之御書付を何卒 朝廷へ差出吳候様ニとの御頼ニ付共儀ハ外藩方差出候而ハ筋を得不申候間御親藩之内方御差出之方可然御主意貫徹仕候様之周旋之如何様共可仕と御斷ニ及候事ニ御座候（奏聞書とあるは昨日の條に掲載したるものなり）

〔林新九郎日録〕

同四日晴陰交、老太夫同道登城永井公太夫に内府公奏聞之書京都に相達候様被相頼候へとも外藩方ハ心痛之段斷ニ相成候

正月四日薩人大坂の同藩邸を焼く

明治元年

七九五

〔一新録自筆狀〕

(正月四日溝口孤雲大坂より書翰の一節)
今晚八半比薩御屋敷ニ落雷之如キ一發松屋ニ階立具も一々倒候位にて乍燃上り一間々々且庫毎ニ一發一發殘なく燒失
至ク自火と相見人影一人も相見不申靜々たる様子御座候以後如何成擾亂ニ成行可申哉懸念此事御座候

〔林新九郎日録〕

(正月三日の條)
今晚八ッ過薩邸自燒殆破裂聲如雷數聲相發し障子倒
一同五日今朝薩邸燒殘土藏火入殆氣雷發

正月四日鳥羽伏見の戰鬪繼續し坂兵終に伏見を退き淀に至る

〔維新關係重要文書集 第四冊〕

正月四日朝五時頃伏見入口ニおゐて公邊歩兵組頭躰之者より聞取之趣左之通
一初發公邊歩兵組大隊伏見本街道京都に罷登候由ニ而押寄來候を薩州固之人數が相拒ミ晝八時過ク暫ク談判之上双方より大小炮打懸候由其場ハ歩兵引拂竹田街道之方に打廻候を同前ニ而薩州が猶又頻ニ大小炮を打懸其内薩州より伏見公邊御役屋敷に打込候御會津藩之一手罷出高瀬川邊ニ而戰爭之由三日ハ夫ニ而薩州人數茂一旦京地に引取候由之事桃山引上候共取々風設辨相分
一今四日朝未明ニ至猶又薩州長州人も加り候而公邊歩兵組と戰爭之由大炮破裂を伏見人家に双方より打懸候付昨三日より今四日ニ至り候而ハ伏見市中茂過半燒失

同日ニ者公邊五連隊と賊申隊會津茂加り居候由鳥羽邊ニも戰爭之由尤外兵ハ伏見京橋邊ニ而も戰爭朝五時過公邊組組之士三四十人茂引上ケ淀堤に參り候付何分伏見に入込難相成淀堤半邊トモ大小炮之玉飛來候其内公邊之歩兵組ハ追々ニ引上來候様ニ相見鳥羽戰爭之五連隊も引上來候様ニ相見候得共荒手を入替候哉否ハ存知不申候事
一今四日五時比會津之手ハ淀近邊ニ野陣を張居候事
右之通ニ而伏見鳥羽共今朝五時前後者頻ニ大小炮打合候と相見音絶間も無御座依而入込難相成即時ニ引返候付勝劣ハ相辨不申候得共昨夕ハ公邊之方勝利之模様今朝ハ敗軍之模様ニ相見候事

正月四日

〔池邊棕右衛門日記〕

同(正)月(四)日 未明より兩方共合戰坂兵伏見を引き淀に至る宇治へ廻り歸邸

正月五日我藩橋本實梁柳原前光に隨行せしむべき出兵命令の奉答書を提出す

〔王政復古帳〕

橋本少將殿柳原侍從殿大津口爲鎮撫總督出張ニ付人數急々相成候丈繰合指出候様 御沙汰之趣奉得其意候以上
正月
五日御差出
細川 右 京 大 夫

〔溝口孤雲羈旅中勤勞稔書〕

一正月四日之夕大津口爲警衛總督出張ニ付相成丈人數繰合急ニ差出候様御沙汰之處先達而已來政府決議之筋ニ不安意之向有之追々異論之末此節世子御側方ハ多ク其方同論ニ而益盛ニ相成右御人數ハ可被差出筋ニ無之杯と申説起り夫より

明治元年

七九七

義論紛紜漸ク翌朝飯後にいたり 朝命通り相決盡前爲御受藤右衛門參 内(下略)

〔淺井鼎泉記録〕

五日五時頃鼎泉ハ松平春岳公へ御使者として被差越旨被仰付候ニ付即ち彼の御邸に參らんとて將に御玄關を出てんとする時春日讃岐守來邸大納言様より被仰付候旨ありて極機密に參り候由申候ニ付密間に案内致候處春日申候様ハ此度世子御上京ニ付大坂にて慶喜公に御面謁御謝絶挑戦中兩軍の間を御通行にて御入京及即夜御參 内の此三ヶ條ハ朝廷に對せられ御國の御進退に大關係有之大納言様にも不一方御安心被爲在御國の爲に重疊被祝候次第に御座候然るに昨夜三條跳上御出兵御斷りの一條ニハ甚御懸念被爲在候 朝議も筒様々々なり其後如何相成候哉と申に付其儀に付ては少し間違有之今朝三宅を以て御受到相成直に御人數相調へ本日中には出張の手筈なりと答候處春日も大に悦ひ今後の御方針を尋候ニ付御内議ハケ様々に確定致候段申聞候處不怪悦にて大納言様にも嘸かし御満足可被爲在と申して立歸り候依りて此段世子に言上し同僚へも話置き(以下同日越藩邸に至る條に續く)

正月五日朝廷在京の我藩兵中各地派遣の數及び在留の人員を申告すへき旨を命せらる

〔京都並江戸返達御用状扣〕

以手紙申入候然ハ其藩在京之人數何程御警衛ケ所々々相廻有之候人數何程即今殘居候人數何程右等委敷取調早々書取を以可被差出候也

正月五日

參 與

役 所

細川 右京 大夫 殿

家來中

正月五日本藩在京人員の動止を朝廷に申告す

〔京都並江戸返達御用状扣〕

越中守藩士在京之人數御警衛ケ所々々差出候人數何程即今殘居候人數何程と申事御達之承承知仕候則左之通一千百七拾人 但下地在京之人數ニ此節右京大夫召連候人數共

内

四百五拾五人

但近習並諸役附役人共

殘而七百拾五人

但上下戰士

内

三百人

但寺町御門詰交代人數共

貳拾人

久我殿附右同斷

拾貳人

坊城殿附右同斷

貳拾六人

一條殿御門番右同斷

貳百四人

大津口御鎮撫方附右同斷

猶殘而百五拾三人

右之通ニ御座候此段御達仕候以上

正月

細川 越中 守 内

青 地 源 右 衛 門

明治 元年

七九九

正月五日 朝廷賊徒潜伏の聞あるを以て京師警衛の任務ある諸藩に更に嚴戒を加ふべき旨を命ぜらる

〔一新録自筆狀〕

賊徒潜伏投火之懸謀有之由既昨夜兩所ニ而召捕候趣度聞候ニ付警衛諸藩九門内外其場所申合嚴重取締候様可致候事

正月五日

〔王政復古帳〕

正月五日

- 一 九門内妄ニ雜人徘徊致し候ニ付各行先問糺其上通行可許候事
- 一 從申半刻到翌卯半刻九門ノ切之事

但同刻より同刻迄執銃之兵士并參内供廻之外九門内往來禁止之事
尙用向之節者印鑑を以通行之事

但印鑑所持之者より人數何程と相届候ハハ相改可通事

- 一 九門内篝火之事

但九門守衛之藩より可設候事

正月五日 我藩淺井新九郎藩世子喜延の内旨を受けて越前藩邸に至り春嶽の意中及び同藩の動靜を深知して復命す

〔淺井鼎泉記録〕

〔前掲大津口警衛の條の續き〕

夫より越前公御邸へ罷出候處直に春岳公の御前に召出され公にも時勢の變動に付太く御嘆息の御話杯被爲在さて幕府に對せられたの御情誼に於ては御國よりも一層深く被爲在候ニ付御國議も御國と大同小異にて御用人青山小三郎を召され御國議の次第逐一可申聞旨被仰付青山の話に據れハ公の御苦心實に其極に達し此處暫の處決して御動搖なきことに被決候山なり

此時偶々伏見表に物見に參り候もの二名罷歸り候段公に言上す公直に被召出戦地の模様如何と御尋被爲在候ニ付二人より伏見邊の形勢精細に申上今朝に至りて全く幕府の敗軍に歸し全軍八幡の方面に引上げ死體街道の上に充滿し分取の兵器玉藥等數多有之候に付只今臺八車にて京地に運漕中に有之候旨言上す此時春岳公其中にハ葵の御徽章を附けたるものありしやと被仰候ニ付大方ハ御徽章の附きたるものなりし由言上致候處公不覺御涙ハラノと落し給ふ御心中察候て鼎泉も同しく落涙仕候斯くて鼎泉ハ御邸内の御模様且ハ公の御處置等詳に相窺ひ申候に付御暇申上候て歸邸致し其由世子に言上す〔以下正月廿三日の條に出つ〕

慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄
〔自筆狀並稜書〕
〔正月八日古岡宮次早打ニ而御國許に被差立候稜書の一節〕

一同五日淺井新九郎を越前老侯に御使者ニ被差遣老侯御直話之趣口上ニ有り

正月五日 朝廷山崎關門の守備を津藩に命せらる

〔一新録自筆狀〕

正月五日 勅使四條殿藤堂家山崎御固所に被仰渡候御書附之寫

藤 堂 和 泉 守

今般徳川内府上京先手之家來と稱し戎服大砲等ニ而伏見迄押出候儀意外之進退不可言次第ニ候右之兼而懇々御内諭且

明 治 元 年

言上之次第有之候處從朝廷警衛被仰付置候御場所不相憚突入之妄舉實ニ不得止之時機被及掃撲候最早叛逆之色顯然候ニ付進軍追討官兵被差向候間山崎關門之儀極要之地ニ候條官軍救應守關之大任勤勞候様被 仰付候事

正月五日

但頃日御沙汰も有之候通深頼思食候次第偏ニ盡力奉勞有之候事

正月五日坂兵退却して淀城陥落す

〔池邊椋右衛門日記〕

同(正)五日 坂兵引退淀城陥る昨日仁和寺宮征討將軍として發向

〔自筆狀並稜書〕
慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄
(正月八日古閑宮次早打ニ而御國許に被差立候稜書の一節)

同(正)五日 坂兵引退淀城陥る昨日仁和寺宮征討將軍として發向

正月五日會津藩主松平容保を朝敵と布告せらる此日薩藩兵會津藩黒谷陣所を攻撃すれども空虚にして應戦するものなし

〔自筆狀並稜書〕

慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄
(正月八日古閑宮次早打ニ而御國許に被差立候稜書の一節)

一松平肥後守者 朝敵と申高札三條大橋ニ懸候由之事

同日(正月)ハッ過會津黒谷陣所に薩兵罷越致炮發候へ共空陣ニ而應する者無之候由且守護職屋敷ニ殘し有之候諸道具之市人分取ニ被仰付候事

正月六日官軍進みて八幡を攻撃し坂兵敗走す

〔自筆狀並稜書〕

慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄
(正月八日古閑宮次早打ニ而御國許に被差立候稜書の一節)

一 同六日中村九右衛門山代丈之助物見ニ罷越山崎藤堂家之厩を借馬を繋置天王山に登り候處薩長之兵之川向ニ押渡八幡山之坂兵と炮戰藤堂家之兵者其下ニ而酒井若州之兵と炮戰酒井家より發候破烈丸中村列を去る事貳間計り之處落候付其所を飛去別所より一覽ニ居候内八幡山之坂兵散々打負候躰ニ相見候由左候而一ト先藤堂家之陣屋に參候へハ懸勲之取扱有之重役も出會幕兵ニ向ひ發炮甚心外之次第密談ニ候由猶又元之所に登り候時ハ川下之塘手者敗軍之坂兵狼狽ニし坂城之方に逃去候を致一覽候内猶又酒井家之大炮丸山代る陣等を打摺り飛過候付兩人共其場を引取七ツ半時分歸邸いたし暮過ニ者大方八幡山も薩藩兵橋本迄被押詰候歟ト報告 但藤堂家之炮丸者酒井家之營に届不届位ニ候候由一八幡之戰ニ者薩之四小隊撤出横矢を發候より坂兵なだれ落候由此一隊之長十五六才之若輩ニ而台戰程面白ものハ無之と申由津田に藝人某話聞候由 但藤之發砲卅日初而也

一 同七日橋本も昨日落去歟ト今朝大坂より牧方を見候へ者烟甚敷同所被燒立候ニ相違ハ無之由之事

〔一新録自筆狀、自筆狀並稜書〕

(溝口三宅より通告正月十三日發鎌田平十郎持參稜書一節)

一 藤堂藩藤井呈助御留守 町井治 山崎御固出張 藤右衛門御小屋に罷越山崎御固所に薩長人罷越致炮發候様再應相勸メ候得共未タ主命も不受ニ厚恩之幕府に向其儀之難致段申述候へ之 勅諭之由申聞候へ共其證佐無之受付不申時刻を移候内勅使御書付御持參ニ付御請申上 此御書付寫ハ先 勅使之天王山に炮戰御見届之由ニ而御登山彼是いたし候内若州之臺場より大炮一發打懸候付藤堂家も臺場之上之山腹へ一發打懸候處被惡伏兵之眞中ニ付皆々なだれ落若州方大敗之由尤其以前臺場を被除候様度々密使を以申遣候得共除キ不申此場ニ至候由然ニ町井之主命を不受家老歸臺場より申付置候趣ニ致遠却候間治始隊下も割腹之覺悟を究居候得共其場不得止事情孤雲を歸雲へ一筆遣吳候様呈助を懇願いたし引

取候

正月六日徳川慶喜の重臣等鳥羽伏見に於て開戦に至りし事由を記して在坂の各藩士に告示す
〔王政復古帳〕

慶應四年正月六日華城ニ而御渡之御書付同七日孤雲殿持歸

去卯十二月十二日旗下之者共鎮撫之爲内府公下坂致被居候處舊臘中より尾越土三老公履御上京之儀御申越兩公ニハ兼々御内沙汰有之候辭官并御政務御用途之儀茂夫々周旋を以運ひも付候付此上ハ京地之御模様越公より被申越次第御上京御座候積ニ候尤當節柄之儀御戒心茂有之候ニ付御上京節ハ兵隊多分御召連不相成而ハ臣子之者安心茂不相成候間其段茂可然 朝廷に御申立可被置旨越公ニ被申談承知ニ而歸京ニ相成申候乍去御上京之節一時ニ大兵召連ニ相成候而ハ當節柄彼是物議も可生漸々ニ御先供兵隊被繰出候方見聞度穩ニ可有之と去三日より先供之兵隊一隊は二條城中一隊ハ伏見驛一隊ハ淀に繰込候積追々出發いたし大目付瀧川播磨守に 奏聞狀爲持差出候處四ツ塚關門ニ長人出張罷在候付内府公近々被致上京候先供之旨及斷致承知候ニ付無異儀通行可致處同所詰合之薩藩罷出上京之 勅命無之内ハ先供連茂入京不相成段嚴重ニ差留候然處此方ハ何之 御沙汰茂無之候間夫是及懸合候内薩兵左右より俄ニ相起り大小炮亂發伏見之方茂先供兵隊着船いたし候處是亦從彼及發炮兩所共不意を被擊戰爭と相成只今迄日々争闘罷在候尤 鞏毅之下ニ而干戈相動候而ハ兼而之内府公御趣意ニ茂相違いたし候故今曉も戰爭先に書取を以相戒被申候間兵士之面々も一時之機ニ乘右様之儀は決而致間敷と被存候得共兼て鎮撫方心配被致候壯年之者共萬一心得違有之候而ハ不相成儀と甚心配被罷在候此度之一條右之通之始末柄ニ付能々御了察有之度候事

正月六日我藩京都留守居を薩薩邸に遣はし我藩主父子の存意を述べしむ

〔王政復古帳〕

修理 太 夫 様

越中守様より

今度御上京之段珍重思召候御國許御出船付而者遠境之處態々御使者を以被仰進趣御懇念之儀思召候越中守様に茂可被成御上京處御持病之御痛積寒氣ニ御障被成御難儀候付無御據右京大夫様御事被成御登京候就而者御不案内之儀ニ付萬端御心添之儀宜被成御頼候
此段被仰付越候

右京大夫様より

今般被成御上京候處萬事御不案内之儀ニ付御心添之儀宜被成御頼候此段被仰進候
畢而

近日之變動付而者別而可被成御心配思召候右之御見舞も被仰進候

御書方しらへ

松平修理大夫様舊冬御國許御出船付而熊本に御使者被進此節者定而此方様に茂可被遊御登京修理大夫様に者初而之御上京ニ付何分御不案内之儀ニ付宜被成御依頼候段被仰進候付其節太守様より御相應之御答者相濟居候然處今度若殿様被遊御上京候處ニ而者右之御挨拶向御使者不被進候而者相濟不申候間太守様より御留守居御使者を以左之通被仰進 若殿様よりも如左御口上被爲仰加候方ニ可有御座哉御參談之事
右之通相決正月六日御使者御留守居を以被仰進候事

〔一新録自筆狀〕

正月八日自筆ニ添

稜書

正月六日

明治元年

一薩州侯へ御留守居御使者を以別紙之通被仰進候

正月七日徳川慶喜征討の號令を宣布せらる

〔京都並江戸返達御用狀控、一新録自筆狀、王政復古帳〕

正月七日於 御所參與衆方御渡之御書附寫(此御書は一新録自筆狀に據る)

徳川慶喜ハ天下之形勢不得止ヲ察シ大政返上將軍職辭退相願候ニ付 朝議之上斷然被 聞食候處唯大政返上ト申而已ニテ於 朝廷土地人民御保不被遊候而者 御聖業難被爲立候ニ付尾越ニ藩ヲ以其實効被遊御訊問候節於慶喜者奉畏入候得共麾下并會桑之者共承服不仕萬一暴舉可仕哉茂難計候ニ付只管鎮撫ニ盡力仕居候旨尾越ヨリ及言上候間 朝廷ニ者慶喜眞ニ恭順ヲ盡シ候様被思食既往之罪は不被爲問寛大之御處置可被仰付候處豈圖ランヤ大坂城に引取候者素ヨリ之詐謀ニ而去ル三日麾下之者ヲ引率シ前ニ御暇被遣候會桑ヲ先鋒トシ 閣下ヲ奉犯候勢現在彼ヨリ兵端ヲ開キ候上者慶喜反狀明白始終奉欺 朝廷候段大逆無道最早於 朝廷御宥恕之遺茂絶果不被爲得已追討被仰付候兵端既ニ相聞候上者速ニ賊徒御平治萬民塗炭之苦ヲ被爲救度 微慮ニ候間今般仁和寺宮征討將軍ニ被任候付而者是迄倫安怠惰ニ打過し或者兩端を抱キ候者ハ勿論假令賊徒ニ從ヒ譜代臣下之者タリトモ悔悟憤發國家之爲盡忠之志行之候輩者寛大之思食ニ而御採用可被爲在候依戰功此行末徳川家之儀ニ付嘆願之儀も候得は其筋ニヨリ御許容可有之候然ルニ此御時節ニ至リ不辨大義賊徒と謀ヲ通し或者潛居爲致候者ハ 朝敵同様嚴刑ニ可被處候間心得違無之様可致候事 但シ征討大將軍を置レ候上ハ即時前件號令可被發者勿論候得共猶旗下粗暴之徒塵蔽爰ニ至リ候事哉と彼是深重之思食ヲ以御遲延之處三日ヨリ今七日ニ到リ坂兵日々雖敗走益出兵輩々不被得止斷然本文之通被仰出候各藩陪從吏卒ニ至ル迄方向ヲ定メ爲天下奉公可有之候事

〔坂本彦兵衛日記〕

正月八日

一昨日御仮建へ被爲召候處 世子御風邪ニ付爲御名代藤右衛門罷出候處左之御書附拜見被仰付今曉八ツ時分歸邸(御書あるは前掲の征討令より)

〔防長回天史第六編上〕

(明治元年春期ノ大勢及ヒ毛利氏の内)

七日總裁宮公卿諸侯ヲ小御所ニ召シ征討大號令ヲ宣讀シ之ヲ各人ニ頒ツ議定參與盡ク列ス其文ニ曰ク(征討令前掲の通略す)宣讀既ニ終リ岩倉具視席ヲ進テ曰ク朝命既ニ斯ノ如シ卿等ノ意果シテ勤王討幕ニ在ルカ或ハ其封土ニ歸ルニ在ルカ或ハ阪地ニ赴クニ在ルカ其ノ意ノ齋フ所ニ任ス明日辰刻ヲ期シテ各其所思ヲ致スヘキナリト

正月七日三位高倉永祐は丹波馬路村に大夫橋本實陳は大津に出向せしめらるゝを以て朝命に依り我藩其の警衛兵を出す

〔一新録自筆狀〕

(正月八日附溝口孤雲三宅藤右衛門より家老中老宛書留に添附せる稜書の一節)

正月七日從 御所被仰出之書付

丹州馬路村に御使 高倉三位
大津に御使 橋本大夫
右之御附人

此方様に被爲蒙 仰候付高倉様には者大津銃卒十人隊長一人橋本様には御郡筒より九人隊長之場ニ而外使より一人被差出候段夫々御役所より取計有之候事

正月七日我藩家老溝口孤雲幕吏へ退兵勸告の意を達する能はずして大坂より京都に歸る

明治元年

八〇七

〔坂本彦兵衛日記〕

正月七日

一今晩五ツ時分孤雲大坂より罷歸尤街道筋ハ都而合戦之巷ト相成候付間道より宇治ニ廻り辛クシテ通行
一滞坂中開老初大小監にいかにか及説得候而も一切貫キ不申折角之盡力終メ水の泡と相成且追々坂兵敗軍之報知有之候得
とも更ニ驚之弊茂無之御城内至而靜謐番衛格別無之重疊不審之由

正月七日徳川慶喜は大坂城を徳川慶勝松平慶永に託して兵庫に赴き海路東に歸る

〔王政日新録〕

此度上京先供途中偶然之行違より近畿騒然ニ及候段者不得止之場合ニ而素より奉對 天朝他心無之段ハ兼而御諒知有
之通ニ候併聊たり共奉憫 宸襟候段深恐入候儀ニ付謹而浪花城各に御預ケ退去歸東ニ及候間右之旨趣可然御執成御
奏聞右之度頓存候以上

正月七日

慶

喜

尾張大納言殿

松平大藏大輔殿

右兩侯御取次ニ而 朝廷に被指出候書面也

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

此度上京先供途中偶然之行違より近畿騒然ニ及候段者不得止之場合ニ而素より奉對 天朝他心等無之段ハ兼而御諒知
有之通ニ候併聊たり共奉憫宸襟候段深恐入候儀ニ付浪花城ハ尾張大納言松平大藏大輔に相托し謹而東退仕候已上

正月

慶

喜

〔王政日新録〕(熊本縣)

右兩通書翰ハ浪花城中ニおゐて越藩岡本留太郎晋イに妻木田宮關縣御ヨリ傳達方被相頼依之留太郎儀七日夜大坂出立牧方
路通行尤官軍之陣所毎ニ申開いたし漸翌八日夕刻歸京左候而 朝廷にハ尾越兩君より重臣を以御差出ニ相成候事
但徳川氏ニハ會桑始一同七日未明ニ浪花出發ニ相成候よし右岡本留太郎ハ越藩京留守居役ニ而舊臘徳川氏京都退出
之刷ヨリ附添致下坂候者ニ御座候事

一徳川氏并内室を始八十余人を引軍艦加養丸ニ乗し正月七日浪華出船同十一日江戸に着ト云

一柴田日向森山瀧次郎多吉郎百余人之兵を引正月十日兵庫出船同十二日船名フシヤマ船ヨリ江戸に着ト云

一會津フシヤマ船ヨリ徳川氏同日兵庫を發船當時在府ト云(以下略)

正月廿日

荒木大右衛門

廣岡虎次郎

〔王政復古帳〕

大坂より之來狀寫

任幸便一翰拜呈仕候時下各位意御安泰可被成御奉務奉恭祝候然者今日午比内府公御始諸侯伯不殘華城御立退之風評仕
候付不取敢敬助登城仕候處御役々茂皆々御引拂相成漸監察妻木多宮徒監兩三人相殘居妻木ニ面會御様子相尋申候處今
日八ッ比内府公爰許御出立諸侯伯も御供兵庫迄御出夫より軍艦ニ而御東下ニ相成候事

華城者尾越兩公に御預ニ相成候趣ニ而 朝廷に御 奏聞被爲在且尾越兩公ニも御直書被遣御 奏聞狀者兩公より被差
出候書ニ被仰越候趣石御 奏聞狀も拜見仕候處矢張御上洛御先供より行違之儀有之近畿に而騒亂差起り此上浪華城も
紛亂仕候而者猶更御主意も徹し兼御恐縮被成候間御東退被成候との御主意ニ御座候華城中殘兵ハ會津少々其外手負等

明治元年

八〇九

計ニ而明日迄ニ者是非不殘引取之管ニ御座候戰地之出兵も皆々引取候趣ニ而御城引渡之儀ハ右監察妻木より取計候筈之由右御 奏聞狀者越前藩岡本晋太郎持越し候趣ニ而同人儀唯今參り咄合申候者今晩者直ニ發足上京仕管乍併京師に相逢候上陸兵出先に通し候而者迎も間に合不申恐者華城其外商家も灰燼と可相成依之今晚發足懸ニ右御退城之御主意且尾越に御預之事等談判および候得之華城并商家も可無恙敷存念如何と相尋申候間至極同意之段相答置申候尤御道通行難出來儀も可有之候間御 奏聞狀寫者間道よりも一人差廻しニ夕筋にて相運被申候得者別而都合可宜敷咄合被申候處是又至極尤同意有之其運ニ相成居申候何様華城之元より商家も安堵ニ相成候様懇願仕候越藩も其含ニ而出立仕候趣ニ而必定期能被行可申奉存候先者右まで餘者形勢治定之上可申上候恐々頓首

正月七日

首 藤 敬 助
馬 場 彦 左 衛 門

御 奉 行 衆 中
御 留 守 居 衆 中

〔全 書〕

〔正月十五日長崎之報告書取寫の内〕

- 一大坂去ル八九日之内落城大樹公英船ニ御乗組ニ而御發船いつを江戸へ御下りニ而可有之との事
- 一外國人總而兵庫ニ引取申候處幕府之兵庫御奉行丸山某（組頭森山多吉郎の誤傳ならん）外國人へ申向之趣ハ是迄開港之處ニ幕府が警衛致居候得共今日之形勢ニ至候而之一切不能其儀候間何卒外國人銘々警衛いたし吳候様との事ニ而直ニ大坂へ申夷船へ乗組江戸表へ被罷歸候由
- 一大坂市中悉ク燒失との話有之一説ニ之御城のミ燒失市中之無事と申風説御座候へ共英之軍艦兵庫出港之節迄尙黒烟覆天相見申候由

一幕府が佛ニ防衛之儀御頼ニ相成候處佛之ミニストル即刻上海へ軍艦呼寄之手數仕候處英人右之様子を承り日本同士之戰爭ニ外國人之手さし致譯無之佛若幕府を助候而之不宜候間佛一談判可仕と是も軍艦を呼よせニ參申候由

右風説未々確證ハ無御座候由

- 一幕府が外國人ニ開港之港警衛御頼ニ相成候付上海之軍艦を呼寄所々警衛仕管之由
- 一薩か外國人へ申向候趣ハ此節徳川氏落去ニ相成候間愈政權之 朝廷ニ歸し一途ニ相成候此後外國へ之交際も從朝廷出候を眞實と相心得可申幕府之命ハ一切受申間敷との事
- 一兵庫邊之長土之人數ニ而當時取切居候由
- 一佛ミニストル浪花立除候節何方之人數と申儀ハ分り不申候得共相支へ候付佛人取合十四人計討取候由
- 一前條英船之去ル十日兵庫を發し同十三日崎港着いたし候由
- 正月廿三日着之御飛脚ニ御國より來

正月七日綾小路俊實京都を脱して近江國阿野に至り滋野井公壽と合し兵を發して東軍を討たんと欲す

〔一新録自筆狀〕

慶應四ノ正月八日御所ニ而手ニ入候書付
中興之御機會臣子安眠之時ニ非ス於俊實茂勤 王之微忠聊相盡申度今夕脱走仕候間固り籠居之身分ヲ不憚段大以恐之至ニ候得共非常之御時節ニ差當り粉骨碎身不仕候而之從前無上之 天恩ニ奉報候事難ク實不得已之微衷深御諒察成給度此段宜御執 奏奉希上候也

正月七日

俊 實

下付凡、綾小路御頼子之由ニ御座候

〔日本史協會編 集内信善遺稿慷慨歌集三〕

慶應四年正月六日建言之事有りて參與之役所ニ出て夕方遊野家ニ參る然るに此日公壽朝臣をすゝめて江州にて一舉を成んといふもの有朝臣之に應ず依而此談有予此事に應ずる意なしと雖又義を見て爲さるも如何又公壽朝臣とハ同盟の約有只此朝臣と生死を共にせんとて其儘御供して一乘寺村にて人々を待合せ夜に入て叡山を越へて夜半頃江州阿野ニ着し居たる處へ大原俊實朝臣も兵士を率て同所ニ來り給ひぬこハ當正月三日夜を淀伏見の軍起りて官軍大ニ勝利一橋將軍浪花城に籠城其外二十賊と唱へ候諸藩有依而江濃伊勢志摩之間ニ兵を向んとなり江州守山にて共に兵を合し一先松尾山に屯集(下略)

正月八日我藩德川慶喜征討の奉命書を進達す

〔一新録自筆狀、京都並江戸返達御用狀扣〕

正月七日 御所へ御渡之御書附ニ付同八日御請被仰上候寫

德川慶喜事ニ付而昨夜名代重臣之者に被 仰渡候御書附之趣奉長候此段御請申上候以上

正月八日

細川右京大夫

〔溝口孤雲繼旅中勤勞稜書〕

一同日(七) 御所へ御呼出ニ付藤右衛門罷出候處慶喜公罪狀被數御追討之儀御下問之書付御渡翌八日晚八時分罷歸候付早連宮中府中兼而異論之族ハ猶更無殘打寄銘々存意之次第ハ聊無伏藏可申述ト初發ニ咄合夫よ論談に亙り一旦ハ餘程致混雜候處積り政府從來之義論相立勿論此節之御受無異議被仰上追而關東征伐之御沙汰有之候而茂直様 朝命ヲ被奉

屹度御盡力可被在と相決候上 世子に申上日之出比御受書上ル

但先日來表裏之異見今日初而一筋ニ落合是尤我藩之幸甚なり(以下正月十日の條に出つ)

〔慶應三年十月ヨリ翌明元年閏四月迄 自筆狀並稜書〕

別紙を以申達候去ル五日鬼塚嘉太郎差立候後之形勢例之稜書一通外ニ書付十一通差進申候是ニ而御承知候存様徳川家も言語同斷之有姿ニ相成既ニ昨夜追討之儀御下問有之右付而之種々義論之次第も不尠今八日晚天迄ニ評議相決世子君思召も奉覽候處 思召不被爲在候付御留守居を以御請之御書付被差上此上之御人數出張之 御沙汰有之候而も勿論早速被差出候筈ニ御座候右之一條并稜々之事件巨細古閑留次に申合差立候間直と可有御聞取候近來ハ別而大非常之御處置筋而已打重白夜之無差別千辛万苦御瞭察可被下候何分不能委曲勿々以上

正月八日

三宅 藤右衛門 溝口 孤雲

御家老 惣連名殿

(古閑宮次兼帯の稜書外書付數通は其日々に分載したり)

正月八日京都にある高松外六藩士の宮門通行を禁止せらる

〔王政復古帳〕

讃州高松 十二万石 松平 讚岐守
若州小濱 十万三千 酒井 若狭守
五百石

豫州松山 十五万石 松平 隠岐守
濃州大垣 十萬石 戸田 采女正

明治元年

八一三

志州鳥羽 三万石 稻垣 平右衛門、信濃守
 丹州宮津 七万石 松平 伊豫守、伯耆守
 日州延岡 七万石 内藤 備後守、能登守
 右御門通行止之事

正月八日寺町に御達
 (参考) 防長回天史には志州鳥羽稻垣對馬守長和、丹後宮津松平伊豫守宗武、日向延岡内藤備後守政舉、豫州松山松平式部大輔定昭とあり

正月九日三條實美岩倉具視は副總裁職を拜命し聖護院宮及び徳大寺實則は議定職を命せらる
 [王政復古帳]

右者昨九日副總裁被蒙 仰候由ニ付此段御達仕候以上

正月十日

溝口 孤雲殿
 三宅 藤右衛門殿

三條 中納言様
 津田 山三郎
 青地 源右衛門

[京都并江戸返達御用狀控]

副總裁職 三條 前中納言
 岩倉 前中將
 議定職

聖護院宮 徳大寺 中納言
 右之通被 仰付候事
 正月十一日

正月九日長州藩兵大坂城を焼く

[一新録自筆狀、自筆狀并稜書]

(溝口三宅より通告正月十三日發鎌田平十郎持參の稜書一節) 同十日

一尼ヶ崎西ノ宮邊へ屯集之長兵五百人計華城へ押懸今朝六半時比より御住居向三ヶ所及傳馬橋近邊之歩兵等居候假小屋へ火を放燒立候折節乾ノ風烈敷異ノ方へ燒廣り御住居向者惣而燒失いたし候得共市中ハ玉造口少々類燒御櫛ハ風上風橫其外茂大半相殘候由城中ハ監察衆並尾兵少々相殘被居候得とも戰爭は無之御屋敷は風上ニ付勿論別條無之段去る七日丹波路より大坂に被差越置候歩御使番石井新左衛門内田敬次郎歸來致注進候

付札 本文華城十日之夕漸鎮火ニ至候由一旦相聞候得共昨夕迄も彼方角煙相見候ニ付現實之様子大坂ニ而聞繕罷越候様鎌田平十郎に申合候事 右ニ付下ケ札 華城兵火之儀者九日朝より相起り十一日夕ニ至鎮火之由坂地ニ而馬場より承候事

[細川家北岡文庫所藏文書]

明治元年正月廿五日書

尙々此方に被差向薩長兩藩之先手に之日月の錦御旗御渡ニ相成候由 幸便ニ付拜呈仕候各位愈御堅剛御執務珍重奉拜賀候御國許別條之儀有御座間敷此表相替儀無御座御同慶ニ奉存候次ニ小生儀無異儀相勤居申候間御休襟可被成下候此許華城成行之儀之一昨日迄之處ハ同日通坂之津野田助之尤に託し拜呈仕候通城中ニハ妻木多宮登人相残り尾越公之内ハ城受取に參り候上引渡可申之儀ニ候處其後一昨夕ニ至り尾州藩役名分り不申候荒川彌五右衛門申者當所ニ相詰居候ニホッテ城を爲受取妻木氏も紀州之方へ落被申候由之處昨朝四ツ前御城に火懸り候段口々ニ申立烟見へ候間首藤敬助其外定詰之内一兩人差越申候處長州人五百人計天滿橋を渡り華

明治元年

城大手へ詰懸ケ央ハ城中に入込所々に放火した見候いへ數ヶ所火起り木丸を始所々掃等追々ニ燒失猛火彌盛ニ相成餘烟天を焦らし誠ニ爲恐入事ニ而勿論前文之次第ニ而城兵ハ壹人も無之荒川も如何いたし候や長人難兵ニ指圖いたし炮器等城内を引出し押出したし候を見物として町家或ハ諸屋敷之小者等城内に入込候ハ一切構不申候間各走り込見物に參り候處長人右之者を壹人も返し不申武器等ヲ取出し候人足ニ使候由ニ而既ニ御屋敷方も見物ニ參り候歩御使番小者杯不怪被使候由ニ而漸ク逃歸候位ニ而人足手足り不申處方内ニ入込候而使ひ申候山城外歩兵小屋等も段々火を付燒申候由ニ候得共町家ニハ廣カリ不申尤火消し等に差圖いたし町家へ火不移様ニハ精々長人方手當いたし不怪行届候由其内ニハ薩人も有之候得共先長人計と相見へ候程ニ有之由御熱知通之大城ニ御座候得ハ昨夕迄も火ハ盛ニ有之其内薩人長人三四十人宛三連四連所々ニ大炮を押シ會桑を始徳川家親藩等之屋敷を見廻候得共幕方壹人も無之長人ハ多上町邊ニ止宿薩之本願寺岩國之元屋敷等ニ入込申候由左候而今日も城内不相替所々掃等幕ニ及候迄も盛ニ火手相見へ實ニ無殘之次第幕兵弱しといへとも會熱も先手ニ進居候間今暫共ハ相防可申考申候處纔三四日之戰爭ニ而如此逃北堅城も一時ニ灰塵と相成候ハ時世とハ乍申實ニ血涙之事共御座候内府公も兵庫之様御出とハ申事ニ候得共爲突留儀ハ相分り不申多く紀州をさして引申候由之處昨夕ハ堺の町ニ而幕人と紀州人と及戰爭候趣風説も有之紀州にも入レ不申事ニ候得ハ落人共如何相成り爲申哉哀至極之事共御座候兵庫邊ニ居候幕人ハ役人ニ而昨夕迄ニ壹人も居不申様落行候由薩長之勢不可當趣ニ候御城の火ハ今分ニ候得ハ二三日ハ鎮火ニ之至り申間數燒盡し候勢と相見へ候其内町人ハ不怪病り候由ニ而既ニ今日別紙寫之通町觸共いたし怪からぬ氣位ニ御座候町人とも薩長の人數ハ不怪また幕ハ大禁物カニ而就而ハ御國も幕方の氣拔ケ不申極々不評判之由既ニ昨夜ハ肥後屋敷ハ長カ小倉の怨ニ而燒立ル杯と申候由ニ而御長屋邊ハ不怪ひけ候由勿論左様之儀有之間敷候得共銃隊組等先勝手之出歩行ハ見合心用いたし候様合置申候此許今日迄之處ハ先右之通御座候御國許も御評議等も有之定而夜白ニ懸御配意奉推察候華城右之次第ニ相成候而ハ一旦ハ御人數御呼登しも如何哉自然ハ減し候共ハ仕間敷哉と相考候處今日古閑富次直話を承り候得ハ中々左様之儀ニ無之

別紙寫之通大號令被 仰出被爲在 御受候而ハ彌以御人數之御急之儀奉存候大號令御受之末木村三條様に參り徳川家恩家之譯を以申達候筋も有之候得共中々々數御返答之由ニ而大津口御聲メ申所ニ相成候由委細ハ富次方御聞取可被成下候内府公東退有之候而之却而大津口堅メ直ニ東海道押登申譯ニも相成候ハ彌以困窮事共ニ御座候此末如何相運可申哉何之見込も付不申御賢意奉何度候於御國ハ今度御決之儀定而違却可爲仕夫ニ付而も御配慮奉察候乍然三條様正論之通ニ而御受無之時ハ嚴科と申事ニ候得之如何之儀被申立候哉も知レ不申是も大切ニ奉存候徳川家に御盡力ハ孤雲殿上京後無殘所周旋有之候由下坂有之候節も厚ク盡力相成其邊之儀ハ御手援ケハ有御座間敷奉存候幕ニも共邊之處ハ貫通いたし居可申奉存候乍然兵を被出候處ハ中々不忍事共御座候難所置處ニ而閉口罷在候段々右之外ニも得御意儀も多端候得共先之是迄之處荒形得貴意申候京師之儀ハ富次方御聞取可被成下候他之後便と勿々如此御座候不備

正月十日

馬場(在大坂日付役馬場左衛門)

御國

御日附 中様

向々乍末十方様にも御自愛奉祈候御飛脚參り懸り居候内ニ付段々得御意候儀ハ後便ニ譲り置申候間左様御承知可被成下候以上

正月十日征討將軍嘉彰親王大坂に至り給ふ

〔防長回天史第六編上〕

明治元年春期ノ大勢及ヒ毛利氏(抄略)

(正) 十日將軍宮舟ニテ濃江ヲ下ル我長松文輔之ヲ櫻宮ニ迎フ午時將軍宮ノ船八軒屋ニ着ス小憩ノ後子西本願寺ノ旅館

ニ向フ薩土ノ兵之ヲ環守ス長松文輔輪良助之カ先驅タリ此日將軍宮ハ甲ヲ振シ旗ニ征討大將軍ノ五大ノ字ヲ現ハシ日月ノ兩錦旗ハ其先頭ニ懸ヘレリ

正月十日朝廷徳川慶喜以下廿七人の官位を概き松平容保等六人の京邸を沒收し小濱外四藩の入京を禁じ且つ我藩及び薩長土藝の四藩に命じ會津桑名等各藩邸を收めしめらる我藩は桑名藩邸を收むる任に當る

〔京都并江戸返達御用狀控〕

正月十三日 河口津田青地井上有吉より 同廿六日着

〔前文略〕 御所より御呼出ニ付源右衛門罷出候處徳川家初御追討被 仰出且又會津桑名初屋敷々々被 召上等之儀ニ

一夫十日朝 御所より御呼出ニ付源右衛門罷出候處一夫十日朝 御所より御呼出ニ付源右衛門罷出候處一夫十日朝 御所より御呼出ニ付源右衛門罷出候處一夫十日朝

卷込

寫

御所より今朝御呼出ニ付青地源右衛門罷出候處西四辻様を別紙之通御申渡ニ相成薩州長州藝州土州御同様ニ此方様御加り都合五藩申合屋敷々々之中井主水に引渡候様被仰聞候 畢而一藩方人數之五人敷十人程差出候而可然哉之御内話及相伺申候 右之段相達申候以上

正月十日

御 留 守 居 中

寫

西辻様御渡

徳川慶喜 奥州會津 勢州桑名

讃州高松 豫州松山 備中松山

上總大田喜 若年寄

永井玄蕃頭 同並

平山圖書頭 竹中丹後守

大目附 塚原但馬守

戸川伊豆守 松平大隅守

目附 新見相模守

設樂備中守 榎本對馬守

牧野土佐守 岡部肥前守

大久保主膳正 小栗下總守

星野豊後守 高力主計頭

〔王政復古帳〕

一桑名屋敷御受取之儀今日之夕此方様ニ被仰付候付御物頭に左之通被仰付旨及達候事

桑名屋敷被召上候付右請取方之儀此方様ニ被仰付候依之其方儀外様足輕二十人召連明曉七時より罷越受取可被申候以上

小笠原河内守 大久保筑後守 大久保能登守

戸田肥後守 宇賀甲斐守

右者今度慶喜奉欺 天朝反狀明白既兵端を開候付追討

被 仰出候依之右之輩隨從于賊徒反逆顯然候間被止官

位候事

右一通 奥州會津 勢州桑名 讃州高松

豫州松山 備中松山 上總大田喜

右慶喜同意反逆顯然候間悉屋敷召上殘兵追放被 仰出

候事

若州小濱 濃州大垣 志州鳥羽

丹後宮津 日州延岡

右御不審之次第有之候付被止入京候事

右一通 正月

正月十日

小篠彦右衛門殿

尚々御留守居申談都合能可被取計候以上

〔一新録自筆狀、自筆狀并稜書〕

〔正月十三日發鎌田平十郎持參稜書の一節〕
同日

一會桑等六藩之屋敷被 召上候付此方様始六藩に薩長土受取方被 仰付聞取ニ而此方様ハ桑名屋敷ニ相當候處是亦夕刻殊ニ俄之事ニ付先つ小橋恒藏益田勇を物見ニ被差越受取ハ小篠彦右衛門足輕二十人引連明曉七ツ時發邸之及御達置候處物見立歸空邸之段致報告候

正月十日我藩兵因州藩に代りて橋本關門を警衛す

〔一新録自筆狀〕

正月十三日之自筆ニ添

稜書(一節)

正月十日

一夕刻俄ニ橋本之關門御固被 仰付候付御物頭組共其外御長柄之者等都合八十人餘夜五ツ時前迄ニ被差出候是迄御受持因州者引渡相濟大津口へ被差越候

〔溝口孤雲鶴中勤勞稜書〕

一正月十日夕刻俄ニ橋本警衛被仰付都合八十人隊長引率夜五時分發足(以下正月十三日の條に出つ)

正月十日我藩與後國日田警衛の爲め藩兵を出張せしむ

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人數從元治元年
至明治元年二月 坂本彦衛調の内〕

同日(正月
十日)

一日田爲警衛物頭三人組足輕引卒出張足輕ハ六十人

正月十日外國掛東久世通禧書を各國使臣に贈り兵庫神戸町運上所に於て岩下佐二右衛門等四人をして諸事交渉の任に當らしむべき旨を報ず

〔一新録皇令〕

以手紙致啓上候然者岩下佐二右衛門伊藤俊助中島作太郎寺島陶藏へ兵庫岬戸町運上所に於而諸事取扱之役場申付候間兵庫奉行も可申名目之役場相立候迄之間御方ニ於而奉行同様諸事引合可被成候尤も右四人之内ニ而太陽日之外毎日神戸へ爲相詰可申旨左様御承知可被下候已上

正月十日

各 國

東 久 世 前 少 將

〔一新録探索報告〕

兵庫表事情正月廿五日夜ニ入書ス(抄)

一久世様昨日當所御退港ニ相成候事

明 治 元 年

一兵庫神戸兩所之取締之惣而薩長が仕候而只今通ニ而之十分人望を得候委ニ相見申候外國取扱之儀一旦之岩下佐二右衛門寺島陶藏中島作太郎伊藤俊助へ被仰付候處今朝岩下尊ニ中々以自身共世話ニ而行届候儀ニ而ハ無之候付久世様に奉願兵庫一ヶ所之惣括ニ引除長州之神戸之惣括外國事務ハ伊藤俊助裁決ニ預り共ニ一ヶ所宛受持候由大坂之取締ハ後藤庄次郎ニ致委任宇和島茂同様ニ候へとも一切世話行届不申途餘程不足之弊ニ相見申候是等之儀ハ未明白ニ精實を得不申候得共全土和二藩ハ中心之薩長同腹とハ相見不申考察仕候事(下略)
右者須藤敬助探案生書取相見候

正月十一日我藩物頭小篠彦右衛門をして銃兵二十名を率ゐて桑名藩邸に赴き之を押收せしめ留守居役を以て其旨を申告せしむ

〔一新録自筆狀、自筆狀并稜書〕

同十一日(昨十日の條の續き)

一前條如期限小篠列出立先ツ鷹ヶ嶺之桑邸へ罷向候處未タ家居も礎と無之材木のミ有之付相改置夫が千木通へ罷向候處是以桑人之一人も居不申納戸と相見候所へ箆笥杯有之能キ品ハ入居不申其外ニも諸道具殘居候由然ニ奥が帯刀之兩人罷出候付鐵炮差付候得ハ大ニ恐怖藝藩之者ニ而重役が桑邸見繕ニ遣候段陣謝いたし候間差返諸事無滞相濟書過皆々歸邸

但本文之二邸受取候上 御所之御大工某名前に相答候様最前御沙汰ニ付共取計いたし候事

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數從元治元年至明治元年二月 坂本彦衛調の内)

同月(正月)十一日

一京師桑名屋敷受取命セラレ物頭一人足輕二十人其他役人共出張

〔王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

會津列六藩屋敷々々被召上受取渡之儀薩長土藝此方様に被仰付候處五藩同道いたし候而之多人數却而紛雜いたし可申との申談ニ而聞取ニ相成此方様ニ之桑名ニ相當候付御物頭小篠彦右衛門組共且秋吉又助同道右屋敷に罷越中井主殿相渡相濟候付參與御役所に御届左之通

覺

鷹ヶ峰

一桑名屋敷

壹ヶ所

但表門番所壹ヶ所限ニ而屋敷内容地ニ相成居居住之者無御座候

千木通下立賣下ル

一同拜借地

壹ヶ所

但長屋數ヶ所御座候得共居住之者無御座候且又諸道具入土藏壹種銃を御有之候

右者昨日御達之趣ニ付越中守人數差出中井主水立會及吟味候處右之通ニ付直ニ同人に引渡申候此段御届仕候以上

細川越中守内

正月十一日

青地源右衛門

正月十一日東海道鎮撫總督橋本實梁直に關東へ軍を進め先づ桑名大垣を攻撃すべき命ありしを以て我藩兵士を増し三百餘名を隨行せしむ

〔一新録自筆狀、自筆狀並稜書〕

〔正月十三日發歸田平十郎持參稜書の一節〕
同十一日

侍從カマ、少將カマ、
一大津口へ御出張之柳原少將様橋本侍從様關東迄御押詰先つ大垣城に攻撃候御模様之處僅百餘之御人數にては空く御本陣を守護戦功を立候儀茂六ヶ敷此節相働不申候而は御國之榮辱ニ茂致關係候間御番頭御奉行茂出張御物頭も増出張被仰付度段再應早打を以申越候付十日之夜半より未明迄及評議若殿様尊慮奉伺候處御人數差出候様被仰出候付書八ツ時前下津縫殿永屋猪兵衛以下隊列を成致出陣候但御人數附等は他筆御用狀之通に候

〔林新九郎日録〕

一同十一日晴、前日御人數橋本少將隨從之我藩兵也晝比出張夕刻參與役所に出ル御用間違也

〔江戸京都來狀扣〕

〔正月十三日在京溝口孤雲三宅藤右衛門より御家老御中老完書狀之内〕

下津縫殿
組共
永屋猪兵衛
林常之允
末岡左兵衛
内藤宗賢育
内藤泰吉

福原謙山

右者大津口爲御警衛被差出追而 勅使御出張之向に茂被差越旨 ○(合印ナリ)

但澤村八之進組御番方並御長柄之者之此節之御人數着之上引揚候様其餘之面々之直ニ相詰追而

勅使御出張之向に茂被差越旨

小篠彦右衛門
八木田小右衛門

右者足輕二十人完引連大津口爲御警衛被差越追而勅使御出張之向に茂被差越旨
右之通一昨十一日及運候

〔付箋〕○大津口御警衛御人數付

- 一四十五人 下津縫殿 組共
- 一七十八人 御物頭並副士 外様足輕共
- 一五十三人 在御家人引廻 在御家人共
- 一十二人 白砲打方
- 一人 御醫師
- 一人 歩御使番 歩御小姓
- 一人 御昇之者

- 一三十六人 御奉行御目附 附屬共
- 一拾五人 御長柄之者
- 一八十八人 下地被差出置候財津次郎兵衛門弟以下外様足輕銃卒共
- (三百三十四人)
- 右之通御座候尤連人ハ外ニ而候以上
- 正月

〔安津免久佐〕

慶應四戊辰正月京攝變動之儀ニ付國友式右衛門仕出之來翰寫(節略)

明治元年

八二五

十日 勅使橋本宰相様桑名爲詰問御越時宜次第直ニ御征伐ニも可相成との事ニ而 此方様御人數是迄大津致出張居申候を右宰相様御旗本に爲警衛御供之管ニ而同夜發足然ル處又御模樣替り宰相様桑名一變シ美濃大垣戸田侯に御打向城攻との事ニ相成候間御人數も御備手片手下津殿組共御物頭四人小藤神足 八木後藤 組共大炮手杯打混都合三百人計り十一日夕出張相成申候首途ニハ例之通被 召出於 御前御酒肴頂戴難有 御意共御座候由ニ付孰茂進立未々迄必死之覺悟軍必死ニ覺悟不珍候、面色ニ顯候由就中神足杯ハ實ニ決心之辨相見申候由ニ而當時者 此方様官軍方ニ付薩長カハ些トモ共此節ハ實ニ顯候由就中神足杯ハ實ニ決心之辨相見申候由ニ而當時者 此方様官軍方ニ付薩長カハ些トモ失禮等數様子者無之候得共二藩ハ一舉して會桑勢を打破終ニ大坂城迄乘取關東勢を數十里之外ニ追退候ニ付薩長人之鼻ハ天狗方も高ク肩を飛龍魚鱗之如クハからしむたりを拂勢市街之老若も薩州人之勇武を語候程ニ付何となく朝廷之御依頼も可有之様察被致候故於御國も何方にそ相手ニ候ハ、御國之武威を天下ニ輝シ不申而ハ天下之口を噂キ候事難成而已ふらそ近隣小諸侯之向背ニ茂拘り天意之所趣又可惶存前茂候ハ幸此節大垣ニ而錦之御旗下ニ三百人之尸を晒候ハ、御國御興業之墨證ニも相成可申と實ニ盡忠報國之志ニ而出張ト推察ハ陰ニ落涙致事ニ候時勢ク様ニ成至候而ハ名を正しくし上氣を勵弱を助ケ強キを抽キ天下ニ茂可横行勢無之而ハ却而宗祖を存候儀も無覺束一隅ニ割譽吾我國を拭衛ルホトハ策之尤小ふる事ト愚考ハシ候以下正月十三日 大垣征伐に續ク

〔安津免久佐〕

慶應四戊辰正月小山正之助書狀之寫

辰二月七日着

去ル三日戰爭差起り即夜より一兩日之處 朝暮是非得失勝背之論決兼候處 若殿様 御一言御英斷ニ而漸一決ハシ候由共 御言葉ニ一々論說尤ニ相聞候然シ此方身躰ハ京地之土壤ト相成候處ニ決心ハシ居候間左様安心 朝命を奉シ候様土壤ト成ルトハ「ハマルゾ」ト被 仰出夫カ俄ニ橋本様大津御出張御守衛御請ニ相成候由此時ハ未タ朝暮夫

カ御運ヒ宜敷相成御役儀茂被爲蒙 仰候由

一右御一決之後段々退出御家老業迄居殘之所ニ被 仰候ニハ必此時躰打變候儀出立之砌夢ニ茂存候ハ、第一顯光院様太守様は茂篤斗御暇乞ハシ置可申ものと一旦 御落涙被遊候由其後ハ事々物々確然一途 御動搖之御氣色聊相見不申誠ニ難有 御明君と申事ニ御座候

一右之 御誠心下ニ徹シ此度大津御練出御人數下津澤村兩手五ニ出張懇願論決兼 尊聽ニ達ニ相成候處孤雲殿御呼出ニ而備組左右者何カを先手トハシ候哉と御尋ニ相成左を先ニ仕候ト申上ニ相成然ラハ左手を遣シ可申との 御言葉ニ而下津手出張ニ相究然ルニ澤村手之内も少々大津御固メニ最初出張ニ相成居候處此分ハ下津手ト引代リ引取管之人數ニ候得共とふノ、引取不申其儘強而出張願出一旦出張之上ハ是非一戰ニハ立向中度段懇願ニ付其通被仰付候事

一大砲手池邊門人も白砲貳挺撃之打人迄出張跡ハ壬生に被殘置管之處是亦一手之人數分ケ散シニ相成候而者不安心杯種々論說起りとふノ、押付出來兼思召ニ而池邊手ハ無殘出張被仰付候由 但此手ハ十八日大津御發途前晚壬生寺町カ直ニ出張

右之通我先ニト先鋒を爭イ進立候ニ付而ハ上ニ茂不怪御満足ニ被思召上候よし

一此節ハ小倉出張ト違一統穩順柔和ニ而荒々敷懸合事等ハ一切無之私共大仕合ニ候事

一統御出方筋此度此節烈敷厭方ニ而何一ツ願ケ間敷儀無之候事

正月廿三日認

正月十一日朝廷列藩に應分の兵を率ゐて速に上京すべき旨を命ぜらる

〔一新録自筆狀〕

昨十一日 御所御仮建に御呼出ニ付津田山三郎罷出候處壬生修理權大夫様カ別紙御書付一通御渡ニ相成候付則御達仕

候以上

正月十二日

御留守居三人

兩名當(溝口)

細川越中守

兼而被 召設候儀者全公平業議ヲ可被爲探 思召之所豈圖らんや突然干戈ニ至り終ニ大號令被發候通ニ付各國力相應
人數引纏連ニ上京可有之御沙汰候事

正月

但危急之御時節ニ付連ニ上京勿論候得とも路程遠近も有之候事故凡之處在京重役或は留守居共見込趣可申出其上
御沙汰之旨も可有之尙又當主所勞等ニ而上京難致向ハ名代又は家老之者可差出候事

右御書付ニ張紙付居候書面左之通

此御書付ハ若殿様御出京被爲在候上ハ御渡ニハ及び不申答之處間違ニ相成候迎參與衆方御噂之由併御人數ハ成丈迅速
ニ被差登候様との事ニ御座候

〔密書輯録〕

自著子爵細川利永履歴大略

一慶應四年明治元年正月十一日御所御仮建ヘ重臣被召呼兼テ被召設候義ハ全公平業議ヲ可被爲探思召ノ所干戈ニ至り候ニ付
人數引纏連カニ上京候様御書付ヲ以テ被命

正月十一日舊幕府は酒井雅樂頭に加判之列上座を命じ立花出雲守に老中格を命じたる旨諸藩江

戸留守居役に達す

慶應二年正月より
〔御同席觸寫並大目付様御廻状寫扣〕
二月二日蕭之御飛脚ニ江戸ノ相違

御同席觸寫
稻葉美濃守殿御渡候御書付寫三通并御覺書寫壹通相違候間被得其意御同列中不殘様無遅滞早々可有通達候答之儀之先
々從銘々不及挨拶各より川村信濃守方に可被申聞候以上

正月十一日

大目付

松平大和守殿

留守居

大目付に

酒井雅樂頭事其臘晦日於大坂表加判之列上座被 仰付候此段向々に可被達候

正月

大目付に

立花出雲守事老中格被 仰付候諸事前々老中格被 仰付候節之通相心得候様可被達候

正月

正月十一日舊幕府は江戸に於ける薩人の暴行及び京坂間の事變を諸藩江戸留守居役に通達す

慶應二年正月より
〔御同席觸寫並大目付様御廻状寫扣〕
(正月十一日大目付より達し稻葉美濃守殿御渡候御書付寫三通の通)
大目付に

松平修理大夫奸臣とも兵仗を以 宮闕ニ迫り奉侮幼主私論を主張シ 先帝御依托之攝政殿下を廢し恣ニ宮堂上方を黷

明治元年

八二九

陟し或者家來共浮浪之徒を語合屋敷に屯集江戶市中押込強盜致し西井左衛門尉人數屯所に炮發亂妨其他野州相州等所々燒討劫盜及候證跡分明ニ有之殊此程御上洛之前路を遮り炮發亂暴終ニ去ル三日より京阪之間不容易事態ニ推移候段大阪表より注進有之候此段爲心得相違候
右之趣向々ニ可被達候

正月

正月十一日舊幕府は時勢に鑑み軍事費の外總て緊縮を加へ工事修繕等は一切中止する旨を達す

〔慶應二年正月より御同席觸寫並大目付様從廻狀寫扣〕

〔正月十一日大目付より達し稻葉美濃守殿御渡の書書〕

覺

御軍備專要之御時節ニ付當分御軍費之外者都而御入用御渡無之書ニ付諸向日用不可欠品者格別之儀其餘御買上品之勿論御普請御修復等追而及沙汰候迄一切取計不申儀と可被心得候
右之趣向々ニ可被達候事

正月

正月十一日舊幕府は徳川慶喜の奏聞書に薩藩罪狀書を添付し君側の奸を除くべしとの意を諸藩江戶留守居に達す

〔慶應二年正月より御同席觸寫並大目付様御廻狀寫扣〕

御同席觸寫

尙以乍御手数數早々御順達御留り之御方様より御返却可被下候以上

以廻狀致啓上候今日大御目付木下大内記様より重役之者壹人西丸に罷出候様御達ニ付則罷出候處於柳之間御老中様より可被成御渡處御多用ニ付御同人様より御書付寫三通被成御渡御同席中様方に可致通達旨被成御達候則御書付類寫三通各様迄致御通達候此段可得御意如斯御座候以上

正月十一日

松平大和守内

岩倉彌右衛門

三上雄之進

御次第不同
細川越中守様

(外四名)

御留守居中様

先般獻言之次第茂有之候處登料んや松平修理大夫家來共要 幼帝不盡公議矯 寂慮天下之亂階を醸し候件々不暇枚舉依之別紙兩通之 奏聞を達け大義に倚て 君側之惡を掃ひ候ニ付速ニ駈登軍列ニ可相加もの也 (本文別紙兩通とあるは所の大坂に於て發したるものと同しきを以て此には省略す)

正月十一日日本藩世子參内して天機を奉伺す

〔京都並江戶返達御用狀控〕

正月十三日河口津田青地井上有吉より同廿六日着

別紙を以申達候若殿様一昨十一日四時之御供揃にて有柄川御宮様三條様久我様に被爲入夫方御參 内被爲濟候幕前被遊御歸座候

〔池邊悰右衛門日記〕

明治元年

八三一

同十一日 天氣御伺として世子御參 内御供池邊

正月十一日備前藩士兵庫に於て外國人の儀衛を妨けたるを憤りて之を砲撃す英米二國兵を出して神戸の關門を扼し且つ兵庫神戸二港に碇泊せる各藩の船艦を繋留す

〔京都大坂探索書〕

慶應二年八月以後
〔前略〕
一今日より九日前備州侯上京之節於兵庫夷人道を妨しニより館を以而ツキしか争亂を指發備州軍卒七百人余を以各國商船邊ニ而少々戦争夷商三人死傷英軍船より軍兵百五十人余を以上陸せしかトモ最早備引退布引ノ瀧邊ノ間道を経而國ニ歸候英云備國程近シ可變擊併アトミラルニ報告之上發スヘシト此争亂より夷兵庫ノ通路を斷人を不通薩土周旋今猶如以前ト云

此事件人毎ニ少シ完異同有之大異如斯(以下略)

正月廿日

荒木大右衛門
廣岡虎次郎

〔形勢雜記壹〕

慶應四年正月十一日備前ノ家老某上京ノ途次於兵庫英吉利人亞米利加人某ノ行列ヲ妨ルヨリ遂ニ兩人ヲ殺害セリ此時慶喜公政權返上大坂退城ノ後ナルヲ以テ外人政府ニ訴ル所ナシトシ英ノ「コンボート」ヲ以テ日本ノ汽船兵庫神戸等ニ碇泊セル各船艦ニ照會セシ條件

一兵庫神戸ノ兩港ニ碇泊セル日本ノ船艦暫他ニ出帆ヲ留ルコト

一各船艦日本ノ國旗ヲ撤スルコト

一各船艦ノ器械ヲ預ルコト

此時偶肥後ノ凌雲丸兵庫港ニアリ船將小野 答テ云至急出帆ノ用アリト雖モ頼談ニ依テ暫ク滯船ノコトハ諾ス然トモ國旗ヲ撤シ器械ヲ渡スノ兩件ハ我船艦規款ノアルアリ承諾シ難シト「コンボート」答テ云國旗ヲ撤スルハ敵國ニ降伏ヲ表スル式ナレハ貴意ニ從ハン然トモ器械ノ件ハ滯泊承諾ノ驗ニ付何品ニテモ一品預リ置度旨懇談スルニヨリ聊ノ器械ヲ渡候處十四日ノ夕返還セリ 朝廷ヨリハ英亞兩人殺害事件ニ付 勅使東久世少將參與外國掛岩下佐次右衛門出張談判アリ

〔一新録自筆狀〕

〔正月廿日發海口三宅兩人より通報の秘書の一節〕
正月十三日

一兵庫ニ而英人亞人を日本人殺害いたし候付同港碇泊之日本蒸氣船要用之器械を諸國之ミニストル預候由ニ而凌雲丸乗組之面々大ニ致沸騰候間尊慮伺取候迄先相議候様申談終方十右衛門馳上り今夕刻木村得太郎御小屋へ罷越右之趣申出候

〔形勢之部一括〕

兵庫表聞取書

一正月十日大坂出立幕過着安田惣兵衛を呼出兵庫一鉢之模様承り合せ申候處兵庫中ニ之關東之役人壹人も居不申町役人通辯官ニ至迄盡ク遁去内府公ニハ去ル七日夕軍艦廻洋丸ヲ御發シニ相成紀州ニ御滯と申説も有之候へ共直ニ御東歸ニ相成候趣ニ御座候其外順勤丸翔鶴丸富士丸等之幕艦九日十日迄ニ不殘出帆仕候由

一神戸居留之外國人去ル三日後戦争并華城燒失等之儀相聞へ申候ニ付必定兵庫も被燒拂候との懸念ニ而是迄開肆仕居候商賣道具等皆々取片付船々ニ積込異館ニハ大炮二十門も備へ自然之節ハ砲發之覺悟仕居候處十一日晝比備前家老日置

明治元年

節刀西宮御警衛として罷上り候途中行列ニ異人三四輩行懸り行列をきり候ニ付三度迄押返シ申候處短筒を差付候間不得止壹人槍ニ而突伏せ續而炮發兩人打倒し都合三人之内英夷貳人墨夷壹人ニ而御座候右ニ付各國異人連ニ上陸騎馬隊撤兵隊を以追懸ケ餘程炮發も仕候得共幸備前人ハ本街道を廻し山手ニ引キ揚ケ瀧谷と申方に繰り込候ニ付壹人も死傷無之人足壹人被打倒具足箱槍杯異人ニ被取候而已ニ而御座候然處異人ハ皆ノ引取兼而被打拂候懸念も有之且何方之仕業とも不相分候ニ付神戸之關門を閉生田川邊ニハ臺場を築立且兵庫港に碇泊之蒸氣船筑前久留米宇和島之船無理ニ神戸之方に奪去り間ニハ金銀衣類等も奪取候位ニ而餘程暴行ニ及候御國之船者幸神戸ニ碇泊罷在候ニ付其夜ハ無事翌十二日英人參り運轉之器械を預り此節之事件片付候迄出帆見合せ吳候様申向候間不得止相渡申候處東久世様御談判之上無異議差返し申候事(以下正月十五日神戸に於ける外交談判の條に續く)

正月十一日桑名藩重臣松平帶刀等書を尾張藩に致し其君臣一同謝罪謹慎せる實情を朝廷へ奏達せられんことを歎願す

〔京都並江戸返達御用狀控〕

此書付桑谷表は外間ニ被差越候歩御小姓手ニ入候由御留居方より借受候事
 尊王之條理者弊藩君臣一同厚相心得罷在候者申迄茂無之今般於大坂徳川家ニ隨從及戰爭途ニ朝敵之名を受候趣國許に相聞一同恐懼罷在申候重疊奉恐入候付故越中守遺息萬之助如臣下一同謹愼罷在候條何卒平生之心事御了解大納言様御手筋を以何件之始末乍恐九重に相貫寛大之御沙汰御取成被下度奉存候此段奉歎願候誠恐惶頓首謹言

- 正月十一日
- | | |
|----|------|
| 酒井 | 孫八郎 |
| 吉村 | 五左衛門 |
| 同 | 采女 |

尾州也 御用 人中様

右者一日城を枕ニ討死又ハ城を明渡候歎幼主推立歎願三等之議論ニ而右之通ニ一決と云々

正月十二日征討將軍嘉嘉親王大坂西本願寺へ下向の旨布達せらる

〔王政復古帳〕

(正月十二日參興役所に於て非藏人橋本安藤より志理傳内に渡されたる書付四通の)

- | | | |
|------|---------|-------------|
| 征討將軍 | 仁和寺宮 | 御旗奉行 |
| 軍事參謀 | 東久世前少將殿 | 五條少納言殿 |
| | 烏丸侍從殿 | 四條前侍從殿 |
| | | 軍監御使番兼帶 |
| | | 平松甲斐權介殿 |
| | | 右西本願寺に御下向之事 |

正月十二日日本藩世子喜廷召に依りて參内し褒詞及び議定任命の宣旨を拜授す

〔王政復古帳、一新録自筆狀、京都並江戸返達御用狀扣〕

- | | |
|----|------|
| 三輪 | 權左衛門 |
| 大關 | 五兵衛 |
| 服部 | 八之允 |
| 松平 | 帶刀 |

其藩事従前報國之志不淺應 召登京屬官軍候段寂感不斜候猶此上可勵忠勤旨 御沙汰候事
(右一通)

議定被 仰付候事

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

議定職

智 恩 院 宮

細川右京大夫

參與職

西 四 辻 太 夫

長 谷 美 濃 權 介

參與助役

石山右兵衛權介

岩 倉 侍 從

萬里小路右少辨

右之通被 仰付候事

正月十四日

〔一新録自筆狀〕

慶應四ノ正月十三日京發鎌田平十郎一同着自筆狀

以別紙申達候 若殿様昨十二日依 召被遊 御參内候處議定且御褒詞被爲蒙仰奉恐悅候右御一條ニ而從 朝廷御疑
惑等不被爲在儀茂榮然之筋ニ相運安心之事ニ御座候去ル九日以來之形勢ハ例之稜書鎌田平十郎に引渡置候間御受取御
披見候様存候其外時體之儀茂同人承知之事ニ付直と御聞取可被下候此段爲可申達如是御座候以上 (鎌田平十郎持參の稜
落の事より以後其日) 其日に分載したり

正月十三日

三 宅 藤 右 衛 門
溝 口 孤 雲

御 家 老 當
御 中 老 當

〔坂本彦兵衛日記〕

正月十二日

(前略)此日尾州大納言、松平大藏大輔、松平容堂三人も更ニ議定拜命あり
當藩之儀ハ從來佐幕之唱有之 朝廷之御疑惑を蒙居候處右之御沙汰(世子議定任命並に要詞ありし事を云ふ)ニて御清解之筋榮然と相分末
々迄茂先ツ安心且奉恐悅候

正月十二日日本藩政府は國內を警戒し且つ隨時出兵に差支なき様各々準備し置くべきを命令す

〔文久三年より慶應四年まで御書附並御觸達等之扣〕

此度京攝之間争亂之報告有之候ニ付而者差寄京都に御人數出張被仰付候事ニ候然處如此非常之形勢ニ成行候而者如何
様之變動茂難計御國內之御警戒茂彌以嚴重ニ無之候而之難相濟内外切迫之事情等孰茂屹ト相辨何時何方に出張茂無支
様致覺悟臨機之御下知を奉待候様被仰出候事

正月十二日

正月十二日大津口出張我藩物頭小篠彦右衛門東海道鎮撫總督參謀海江田多喜次木梨精一郎等と
軍議す

明治元年

〔一新録自筆狀〕

〔正月廿日發講口三宅兩人より通報秘書の一節〕
正月十三日

一大津口御出張之御兩卿爲參謀薩之海枝多喜次長之名前不相分（木梨精一郎賦）參居候由昨日相分候ニ付小篠彦右衛門儀海枝を訪候得共居合不申候處追而彼方より尋來無伏職然談夫より軍議ニ茂被加之由彦右衛門申出候由

正月十二日我藩鎮撫總督より保管を命せられたる旗捧持の爲め藩士十六人の引揚を中止して總督に隨行せしむ

〔一新録自筆狀〕

〔正月十三日發講田平十郎持參の一節〕
同十二日

一勅使之御兩卿より紅白之御旗五本御預ケ之處大物ニ付持人十五人被差越候様且御兩卿別々ニ御押ニ付下津以下到着之上引揚候筈之澤村組之御番方直ニ向々迄出張被仰付候様左茂無之候へハ御本陣ニ他藩之人數を被加至而煩ハ敷相成可申との趣大津より古賀作十郎を以申越候付評議之上奉窺尊慮候處兼而御預ケ之一隊を引分け候茂不可然其上御側御手薄ニ被思召上候間成丈々十六人ハ引揚ケ他藩之人數不被加様致周旋見候様被仰出候付其趣御奉行より永屋猪兵衛へ申越候

同十三日

一前條之通候處昨夜小篠彦右衛門大津より馳歸り十六人引揚候而者兩卿始之御疑惑を生極々都合不宜候間直ニ向々迄出張被 仰付度願出之通被仰付候
一淀川昨日より通船之路開ケ候由

正月十二日舊幕府は徳川慶喜の今日歸府せしことを告げ且つ此後の形勢に依りては速に上坂すべき旨を達す

〔御同席觸寫並大目付様御廻狀寫扣〕

御同席觸寫

以廻狀致啓上候然者今日大和守登城被致候處稻葉美濃守様被成御渡候御書付寫登通大御目付川村信濃守様より被成御渡御同席中様方に致通達候様被仰聞候付右寫各様迄致通達候様被申付候尤御答之儀之御銘々様方不及御挨拶御通達相濟候上信濃守様は私共方御届可仕候依之廻狀數通相認持廻り申付候以上

松平大和守内

正月十二日

岩倉彌右衛門

御次第不同

三上雄之進

細川越中守様

〔外五名〕

御留守居中様

上様御事御軍艦に被爲召今十二日西丸に着御被遊候尤此後之動靜ニ寄速ニ御上阪被遊候思召ニ候
右之趣向々に早々可被相觸候

正月

正月十二日徳川慶喜は江戸に於て伏見鳥羽開戦前後の概要を諸藩に示し同心戮力せむことを索む

〔慶應三年正月より 江戸返達御用狀扣〕

正月十三日澤村藤本より二月二日着(通信の一節)
一昨十二日内府公御歸城ニ付御並様之趣ニ應稻葉美濃守様ニ御留守居代田中銜之進罷出伺勤仕候以上
上意振

先般尾張大納言松平大藏大輔を以可致上洛旨 御内諭を蒙り奉り候ニ付去ル三日先供之者四隊關門迄相越候處松平修理大夫家來共無謂通行指拒兼而伏兵等之手配致シ置突然彼より及發炮兵端を開粗暴之舉動及候者全修理大夫家來共一己之所業ニ有之剩嬌 微慮朝敵之名を負せ他藩之者を煽動シ人心疑惑を抱キ戰利あらず此分ニ而ハ夥多之人命ヲ損シ候而已ならず可奉寧 宸襟誠意も不相貫紛紜之際曲直判然不相立候而は不本意之至深心痛致候就而者深キ見込茂有之兵隊引揚軍艦ニ而一ト先東歸致候銘々同心戮力爲國家可抽忠節事

正月十三日朝廷小濱大垣の二藩謝罪の實効顯れたるを以て賊徒追討の先鋒を命せらる

〔王政復古帳〕

昨夜參與御役所を筑前様衆一同御呼出シ付池邊松右衛門罷出候處非藏人松室伊勢を以別紙御書付一通御渡ニ相成西海道且右出向キ々々之御人數に茂通達可致旨演達ニ付此段御達仕候以上

正月十四日

溝口 孤雲殿
三宅 藤右衛門殿

津田 山三郎
青地 源右衛門
若州 小濱

右者此迄御不審之次第有之候ニ付被止入京候處謝罪之道追々相立今度賊徒追討被^伐 仰出頼撫使御發シニ相成候ニ付北陸東山二道之先鋒兩藩に被 仰付成功之後別段思食可被爲在義ニ候間其旨可相心得様 御沙汰候事
正月

〔安津免久佐〕

慶應四戊辰正月京攝變動之儀ニ付國友式右衛門仕出之來翰(節略正月十日の續き)
大垣征伐之管ニ候處追々謝罪申出ニ付御免ニ相成東海東山討手之先鋒被仰付追而功跡^{續敷}ニ因而尙御沙汰之旨茂可有之段被 仰出候ニ付大垣の方ハ相止又桑名に向ニ相成候様子ニ候處十五日拙者京地發足迄ハ宰相様大津御滞ニ相成候由ニ候

御征伐可相成管之諸侯

會津 桑名 大垣 松山 高松 宮津 小濱 延岡 鳥羽
右之内大垣小濱ハ謝罪ニ付東海東山之先鋒被 仰付候(以下略)

正月十三日東海道鎮撫總督橋本實梁同副總督柳原前光桑名城を攻撃すべきにより岡崎外五藩の重臣を大津に召集す

〔安津免久佐〕

今般 朝敵悉追討被 仰出近々桑名城に可取掛候ニ付而ハ御用之儀有之候間大津驛迄軍役登人急速可罷出候事
正月十三日

明治元年

八四一

橋本 少將殿
雜 掌

柳原侍從殿

雜掌

岡崎 尾州 吉田
水口 龜山 藤堂

重役 中

正月十三日橋本の警固を免せられたる我藩栖本助七の一隊京都壬生の藩邸に歸る

〔一新録自筆狀〕

〔正月廿日發溝口三宅兩人より通報の稷書一節〕
正月十三日

橋本之御固と昨日御免跡と加州に被 仰付候依而被差出置候栖本助七以下之御人數今日歸邸

正月十三日日本藩備頭清水數馬兵を率ゐる熊本を發して京都守衛の途に上る

〔京都江戸狀扣〕

以別紙申達候清水數馬組共京師變動ニ付爲御守衛出京被仰付旨去ル十一日及口達同十三日十四日兩日ニ爰許被差立候此段爲可申達如是御座候以上

正月十六日

惣 連 名

溝口 孤雲殿
三宅 藤右衛門殿

正月十三日日本藩江戸留守居澤村脩藏等急使を發して藩世子喜廷上京の機嫌を伺ひ且つ時變に處

する當面の計を請ふ

〔江戸返達御用狀扣〕

慶應三年正月より
正月十三日澤村藤本より稷書二月二日着

此度内府公御歸城付而御書付御渡等之儀ハ御用狀之通ニ御座候當月三日以來伏見鳥羽邊ニおゐて戰爭之趣ハ同七日頃より所々に町飛脚等之注進有之候由ニ而寫等手ニ入候得共暇とと相分兼日々京地より之御左右を相待候處六日京地仕出之町幸便十一日着此方様御進退之御模様も奉承知初而安心仕候事ニ御座候若殿様御着京即日之大變ニ候得之御途中之儀之申上候迄も無之即夜之御參内を初其後之御配慮等無申計被是重疊奉恐察候右ニ付而ハ不取敢若殿様御機嫌且爰許詰合之覺悟筋をも差寄奉伺度旁可然人躰昨今に者早打差立候方と衆儀之中昨朝内府公御歸城其上御書付も出候付而一刻も右之御模様等申上候方と申談中島嘉左衛門太田黒亥和太兩人今日被差立候方ニ取計申候委細之儀ハ脩藏より右兩人に申合候事御座候

一右ハ御國押通差立可申處爰許御人數少其上此節京地之御所置筋等委細伺取且者爰許詰合覺悟筋等伺取不申候而ハ孰茂當惑之次第ニ付右兩人者京地迄ニ而引返候様有之度依之其許に之御用狀ハ京地より別人被差立候職又者兩人之内一人ハ其許に被差立此元は者いつれニ兩人者被差越候様御家老衆にも申達宜取計有之候様申達候事御座候自然爰許覺悟筋之御差圖者御國に伺之方と申運ひにも相成候而者急時之事ニ至り兼猶更當惑之次第ニ付可相成者京地より一應之御差圖ニ而も有之候様ニと申衆議ニ而委細兩人に相合候筋も御座候以上

〔宇野文書〕

拜呈仕候過日は態々御來光被成下候得とも少々取込ミ居御遠慮ニ而御辯明も充分ならず汗顔仕候因而當時之狀況記憶ニ存し居候を略陳仕候

明治元年

内府公江戸歸城ニ付而ハ府下の人心恟々として大ニ動搖せしに依り兼而懸意に交り候會津邸に參り書生輩にては十分信用ならずと思ひ重役の人に而會を申入れ候處手代木某といふ人出て應接致し候内府公歸城之事より今後幕府之處置筋等相尋候處是迄は何事も伏藏なく御談合申來候得共今後ハ從來の如く御交際も出來間敷と申候而何となく疎外せし様感せられ甚しきは若手の書生輩の如き後日干戈の間に御面會致さんなどと暴言を吐き候ものも有之昨日迄互に懇切に交り候もの、一夜の中にかくも打變り候は容易ならざる儀と存し直に御屋敷に歸り御留守居の澤村藏信に事情を報告致候また當時江戸へ詰合せ居候大田黒亥和太も他方面の縁故を便りに探索致候處大同小異の報告をもたらし候に付詰合一同覺悟筋之儀ニ付衆議に互り何様物騒之際應多幕兵等芝の諸藩邸を襲撃せし事も有之今度我を敵と見候は如何なる暴舉に及びて我藩邸へ來襲せんも謀り難しとて龍ノ口御邸は餘りに江戸城に間近なれば引拂ひ濱町御屋敷へ移轉する方然るへしといふ議も有之又ハ留守居として上の御差圖も無之に御上屋敷を打明け立退くといふハ不相濟といふ議も有之候へとも濱町へ引移り之方企望者多數ニ而遂に其方に相決し澤村より詰合一同へは浮説流言に不惑從來之通り相心得居候様もしも幕兵來襲せば小入數にてハ防くへららず各邸内にて覺悟すへしと申含めまた府下の情況を京都へ報告致すべく急便を發せんとて大田黒中島は他へ交渉して親しく實情を詳知せる故實見の次第を參考之爲め言上候様とて兩人に其の御使者を命せられ候さて兩人が龍ノ口御屋敷を出發せしは明治元年一月十三日と記憶いたし京都御屋敷に到着之日は不覺候へとも急行之事ニ而一週間以内に到着せし様ニ有之候

附言大田黒中島御屋敷出發に際し一同に向ひ兩人より陳述せしは目下物騒之折柄長途之道中幕兵之落武者ニも必ず處々にて出會可致其節若し訊問を受け候は、明らかに熊本藩之者に而將軍様江戸御歸城相成候ニ付其注進之爲京都屋敷へ罷越候者と答へ可申其の時若し彼より暴力を加へらるゝことも有之候はんか平常之旅行ならば同行者互に相援助するは當然之理なれとも此度は重要な御用なれば援助せず可成恥を忍ひて壹人ニ而も使命を全うする事に務むへしと相約し出發致すさて箱根山を越えて三島へ出て候處より果して數多の幕兵前後して東歸致候もの共に行逢申候されと

も暴力を加ふる様の事も無之彼等より内府公之消息江戸中之動靜など尋ねらるゝまゝ、夫々懸に答へ候へは却而謝辭を述へて相分れ候位豫想に反し意外之仕合にて途中何の支障もなく京都着之上役々にも申述笑談に成申候

大正十一年四月十九日

中 島 典 五(舊名嘉左衛門)

宇野 東 風 榎

追而老筆ニ而分明いたしかね候分ハ御推覽被下度將又月日等も五十幾年前之事ニ而記憶違ニ而御記録と相違之點も有之候ハ、是又御推覽被下度此段申上添置候也

〔一新録自筆狀〕

〔正月廿日發藩口三宅兩人より通報の秘書〕
同十八日

一太田黒亥和太中島嘉左衛門去ル十三日夜江戸立今晩着邸内府公十二日江戸御着且龍口詰之而々悉皆濱町へ引移覺悟之次第等具ニ申達候事

正月十三日在兵庫本藩探索首藤敬助は徳川慶喜東歸後の情況備前藩士外人殺害の件及び種々の情勢を偵察して在大坂目附役馬場彦左衛門に報告す

〔王政復古帳〕

從兵車一輛呈上仕候時下愈御安泰奉祝候去ル十日夜無事當地に着仕翌十一日當所之模様安田井土州用達等ニ相尋子申候處内府公者全ク去ル七日ニ回洋丸ヲ御東歸ニ相成申候由左候而關東役人者九日十日比迄ニ壹人も不殘外國通辯官當地町役人等ニ至迄皆々遁去り申候依之當地居留之外國人も一日者荷物等悉ク取り片付船ノ、ニ積込申候處猶又近來者右荷物も陸ニ揚ケ候由左候而大砲二十門計り運上所二階ニ備に自然之時者戰爭之覺悟仕居候概然處十一日早晝方筑前

明治元年

土州同道ニ而案内者を頼ミ異人館に罷越候筈ニ而神部迄参り候處其日者備前御末家池田伊勢様并本藩家老日置帶刀通行西宮迄参り候筈ニ而伊勢様者未タ兵庫に御着無之日置之一手神部之町逃レを通候節外國人兩三人通り懸り候而何歟無禮之儀も有之候歟英人一人墨人壹人日置手を打殺し候趣ニ而殊之外混雜仕市中之紛擾不一方老若四方に散亂仕候ニ付進も異館に参り茂出來不申と生田社之後口方廻り一覽仕候處異人夥敷備を立備前勢ヲ追懸ケ其内砲聲も相聞に不容易勢ニ立至り候と相考へ居申候處跡ト達而承り申候得ハ備前之方ニも格別死傷も無之一人歟即死有之候趣然處兵庫港碇泊之蒸氣船筑前久留米宇和島之船丈ケ異人ヲ押し取致し神部港に引付ケ乗組之人も人質同様ニ致し間ニ者筑前之船杯ハ金銀衣類等も奪取候由至而疎暴之仕方ニ而御座候右之主意昨日承り申候へハ彼を見候處ニ而ハ暴殺之相手者分り不申日本人悉ク敵と引受ケ申候間右相手分り申候迄右船も押し置と申事ニ御座候左候而今日右船に乘組之人々ハ悉ク歸し申候尤其内筑前乘組ハ昨夜遁去り申候由

一御國之船者神邊港ニ有之候間一昨夜迄ハ何之心配も無之處昨日異人参りエキセンターキを取り去り申候右之此節之事相分候迄出帆見合セ異候様との事之由ニ而船之運轉出來不申爲ニ右器ヲ預り置候由今日英人ガラバニ出會仕候處進も備前之一條相分り候迄ハ出帆ハ出來申間敷依而自然若殿様御歸國と申歟何ゾ御入用之儀有之候ハ、自身之船を御用ニ立テ可申と至而懇切ニ噂仕候

一昨日長州人當所に出張仕町々頭立候者呼出申達之趣ニハ是迄幕政ニ而ハ彼是荷刻之儀も有之たるよし今度禁裏御領ニ相成候上ハ諸事御仁政之被仰出之儀も有之鎖撫之爲メ出張致し候間何事も安心致し産業相營ミ可申且又今度備前藩外國人と行違之儀も屹斗談判を遂ケ候間必々無懸念様との事ニ而奉書も有之町内處々ニ張紙を以相示し申候左候而當所諸藩之米藏產物藏等幕府者元より松山高松姫路等悉ク封印致し申候其内ニ御國之米も松山と催合之御米藏并御國計り之藏も封印仕候段昨夜安田カ申出候ニ付今日長州所平野祥福寺に上野圓次同道筑前土州も一同参り今般出張之模様且米藏封印等之儀隊長篠原傳一に而會承り合セ申候處出張之儀之從朝廷被仰付鎖撫之爲罷越申候尤人數百人ニ而御座

候薩州も同様被仰付今日當り二百人計出張之筈と申事ニ御座候米藏等封印之儀ハ關東方者分取之譯を以取上ケ候筈然處御國之藏者全ク出役之者カ間違候歟又者町役人申出之儀間違ニ而歟何様對御藩決而左様之儀致ス筈ニ無之精々取調へ可申付との事ニ御座候尤催合之藏ハ無據儀も可有之何様分取之米者一所ニ寄セ候筈ニ而其節如何様とも御相談可仕との事ニ御座候

一右同人嘴ニ從朝廷追討之命有之候藩々ハ松山高松姫路丈ニ而御座候尤討手之儀ハ最寄之藩々ニ可被仰付未タ其儀ハ分り不申と申聞候事

一昨日町役人ヲ薩藩カ呼出申達之趣ニハ東久世様異人應接并當所御鎖撫之爲昨十三日藝藩蒸氣船カ當地に御出張ニ相成申候尤薩土御警衛として出張ニ相成候間旅宿其外世話致し置候様申付候事

一長人嘴ニ明日者薩長共一同異人に應接致し候筈と申事ニ御座候

一今日午後筑前土州一同英船に罷越ガラバと申者ニ而會見込ミ相尋子申候處今度京攝之戰爭ハ徳川氏カ手を出し候ニ付關東惡しと申居候左候而此後之儀相尋子申候處連も内府公者有名之御方ニ而朝廷を押し立テ徳川家も諸侯之列ニ下り共和政治ニ赴キ不申而ハ決而不相濟今日從朝廷之新政速ニ御施し無之而ハ徳川家を押し立テ必ス外國中も申合セ戰爭相始メ可申一刻も新政御取起し有之度と申居候併今度東久世様御下向ニ候へハ必ス御新政之儀御布告ニも可相成歟此儀ハ重疊難有仕合と申居候其外色々嘴も仕候へ共何様取留候儀者無之明日公卿方御談判之上ニ申事ニ而相別レ申候右ニ付段々逗留も長ク相成候へ共右御談判相分り候迄相滞り申候覺悟ニ御座候今夕ハ便ニ差懸り草亂之呈書御宥恕可被成下候以上

正月十三日夜

首 藤 敬 助

馬場 彦 右 衛 門 様

正月十三日備前藩士の兵庫に於ける外人砲撃の件に關して外國掛東久世通禧等談判の爲め神戸

明治元年

八四七

出張す

〔一新録自筆狀〕

（正月廿日發船口三宅兩人より通報の稟書一節）
正月十四日

一前條之趣（備前藩士外人殺害に關して彼より神戸）昨日參與御役所ニも相聞爲御取扱東久世様宇和島老侯御下港土ノ後藤象次郎も同様ニ付諸事右之御方に相伺取計候様申含十右衛門（方）之差返候事

正月十三日舊幕長崎奉行河津祐邦上國の變を聞き恐れて書を各國領事に與へ救援を請ふ

〔三條實美公年譜〕

正月十三日長崎奉行河津祐邦上國ノ變ヲ聞キ襲撃ニ逢ハンコヲ恐レ書ヲ各國岡士ニ與テ救援ヲ請フ其文ニ曰
以書翰申入候然者我國中一二兇暴之諸侯日本政府ヲ襲撃ニ及候段者定而承知之儀ニ可有之隨而賊徒等於此地粗暴之舉動可致哉之風聞モ有之付而者夫カ爲メ自然兩國人民之所持品危險ニ掛リ候モ難計然ニ此地之義者從來商賣之港ニシテ防禦モ手薄之義ニ付自然非常之儀モ有之節ハ救援之儀頼入度此段及頼談候速ニ回答有之度存候謹言

各國岡士宛

河津伊豆守

字岡岡士ハ復書シテ平和ヲ守リ在留外國人ノ監理ニ盡カスヘキヲ言ヒ合衆國副士ハ公使ノ命令ヲ得サレハ在留人ヲ保護スルノ權ナキヲ答フ

正月十四日明十五日天皇元服の大禮を行はせ給ふに就きて諸侯參賀の式を宣布し給ふ

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

（正月廿日有吉井上河口寄地津田村上松本より二月二日着の内）
一當月十五日 主上就御元服同十六日諸家様御參賀御獻上物之儀付而參與御役所より之御達書寫一通差上申候

正月十四日參與御役所より御達書

獻上可有之候事

但准后御方者獻上物ニ不及參賀者可有之事

正月十四日

參與

役所

就
御元服
禁中に

太刀

壹腰

馬

壹疋

代

公卿ハ

銀三枚

殿上人

銀二枚

右來十六日參賀

追而廻達之後御返却可有之候也

正月十四日朝廷徳川慶喜を追討せらるゝに就きて官軍を擁護すへしとの旨奥羽各藩に命令せらる

〔王政復古帳〕

慶應四年正月十四日津田山三郎朝廷ヲ持歸之書付寫

明治元年

奥羽大小名不殘

八四九

就徳川慶喜叛逆爲追討近日官軍自東海東山北陸三道可令進發之旨被仰出候附而者奥羽之諸藩宜知尊王之大義相共謀援六師征討之勢旨御沙汰候事

正月

追而大小藩可有登京旨前日被仰下候得共右應援戮力之向者不及其儀各在國蓄兵力備糧食可專軍國之務候也

正月十四日參與役所を西殿町九條家へ移轉せらる

〔一新録皇令〕

一乘院里坊を以役所ニ被假用候處明十四日より西殿町九條家裏方に相移候間惣而是迄通取扱候事右之通可相達旨參與衆被申渡候仍申入候也

正月十三日

參與

役所

細川 越中守 殿

家來中 (加州以下八藩連名也)

〔一新録白筆狀〕

(正月廿日發溝口三宅兩人より通報の抄書一節) 同十四日

一今日より參與御役所九條殿裏手へ引移之事

但本文御役所之大政官之小形之様成ルものゝ由也

正月十四日我藩京都千本通元桑名藩邸跡貸與願許可せらる

〔王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

元桑名拜借屋敷

一長家

六棟

一壹ヶ所

土藏

右依頼其藩に被借下候事 慶應四年正月十四日也

正月

覺

千本通下立賣下ル元桑名拜借屋敷

一長家

六棟

一壹ヶ所

土藏

坪數壹萬六千貳百拾七坪

右者近日中國許方人數參着仕候管之處壬生陣屋内に納

兼候付右之ヶ所拜借被仰付被下候様奉願候以上 (京都

並江戸返達御用狀扣には正月十四日に此狀據

出の處即夕被借下との御差圖ありたりと見ゆ)

正月

細川越中守内

津田山三郎

正月十四日我藩備頭郡夷則に京都守衛の任を命ず

〔京都江戸狀扣〕

以別紙申達候夷則方組共京師變動ニ付爲御守衛出京被 仰付旨一昨十四日 御直ニ被 仰渡候此段爲可申達如是御座候以上

正月十六日

惣

連

名

溝口 孤雲 殿

三宅 藤右衛門 殿

右之外下張并諸御達物御請書等申向之稜々有之候へとも此節之相止候事

明治元年

正月十四日在阪我藩目附役馬場彦左衛門七日以後の大阪の情況を藩政府に報告す

〔形勢之部一括〕

此程相違候後江戸勢追々敗軍之方ニ有之候處其末左之通

- 一 七日曉内府公御退城之由ニ而江戸方軍勢高松會津桑名松山大垣姫路等不殘引拂申候内府公之紀州に御聞とも申兵庫より御軍艦ニ御乗移とも申或ハ佛船に被爲召候杯とも申一定致し不申候會桑垣も同様引先相分り不申候得共多分ハ紀州之方に引取候様ニ相見申候高松松山姫路之各自藩に引取候様子ニ候
- 一 同日大坂地着之幕吏與力同心等ニ至迄聊宛之金子被下不殘御暇出候由ニ而候勿論御城代初町奉行御代官等之衆ハ何方に引掃ニ而候哉壹人も残り無之候尤御城内ニハ少々計り残り居候由ニ候
- 一 九日朝自燒他放ハ相分り不申候得とも五ツ時分御城俄ニ燃上り其時分長人五六百人御城邊まで參り居城入致し候分も有之其外之京橋邊嚴重ニ固メ居候由ニ而候
- 一 同日長人之内岩國人數中之鳥舊邸に入込申候
- 一 十月朝五ツ時分御城方角ニ當り夥敷響致し黒煙り立上り申候昨朝以來之火勢昨晚頃より漸々重り候模様ニ有之候處右之一發ニ而尙又盛ニ相成申候何様鹽硝圍所ニ火移り申候物と相見申候
- 一 八日江戸方引拂後ハ敵としてハ無之候得共九日之日までハ薩人牧方邊ニ宿陣半時計間を置大炮一發ツ、致し居候由右人數之内ニ候哉十日之日ニ至段々着坂高松姫路邸杯ニ入込候由ニ候尤右之屋敷ニハ藩士不殘引拂空邸ニ相成居候趣ニ候
- 一 十一日御城之火昨夜以來今朝までも燃通し御城ハ大半燒失之由ニ而候夕刻鎮火相成申候昨夜今朝兩度別番之通り町觸有之市中人氣も次第ニ穩ニ相成申候

右之段相違候以上

正月十一日

下ニ付札

本番ハ七日ハ十一日迄之大略を得御意候是迄之町觸ハ古閑宮次通坂ニ差出候間其後之觸貳通入御披見候事

正月十四日

大坂御留守居方

馬場

町觸

市中に賊徒武器金銀錢手寄を以預置候數又之賊徒より格護方申付隱置候者も有之候ハ、可差出若脇方於致露顯重洞候早間々三郷町中に可相違候事

但右品之外家財雜物類之其町限り取扱勝手ニ可取斗候

正月十三日

薩州 三郷惣年寄(宛名也)

長州正月十二日町觸寫

町觸

此度 御所を仰出されの廉も有之候處徳川慶喜軍勢をもつて押而入京致し候付深 震懼をなやませられ征討將軍差立られ諸藩官軍之せ向ひ追討のいくさにおよめ次第ニ付 上ハ御さうろをなすんし奉り下之安堵し家業相勤め身分相應の御奉公を遂げ御國恩ニむくい奉るべきもの也 戊辰 正月 長州

但賊徒輩市中ニ潛伏罷在候得ハ早々陣所迄可届出候萬一匿置候者有之ニおゐてハ屹度嚴罪可申付事

卯正月十二日出ル

鹽清方達

正月十四日花山院家理の與黨顯皇前國四日市を襲ひ尋て馬城峯に據り檄を發し勤王の士を募る

〔一新録自筆狀〕

明治元年

八五三

去ル十四日浮浪之徒と相見凡三百人程船より豊前四日市に上陸同所陣屋並御坊庄屋宅へ拘發いたし不殘燒拂候由ヲモト山に楯籠同所より之書翰杵築へ着いたし候由御家司より爲知之書札外に寫之書翰貳通則相達申候以上

正月十八日

大河原次郎九郎

御奉行衆中

一筆致啓上候然ハ去ル十四日夜浮浪之徒と相見凡三百人位船より豊前四日市に上陸いたし同所御陣屋并御坊庄屋之宅に炮發致し不殘燒拂武器其外之品々奪取候而ヲモト山に楯籠居候趣立石より去ル十五日夜爲知申來候後猶十六日夜又候左之通書翰同所へ到來之由送り來候ニ付此段不取敢爲御知申候右は定め而日出府内其外御隣端茂同様之儀と被存候先不取敢此段爲御知申候御方に之御模様は如何之事ニ候哉御聞込御見込等之儀被仰聞被下度奉報上候恐惶謹言

正月十七日

坂西武兵衛
中根源右衛門
加藤孫太夫

大河原次郎九郎様

今般幕府以詐術奉歸政權却而籠于坂城動于戈逼于京師去三日於鳥羽伏見交鋒官軍雖得勝利實ニ朝廷之危急存亡候依而我花山院正三位前左中將殿西州之官軍爲御召募先馬城峰被爲置御本陣之間勤王之諸有志連御出張可有之候謹檄

馬城岸
會議所

右一通諸有志衆中

今般幕府以詐術奉歸政權却而動于戈逼朝廷大逆無道不過之候於是花山院正三位前左中將殿西州之官軍爲召募被遊御下向馬城峰被爲定御本陣之間勤王之事業被留御心候ハ、御應援被下度存候追々以使者可致應接候得共御舉動有之候而者

氣之毒候間先以書中申達候恐惶謹言

正月十五日

花山院殿御内

小山田帶 刀判
高來左 門判
清原靜 磨判
藤林六 郎判
兒島備 後判

松平中務太夫殿

御執事

〔一新録探索報告〕

四日市亂妨ニ付倉藩小笠原織衛列方差越候探索書寫

長州報國隊之由赤木綿地ニ白ニ而義ノ字を書候印を相建銘々小銃所持豊前住ノ江ニ申處カ上陸候哉同所へ蒸氣壹艘滯船有之初之人數凡三百人程上陸追々分散百人余一昨十四日夜九ツ時四日市御陣屋へ向罷越内三十人程同所店屋へ火矢を打込其儘亂入分捕等いたし夫より東本願寺に久留米人數五十人程屯集之處右場所も同斷裏手カ火矢打込押懸候處久留米勢之不殘逃去右跡ニ而野戰炮四挺小銃數々玉藥等分捕寺之本尊をも不暇出及燒失候由夫カ分捕之器械四日市人足手當猶道案内として農兵兩人ホと生捕宇佐宮之様運送いたし八幡宮へ參詣之由ニ而宇佐へ到着其刻之最早昨十五日既白之頃ニ而早速同所町家之徳人に焚出等手當申付參詣濟之上宇佐カ壹里餘御本山へ人數引上屯集罷在候旨築城郡推田村助藏ニ申者宇佐宮へ致參詣居見聞之次第注進申出候尤引取之刻燒失跡篤見分之處御陣屋中間之由ニ而壹人門前へ

明治元年

即死怪我人之外ニ無之山中出候付此段不取敢御届申上候以上

正月十六日

倉藩也 御 郡 方

正月十四日舊幕長崎奉行河津祐邦再ひ書を各國領事に與へ後事を肥前筑前兩藩に託せし旨を告
け其夜外國船に投して遁走す船手役頭取白木保三等之を追及して其携帶せる官金を奪還す

〔三條實美公年譜〕

十四日(正) 祐邦再ヒ書ヲ各國岡士ニ與へ後事ヲ肥筑兩藩ニ託セル旨ヲ告ク

以書翰申入候然者當今國內之形勢ニ付追々人心致動搖候間土地騷擾爲無之右様之節者肥筑兩家之内へ土地相預ケ一ト
先在勤之者引上候様可致旨兼而命令モ有之候間諸事右指圖ニ隨度歸府就而者已來貴國民談判之義ハ當番年ニ付筑前家
ニ於テ差向條約之通取行且是迄取扱候在任支配向通辭等ハ其儘ニ相殘シ置候此段申進候謹言
慶應四年
辰正月十四日

河津 伊豆 守 花押

各 國 岡 上 宛

是夜祐邦署内ノ官金ヲ携へ外國船ニ乗シテ逃走ス船手役頭取白木保三等五名之ニ追及シ右金ハ市民撫育ノ爲ニ備フル
者ナルヲ以テ擅ニ之ヲ携へ去ルトキハ人心激昂シ必追撃ノ禍ニ逢フヘキヲ告ケ其返還ヲ求ム祐邦乃チ其一萬四千百兩
ヲ還ス保三等之ヲ西役所ニ出ス時ニ土州藩士佐々木三四郎適是地ニアリ署内空虛ナルヲ聞キ同藩人ヲ率キ往テ之ヲ衛
ル薩藩士繼テ至ル是ニ於テ兩藩相議シ在留ノ諸藩士ヲ召シ權ニ市民ヲ鎮撫シ以テ 朝廷ノ命ヲ待タンコトヲ謀ル

〔形勢雜記壹〕

(正月十九日附天草柄本組大庄屋小崎清より郡浦三郎八等宛通知狀の一節)

當月十四日長崎表御奉行始諸役々都而蒸氣船貳艘より御引歸ニ相成右空營ニ之土州勢之由相詰居候趣右者士勢より被
襲取御奉行始引拂候哉之風聞有之候へ共治定之儀之及承不申候

(右同斷小崎清通知狀に添附せる同日附別紙の一節)

長崎表も大變之由ニ而土州長州薩州之浪士共三百五十拾か押寄候由ニ而御奉行様ニも行衛不知御落ニ相成候最早御奉行
所ハ土州領之段建机等いたし候趣

正月十五日天皇元服の大禮を行はせ給ふ此日大赦令を發せしめらる

〔一新録自筆狀、王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

戊辰正月十七日 御所御仮建に御呼出ニ而御渡ニ相成候御書付寫(口書は一新録自筆狀に據る)

今般 朝政御一新之御場合今十五日 御元服之御大禮被爲行御仁恤之 聖慮を以天下無罪之域ニ被遊度候間是迄右罪
不可容者ト雖 朝敵を除之外一切大赦被仰出候於國々も不漏様施行可有之候尤向後彌以賞罰嚴明ニ被遊候ニ付厚
御趣意を體認シ行届候様可仕旨 御沙汰候事

正月十五日

正月十五日先に勅勘を蒙りし左大臣九條道孝等公卿十九名參朝を免せらる

〔王政復古帳〕

九 條 左 大 臣
大 炊 御 門 右 大 臣
一 條 前 右 大 臣

一時被止參 朝可被及 御沙汰筋茂有之候處大政御一新且御元服大禮被爲行候旁自今出仕可有之被 仰出候事
但日野葉室等辭官并本番所小番御免列之儀申達候事

頃年來逆賊慶喜并奸吏會桑等之中請ニ隨失 朝威件々不少屹度御糺明茂可被 仰付候得共此度大政御一新且御元服大禮被爲行候旁格別之以思食被宥恕參 朝被免候事
内六條中納言辭官本番所小番御免列申達候事

近衛 前左大臣
近衛 新前左大臣
鷹司 前右大臣
德大寺 前右大臣
六條 中納言
飛鳥 井大納言
廣橋 大納言
野宮 中納言
久世 前宰相 中將

頃年來賊慶喜并奸吏等企望ニ任セ萬端行横道茂 朝憲營私利候件々不容易次第嚴重可被仰付之處大政御一新折柄今般御元服大禮被爲行候旁格別厚御憐愍ヲ以自今參 朝被免候事

但辭官并本番所小番御免列之儀申達候事

柳原 大納言

頃年來賊慶喜并奸吏之處分ニ隨ヒ朝議を誤り候件々者勿論或者正議を唱へ變味タル心底全營私利候所業其罪不輕屹度嚴重ニ可被 仰付之處大政御一新今度御元服大禮被行候折柄格別厚御憐愍ヲ以自今參 朝被免候事
但辭官本番所小番御免列之儀申達候事

豐岡 大藏卿

始終趨走于權門以私心破公議且利欲之心不少彼是御不審之筋も有之旁屹度御糺明可有之處大政御一新且今度御元服大禮被爲行候折柄格別厚御憐愍ヲ以自今參 朝被免候事
但辭官本番所參勤之事

伏原 三位
裏辻 中將

員外之身トシテ漫リニ要路ニ交通シ大臣ヲ愚弄シ私利ヲ恣ニ爲ノ條其罪不輕屹度可被所極刑之處大政御一新且今度御元服大禮被爲行候折柄格別厚御憐愍ヲ以自今參 朝被免候事
但伏原三位本番所參勤裏辻中將辭官之事

〔一新録自筆狀〕

〔正月廿日發講口三宅兩人より通報の稜書〕
同十七日

一九條左大臣已下十九卿參 朝被免候事

〔坂本彦兵衛記錄〕

明治元年

正月十七日

一頃年御答ヲ蒙られ候九條左大臣以下十九卿參 朝被免候 是も十五日之由

正月十五日外國條約締結に關し上下一致奮勵戮力國威を發揚すへき旨碎勵せらる

〔一新録白筆狀、一新録皇令、王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

戊辰正月十七日

御所御仮建に御呼出御渡御書附寫 (口書は一新録白筆狀に據る)

各外國之儀者 先帝多年之 宸憂ニ被爲在候處幕府從來之失錯ニヨリ因循今日ニ至り候折柄世態大ニ一變シ大勢誠ニ不
被爲得已此度 朝議之上斷然和親條約被爲取結候就而ハ上下一致疑惑ヲ不生大ニ兵備ヲ充實シ國威ヲ海外萬國ニ光耀
セシメ 祖宗 先帝之神靈ニ對答被遊 微慮ニ候間天下列藩士民ニ至ル迄此旨ヲ奉誠心力ヲ盡シ勉勵可有之候事
但此迄於幕府取結條約之中弊害有之件々ハ利害得失公議之上御改革可被爲在候猶外國交際之儀者宇内之公法ヲ以
取扱可有之候間此段相心可申事

〔坂本彦兵衛記録〕

正月十七日

一外國條約之儀御布告 是も十五日之由

正月十五日外國掛東久世通禧神戸に於て各國公使と會見し王政維新の旨を通告して國書を交附
し且つ備前藩士外人砲撃事件の談判に及ぶ

〔防長回天史〕

(明治元年春期ノ大勢及ヒ毛利氏抄略)

此月十五日外國修交ノ朝旨ヲ國內ニ布告シ且ツ東久世通禧聊ヲシテ神戸ニ於テ王政復古ヲ布告スル國書ヲ外國公使ニ
交付セシム

(修交の朝旨)

外國之儀ハ 先帝多年 宸憂ニ被爲在候處云々 (前條攝殿の
旨と同文)

(國書)

日本國天皇告諸外國帝王及其臣人將者將軍德川慶喜請歸政權也制允之内外政事親裁之乃日從前條約雖大君名稱自今而
後當換以天皇稱而諸國交接之職專命有司各國公使諄知斯旨

慶應四年正月十日

御名 御禮

十五日ニ至リ東久世神戸ニ於テ六國公使ニ接シ王政維新ヲ公告シ國書ヲ交附シ備藩人發砲ノ事ハ公法ニ照シテ之ヲ處
罰スヘキコトヲ約シ神戸警衛ハ長薩既ニ其命ヲ受ケタル事ヲ告ケ自餘ノ開港開市場亦叛徒ノ手中ニ在リテ目前奈何ト
モスヘカラサルモノノ外ハ朝廷其警衛ノ責ヲ負フヘク隨テ長崎ニモ亦急ニ朝官ヲ派出スヘキ事ヲ告ケ外國公使等乃チ
其意ヲ諒シ神戸ノ占領ヲ緩メ諸藩船艦ノ拘留ヲ解ク此席ニ列シタルハ岩下佐次右衛門伊藤俊助寺島陶藏吉井幸輔片野
十郎陸奥陽之助ナリ 二月九日兵庫水福寺ニ於テ備前兵隊長 而シテ又同日京都ニ於テ外國修交ノ朝旨ヲ内外ニ公布セシナ
リ是ニ於テ乎外交方針全ク定マル

〔王政復古帳、一新録皇令〕

慶應四戊辰正月於神戸運上所 勅使東久世前少將殿在留六ヶ國公使と御應接之書取

勅使曰今日 天皇より各國に布告之爲參リタリ右御演舌有テ御布告ヲ各國公使等に渡サル

明治元年

八六一

佛ノ公使曰拙者日本ニ在留スルコト尤久年ナルヲ以テ各國之公使ニ代應接センコトヲ願フ乃曰自今 天皇御國政ヲ執リ御全國治平ニ及ハ、各國共ニ所祝ナリ

勅使曰 天皇自ラ國政ヲ裁スルニ於テ固ヨリ全國信服スルコト論ナキナリ
各國公使曰 天皇親ラ政權ヲ執ルヲ以テ御政令既ニ國ニ及ヒシヤ亦有司ニ命シ外國事務ヲ司ラシム何人カ其任ヲ得タルヤ

勅使曰仁和寺宮事務總裁ヲ蒙リ其餘京師ニ於テモ其任ヲ蒙ル者アリ且政令ノコトハ徳川慶喜反逆候次第アツテ未タ政令ヲ布クニ至ラサレ共不日ニ追討平治セン

此間ニ外國事務懸リ公卿諸侯ノ姓名ヲ達ス

公使曰御布告之文ニ徳川氏政權ヲ返ス云々ト云然ルニ今 勅使ノ言ニ曰徳川慶喜反逆云々然ルニ今日内亂ナルヤ

勅使曰慶喜江戸ニ歸リ罪ヲ待ツト云フ然ルニ未タ其服從之狀ヲ見ス

公使曰徳川慶喜江戸ニ在リ罪ヲ待ツト云フ然ルニ猶征討セラル、ヤ

勅使曰今現ニ使節ヲ江戸ニ遣ス而ルニ未タ其返答ヲ得ス

公使曰今日指當リ此地ニ一事件アリ其譯ハ先日備前侯ノ家臣途中云々ノコトアリ故ニ不得止各國兵士ヲ出シ警衛シテ安全ヲ圖ル此ハ惣轄ノ規則ニモナケレトモ止ヲ得サルコトナレハ此所置ハ如何ナルヤ

勅使曰以後日本政府ヨリ此地ノ警衛スヘシ

公使曰政府ヨリ御警衛アレハ如何様ノ事件起リテモ政府引受ラル、ヤ

勅使曰固ヨリ然リ又曰今日布告 勅書ハ直ニ本國帝王人民ニ布告セラル、ヤ

公使曰唯今御尋ノ一條ハ追而貴答可致ナレド前々ニ云フ備前ノコトハ猥リニ外國人ニ亂妨云々以後 天皇御親政ノコトナレハ必ス政府ニ於テ御處置ニナルヤ

勅使曰固リ然リ

公使曰備前亂妨之事ニ及候ハ談スルモ怒リニ堪サル次第ナリ況ヤ各國公使ニ對シ煥發ノ事情等全ク文明ノ邦ニ不可有コトナリ

勅使曰此處置ハ各國之公論ニ任シ且 天皇之親裁ヲ受クヘシ

公使曰備前亂妨之所業ハ下賤ノ者ノ作業ニ非ス乃チ大諸侯ノ大臣自ラスルコトナレハ今日外國守衛之兵ヲ解ク以後日本政府守衛ヲ得レハ決シテ右様之亂妨有マシキヤ

勅使曰今日當所ノ警衛ノ事ヲ薩長兩國ニ命ス以後右様之儀決シテ有ヘカラス

此間ニ薩長ヘ命セラレタル御書付各國公使ヘ見セラレ

公使曰然者自後如何様之事出來スル共 天皇政府ニ於テ御引受ナルヤ

勅使曰然リ

公使曰此六人ハ六ヶ國ノ公使ナレハ貴國ト和親交易センコト幸甚ナレ共自後若御違約アラハ大ニ貴國ノ大事ニ及ハ

是等モ不日ニ 天皇ノ政府ニ飯スル様ナルヘシ

公使曰固ヨリ當今 天皇御政令ノ行ハル、土地ニ就テ云フ也又曰今日薩長侯ヲ當處ノ警衛ニ命セラレタルコトヲ市中村々に觸ラレタシ且備前亂妨ノ事ハ各國ノ公論ヲ受ケ 天皇ノ親答アルヘキノ仰ナレハ只今直ニ口舌ヲ以論シ演難シ近日ノ内熟考之上書取を以申上ヘシ

勅使曰諾又曰以後薩長兩藩ヲ以當地ヲ警衛スレハ外國人ノ安全ハ勿論ノコトナレハ願ハクハ當地在留ノ外國人ヨリモ日本人ニ對シ亂妨ナキヨウ各ヨリ達セラレタシ

公使皆曰早速相達スヘシ

勅使曰近日日本諸侯ノ蒸氣船六艘ヲ外國ヘ取押ヘラレタルハ如何之所置ナルヤ

公使曰先日備前亂妨ノ嗣リハ未タ政府ノ布告モナキ間ナレハ先右ノ船ヲ引留メ置タリ併今日萬事政府ニ御引受ト成レハ早速夫々に返却スヘシ又曰東久世卿ニハ兩三日當地ニ在留サル事ヲ願フ其譯ハ各國人心ヲ安心セシメンカ爲メナリ

勅使曰諸猶此地全權ノ者交代スル迄滞留スヘシ

公使曰先日ヨリ公使商人大坂ニ滞留スル處彼ノ地ノ變ニヨリテ此地ニ來ル然ルニ當所ニハ在留ノ家モ無ク候故速ニ歸坂センコトヲ願フ猶再ヒ御案内ヲ待ヘキヤ

勅使曰彼地モ未タ混雜相止マサル中ノコトナレハ追而此方ヨリ案内スヘシ

公使曰先刻ノ御談判ノ政令未タ行レサル諸港トハ何等ノ土地ナルヤ

勅使曰橫濱長崎箱館ノ三港ナリ尤長崎ハ速ニ處置スヘシ橫濱ハ何時ヨリ支配スルヲ言ヒカタシ

公使曰長崎ハ近日ヨリ御處置ニ成候ナレハ彼地ニ住スル外國人ニ怪我等ナキ様共 朝宮ヘ命セラレタシ

勅使曰諾

公使曰今日ノ御應接ニヨリテ各國公使共大ニ安心致シ幸甚ナリ

勅使曰彼布告ノ 勅書ハ直ニ本國ニ送ラル、ヤ

公使曰諸速ニ達スヘシ

勅使曰今月應接スル處ハ先前條ノ如シ猶貴方ヨリ談判ノ事アラハ承ルヘシ

公使曰先別條申上コトナシ

勅使曰今日各國使ニ而會イタシ甚満足ニ存猶委細連ニ 天皇ニ奏聞スヘシ

右ニテヲハル

右二月五日手ニ入ル

今 村 平 助
坂 本 丈 助

〔形勢之部一括〕

辰正月十一日神戸居留之外國人備前藩行列を切討果候一條等之聞方

兵庫表聞取書 (正月十一日の續き)

一十四日東久世様外夷御應接之爲御下向薩長土御附添罷下り翌十五日御應接ニ相成候ニ付其夜薩州岩下佐治右衛門に面會御都合相尋子申候處今度各國に御應接之儀ハ萬端一日被發候筈ニ而御認ニ相成候 主上御名前ニ而王政御一新ニ付而ハ外國御交際も從 朝廷御直ニ被遊候との御主意御布告ニ相成申候處各國も無異議御請申上候趣隨而備前之一條ハ從 朝廷被取計候間安堵致し諸國之船且陸路之通行杯夫々相開候様御談判ニ相成候處此儀も直ニ御請申上即夜諸國之船も返し申候尤金銀衣類等奪取候儀ハハまたごふとも處置付キ不申候今度備前之一條ニ付而ハ異人も殊之外憤激仕居浪人跡之仕業とも違ヒ備前家老之中之事ニ候ハハ何歟深意も可有之歟甚タ以不安心之譯ニ付御處置之儀ハ各國申合セ書取を以可申上との事ニ而如何之御難題申出候哉も難計勢ニ御座候

一各國異人も近々大坂ニ御呼寄 朝廷ニも被召登候筈ニ被相決候段岩下方噂仕候事

一英人ガラバニ面會東久世様御談判之次第且一跡之議論承り合セ申候處今度 朝廷御一途之御布告ハ各國ニ而も大ニ安心之趣ニ御座候併京都も金子拂底薩長土も金子ふしニ而ハ新政組立も甚タ六ヶ數可有之と答關東追討之儀相尋子申候處此儀ハ重疊不宜事ニ而候其譯之當徳川公非常之人材ニ而有之候左様ニ人才を殺スト申ハ公法ニ於て決而有問數キ事是非征伐ト申ニ至り候ハ、各國申合セ先ツ薩長に談判を遂ケ不聞入時ハ 朝廷ニも願立是非ノ御止メ申候覺悟右ハ自身一存ニ而無之佛蘭西ミニストルを始め諸藩之公論ニ而御座候又問自然右様願立候而も矢張追討ニ相成候節ハ各國ニ而ハ如何致し候哉何方ニ歟援兵ニ而も差出候哉彼答其儀ハ決而不致世界之公法ニ而外國之内亂を助クル譯ハ無之故

何方ニも援兵ハ不差出唯々嘆息仕迄ニ御座候併關東も容易ニ追討ハ出來申間敷有兵器有臺場有金銀有人成功も無覺束と云又問右願立之儀ハ近日取懸り候哉彼答差寄今度岩下杯ニも談長土ニも談判仕各國カラ之有らん限り相働キ候と云右ニ付溝口孤雲殿ニも紙面を遣し候事

一兵庫表取締之儀ニ付薩州二百人計長州百人計出張關東方之諸藩之米產物藏等盡ク封印致し間ニハ町人買入之品迄も取揚ケ候由ニ而町人一統不服之由ニ御座候左候而右分捕ニ付而ハ薩長互ニ先を爭候模様ニ而何レ不違摺り合相始り可申と何レも見込ミ申候

御國之藏ニも封印致し候ニ付長藩薩原傳一ニ懸合申候處不怪當惑之模様ニ而對御國決而左様之儀致ス譯ニ而無之全ク出先之役人心得違ニ而有之候ト達而斷ニ及申候

一英人ガラバ嘶ニ薩長土とも英國ニハ餘計之借金有之候趣金子ふしニ而新政組立出來不申等之事ハ此邊方見拔キ候ものと相考申候

一東久世様ハ近々大坂に御引取ニ相成跡ニハ字和鳥老侯御出張ニ相成候由右之通御座候以上

正月十九日

首 藤 敬 助

正月十五日徳川慶勝藩臣の大義を誤らんとする者あるを憂ひ官に請ひて歸國の途に就く

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

尾 張 大 納 言 様

右者依御願一先御歸國として今十五日御當地御發途相成申候

京 極 佐 渡 守 様

右者昨年依召江戸表々今十五日御上京相成申候
右之段相達申候以上

正月十五日

御 留 守 居 中

〔一新録自筆狀〕

〔正月廿日附溝口孤雲三宅藩右衛門より家老中老宛書翰に添付せる積書の一節〕
同十五日

一尾州御附家老竹腰山城守兼而御咎を蒙り居候由此一派沸湯々たし老公御處置難相濟譬御歸國ニ相成候とも御國境ニ之入を不申杯と懸立候趣孤雲越邸ニ而承り候事

一尾老公一ト先爲御歸國今日御發京之事

正月十五日長崎運上所に於て各藩士會議し舊幕奉行河津祐邦逃走等の事を京都に報告し且つ各國領事に來會を求め善後策を講せむとす領事等答書を贈り其會同する國主の氏名及び協議事件を問ひ且つ書を肥前筑前兩藩士に與へ將來港務を執るもの、氏名を問ふ

〔三條實美公年譜〕

十五日(正)衆議土藩士菅野覺兵衛ヲ遣シ汽船ニ乗シ京師ニ至リ事狀ヲ報セシメ又譯官堀傳三郎ヲ遣シ各國岡士ニ告ケ其來會ヲ求メシム各國岡士答書ヲ贈ル丁左ノ如シ

長崎運上所長

明日運上所ニ而各國岡士集會可致義盟文有之右御答申上候ハ拙者共面會イタシ候國主御姓名并集會之事柄最前承知イタシ度候

明治 元年

八六七

千八百六十八年二月八日 日本ノ正月十五日

葡	蘭	米	字	白	和	佛	丁
國	蘭	全	全	全	全	全	全
士	全	マ	リ	セ	エ	全	ハ
セ	マ	ル	チ	ア	フ	リ	ン
ー	ル	キ	ヤ	テ	ベ	キ	ン
ロ	キ	ユ	ル	リ	ー	キ	キ
ー	ス	ス	ト	リ	ン	キ	フ
レ	ブ	ブ	リ	ヤ	ブ	フ	
イ	ロ	ウ	ン	ン	リ		
ロ	ウ	ル	ト	ン	ン		

各國國士ハ又書ヲ肥筑兩藩ニ贈リ今後港務ヲ執ル者ノ氏名ヲ問フ曰ク

政府ノ命令ニ依テ長崎奉行退帆後市中警衛向兩所へ相渡候儀長崎滞在之條約濟各國コンシユルへ正月十四日付長崎奉行ヨリノ書翰落手セリ隨而何方ニテ公之事務取扱ニ相成候哉我等へ告知アラン事ヲ希フ

正月十五我藩願に依り元桑名藩邸の交附を受く其内部破損甚しきを以て翌日其旨を官に申告す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

千本通下立賣ル元桑名拜借屋敷越中守に拜借被仰付候付坪數壹萬六千貳百拾七坪長屋六棟土藏壹ヶ所昨十五日中井主水より受取相濟申候尤土藏長屋向等戸締り床板鐵窓等ニ至迄取除且長屋向ハ戸障子二階梯子等茂相見不申候付同人に承合候處右は何もの之仕業敷不相分去十三日大勢罷越土藏鏡前捻切内ニ入有之品々を初右之諸道具等ニ至迄悉奪取逃去候段申聞候此段も御届仕候以上

正月十六日

細川越中守内
青地源右衛門

正月十六日我藩政府は大坂落城慶喜退去の情報を得嘗て幕命に依りて管守若くは警備せし地域の處分に關し更に朝旨を仰くべく在京重臣に通牒す

〔一新録自筆狀〕

別紙を以申達候長崎へ被差越置候木村弦雄儀昨朝致歸藩大阪落城内府公ニ之英國之汽船ニ御乗込被成御立退候由報告之次第別紙之通ニ御座候然處豊後御預所之兼而夫々之御人數被指置日田天草茂頃來窪田治部右衛門殿より懸合之趣ニ因而御物頭以下被指越置候事ニ候處右之報告勿論虚實之分兼候得共此體面ニテハ先於徳川家は罪を 朝廷ニ被得候形ニ相見其料地行懸之儀とハ乍申其儘守衛之御人數等被差越置候而之對 天朝難相濟若又彌罪を被得候譯ニ候へは右之料所之 朝廷ニ可致歸入事ニ付守衛之御人數被差置鎮靜撫恤可被仰付儀勿論ニ候へ共夫すら新ニ命を被爲蒙度彼是此節之報知計ニテ之御處置難相成候間於其御許早々御伺取御模様至急ニ被仰越候様存候以上 (別紙略す)

溝口 孤雲殿
三宅 藤右衛門殿

中 老 總連名
家 老

正月十六日日本藩政府は藩主慶順の旨を承けて書を在京重臣に發し藩議勤王一途に決定し如何なる變故に遭遇すとも確乎不拔の大義を貫徹せしむべき決意たる事を垂示す

〔自筆狀 並 稜書〕

慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄
以急飛申達候京師之時體益切迫付而之差入御盡力正議之筋ニも相運可申哉之趣ニ相聞申候處京攝之間大變動ニ相成其

明治元年

末浪華落城徳川公も英艦御乗組ニ而御發船大阪兵庫港共長土之人數ニ而相堅候由未確證は無之候へ共長崎より急報之趣被是驚愕之至ニ候就而之若殿様御登京即下如何計可被遊御配慮且御役々之辛勞兎角可申様も無之爾來上を奉初只管御地之報告を御待被遊候事ニ御座候尤去ル三日鳥羽御通行之御都合等之鬼塚嘉太郎より逐一申達雀躍奉恐悅候右様天下之大亂と相成候而之御國是之儀更ニ一層之御 廟儀を被盡則別紙書取之趣ニ御決定被爲在候間於御地も右之御覺悟ニ而臨機應變至誠之處置被爲在度被思召上候仍而御守衛として差寄一番手出京被仰付一昨十三日より海陸兩道ニ被差立萬里丸兵庫着之上百ニ凌雲丸を佐賀關へ差廻陸行之面々乗組之切組ニ而二番手も同様被仰付置夫々用意等相濟居申候然ニ京都迄之通行如何可有之哉之懸念も不少候得共 禁國御守衛之御人數を可致抑留筋之有之間敷無異議着京を禱申計ニ御座候借御國四境之警戒之勿論御府中口々受持等之儀も夫々被仰付急應之手配等專御指圖ニ相成居申候東西如是之形勢ニ相成候而之何方如何様之異變も難計君上を奉始日々於御城萬般之御評議被爲在事ニ御座候軼掌中不能委曲若殿様にも御國許之儀何かと御懸念も可被爲在と先右之概略申達置候以上

正月十六日

御 中 老
御 家 老

溝 口 孤 雲 殿
三 宅 藤 右 衛 門 殿

二白此節別紙評議之次第之一統ニ御布告は無之口上ニ而頭々相含候筈ニ付於御元も政府限御披見ニ相成書付之流傳不致様有之度存候以上

御評議之趣 書取

即今京攝間大變動付而之從來尊王之御實意御貫徹之儀專要ニ付於京師之屹々 禁國を御守護被爲在御同心之向之親疎を不論被仰合皇國御維持之御盡力可被遊思召ニ候若此後天日不照場ニ至候而茂右之御旨趣者何方迄茂御立貫被遊候御

覺悟ニ候條衆力一致彌以御趣意徹底いたし候様可相心得旨御沙汰被爲在候事

但日田天草別府等出張之面々之是迄幕命を奉し警衛之事ニ候へとも廢幕之今日ニ至候而者猶更王土の内亂妨狼藉等無之様取締筋肝要之儀ニ付諸藩より懸合茂有之候ハ、右之趣相答同意之向は何方たりとも相共ニ力を戮せ其地之人民を愛護可致との旨候事

正月

正月十六日我藩末家細川利永舊幕の召命に應して江戸城に至る時に在江戸の諸侯は交代寄合衆を加へて四十名に達せず

〔密書輯録〕

自著子爵細川利永履歴大略

一慶應四年正月十六日開老御國內總裁稻葉美濃守正邦官邸ニ至病氣押テ出勤ノ旨届ケ直ニ登城此前屢々登城ノ違アリ
一先年幕政變革以來柳間諸侯取締ヲ心得タリ

右ハ在邑多ク在府ハ纔ニ交代寄合ヲ加へ四十名ニ足ラス初松前伊豆守細川若狹守細川玄蕃頭其後細川若狹守細川玄蕃頭又木下飛騨守又遠山信濃守等ナリ細川兩家ハ終始加名セリ開老又大目附等ヨリ呼出等實ニ筆紙ニ盡サス

正月十六日大垣藩主戸田氏共勅免を得て上京す

〔一新録自筆狀〕

(正月廿日附溝口孤雲三宅藤右衛門より家老中老宛書翰に添付せる稜書の一節)
(正月十三日の條)

一濃州大垣若州小濱謝罪之道相立東山北陸兩道之先鋒被仰付候

明治元年

同(正)月十六日

一大垣侯(戸田氏共)謝罪之遺相立今日御上京之事

正月十六日備前藩兵姫路城を徊ふ

〔尊攘錄諸家建白並御届書等〕

慶應四辰

正月廿一日於大坂征討將軍御本陣に備前侯が姫路開城御届件々左之通

但迅速御届直様總督出張明石表に茂相届候様被命即廿二日四條殿御出張先明石表に御届被罷越候旨

先達而備前守が御届申上候儀ニ付姫路表へ兵馬差向在留糺問仕候折柄今度討伐之命被仰出候旨於出先去ル十六日拜承

仕最早猶豫難仕直ニ攻懸及發炮候處速ニ降伏仕向後大義滅親 朝命奉戴之外無他念段申出爲實効證人差出候付同十七

日城地并炮器等相預り堅固ニ取締仕居候段出先之者申渡候間右證書相添不取敢此段奉言上候以上

正月廿一日

池田備前守

別紙

此度王政復古被仰出候折柄主人儀奉對 朝廷實ニ奉恐入候仕合ニ付尊藩等へ被爲 命討伐之師御差向相成候段奉恐入候只々悲泣愁歎大義滅親之外無御座御軍前ニ降伏開城之上砲器悉ク御預申上且別紙名前之者爲證人差出 王師を奉迎以後 朝命奉戴之外餘念無御座候微臣共連印誓書奉差上候只管哀哭歎訴仕候以上

慶應四辰正月十七日

高須隼人印
本田意氣揚印
松平孫三郎印
本田縫之助印

證人名前

家老	大河内帶刀	高千三百石
同	松平數馬	高千石
忠悃再從弟兄弟		
年寄三代目席上座		
酒井又七郎		三百石

右姫路表に出張

備前老臣	池田隼人
隼人嫡子	池田衛門介
後軍隊之内	手勢四百人計り
外ニ備ノ屬藩	千人計り
播州赤穂藩	百五拾人計り

〔防長回天史第六編上〕

明治元年春期ノ大勢及ヒ毛利氏(抄略)

我軍(長)此夜(九日)今津ニ宿シ一旦尾ノ道ニ歸リ十二日銳武隊大隊三百二十五人及ヒ第一第四混成大隊ハ之レヲシテ海路上阪セシメ十四日整武隊ハ海路姫路ニ向ヒ片上ニ上陸シ十六日第五大隊十二日藩地出發又藩地ヨリ片上ニ來着ス會々朝命ニ因リ備前藩伊木若狹兵ヲ率キテ既ニ備中松山ヲ服シ尋テ姫路ヲ服ス我軍因テ片上ニ留ル

正月十六日長崎運上所は各國領事の間對し會議の事項及び會議に列すへきものゝ氏名を告ぐ

〔三條實美公年譜〕

明治元年

十六日諸藩士西役所ニ至リ協議シテ左ノ答書ヲ贈ル

千八百六十八年二月八日付之書翰落手披見セリ右ハ鎮臺當地引拂候ニ付 朝廷ヨリ其任職之者被差越候迄ハ在崎之各藩并土地之役々申合諸事は迄之通取計候義及告知候爲左之人數面會イタシ候儀ニ有之候此段及回答候
慶應四年正月十六日 長崎運上所

各國コンシユル宛

- 薩州藩 沖 直次郎 肥後藩 宮村少之丞 筑前藩 栗田 貢 藝州藩 石津藏六
- 肥前藩 重松善左衛門 土州藩 佐々木三四郎 對州藩 岩崎浪江 宇和島藩 井關齋右衛門
- 島原藩 石川治部左衛門 平戶藩 服部源五右衛門 唐津藩 杉江會輔 大村藩 稻垣治左衛門
- 五島藩 奈留帶刀

正月十六日肥前筑前兩藩士答書を各國領事に贈り朝官派遣せらるゝ、まて在崎の各藩合議を以て港務を處理する旨を告ぐ

〔三條實美公年譜〕

肥筑兩藩又答書ヲ贈ル曰

千八百六十八年二月八日附之書翰落手せり長崎奉行退帆後公之事務何方ニテ取扱候哉告知イタシ度候様ト申越候趣承知セリ右ハ從 朝廷其任職之者被差越候迄西役所ニテイテ在崎之各藩并土地之役々申合諸事は迄之通取計候儀ニ有之候此段及回答候
慶應四年 正月十六日

各國コンシユル宛

- 肥前藩
- 筑前藩

是日西役所ヲ改メテ會議所ト稱ス

正月十七日官制を定め總裁の下に神祇、内國、外國、海陸軍、會計、刑法、制度の七分課を置かる

〔一新録自筆狀、京都並江戸返達御用狀扣〕

三職分課

- 總裁 有栖川 帥宮
- 副總裁

兼外國事務總督

- 三條 前中納言
- 兼海陸軍務會計事務總督

岩倉 前中將

神祇事務總督

- 有栖川 中務卿宮
- 中山 前大納言
- 白川 三位

同掛

- 六人部 雅樂
- 樹下 石見守

内國事務總督

谷森 内舍人

同掛

- 正親町三條前大納言
- 德大寺 中納言
- 越前 大藏大輔
- 土佐 前少將
- 辻 將 曹
- 大久保 一藏
- 田宮 如雲
- 廣澤 兵助
- 神山 左多衛
- 中根 雪江

外國事務總督

山階宮

三條前中納言

東久世前少將

宇和島少將

後藤象次郎

岩下佐次右衛門

仁和寺宮

岩倉前中將

薩摩少將

廣澤兵助

西郷吉之助

中御門中納言

岩倉前中將

安藝少將

同掛

西四辻大夫

兼制度掛

三岡八郎

小原仁兵衛

長谷三位

細川右京大夫

十時攝津

津田山三郎

萬里小路右大辨宰相

福岡藤次

田中國之助

三岡八郎

刑法事務總督

同掛

制度寮總督

同掛

會計事務總督

同掛

海陸軍務總督

同掛

〔一新録自筆狀〕

(正月廿日發溝口三宅兩人より通報の稜書)

一月十七日

一三條前中納言様岩倉前中將様惣裁副職被仰付其餘議定參與等數方被仰付候事

〔林新丸郎日録〕

一同(正月)十七日晴、依召世子御參内奉供刑法總督被命

正月十七日親王公卿以下官家一般奉公の義を存し奮身力を致すへしとの示諭書を下され尙ほ列藩へも廻達せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

穗波三位様より池部権右衛門に被成御渡候 御書付寫

別紙之通被 仰出候仍申入候御廻覽可返給候也

正月十七日

尾張大納言殿

越前宰相殿

土佐前少將殿

薩摩少將殿

安藝少將殿

宇和島少將殿

明治元年

細川 右京大夫 殿

今般賊徒追討被仰出 皇威漸ク盛ニ被爲成候ニ付而者上親王公卿ヨリ下非藏人諸官人ニ至ル迄感激奮發 朝廷之御爲
擲身命忠勤可仕之慮傍觀坐視尺寸之功茂無之輩剩へ自己之利祿ヲ貪リ行々大祿ヲ茂可賜哉杯々嗜仕居候者茂有之哉ニ
相聞以之外之事ニ候諸家世襲之祿ニ至リ候而者時宜ニヨリ被爲減少候トモ加増被仰付候儀者無之候但シ此上奉公之廉
ニヨリ功勞有之候向者其身限リ加祿ヲ茂可賜儀ニ候官位ニ至リ候而茂同様世襲之舊弊者御改革被遊人材ニ應シ御補任
可被 爲在儀ニ候間一同其心得ニ而文武之事業精々勉勵可仕候從前在朝之人々武者唯武家之業ニ而於 朝廷は御用ヒ
不被爲在事ト存し一切致廢業候而已ナラス文藝ニ至リ候而も固陋拙劣紳莽布衣之士ニ者萬々不相及徒ニ軟媚之風ヲ喜
ヒ上品杯ト稱シ華奢風流ヲ專ト致シ候ニヨリ滿朝婦人ノ如ク途ニ紀綱衰弛 皇道陵夷ニ至リ候段實以可愧可嘆之至ニ
候向後讀書擊劔ヲ始メ文武之大道ニ至リ且夕講究可仕精熟之上者應其材夫々御登用可被爲在思召ニ候間無懈怠可心掛
候尤此御時節ニ至リ官武之差別無之儀ニ候間武家之輩ニ對シ倨傲不遜萬一確執ヲ生シ候而者不易義ニ候間吳々可相
心得家來下部等ニ至ル迄 朝廷之御威光ヲ借り勤王ヲ口實トシテ世人ヲ欺キ金穀ヲ貪リ候者茂可有之哉ニ付急度可申
付候且今度赦令被行有罪之者茂夫々寛大之御處置被爲在候得共尙此上怠惰悻悻之徒者不擧貴賤嚴罰可被仰付義ニ候間
此旨兼而相心得候様御沙汰候事
右之通宮公卿非藏人口向諸官人限リ被 仰渡候事

正月十七日本藩世子喜延刑法事務總督を命せらる

〔一新録自筆狀〕

(正月廿日附溝口孤雲三宅藤右衛門より家老中老宛書翰の一節)
一世子去ル十七日依 召御參 内之處刑法事務惣督に被爲蒙 仰候右者 王政律令之振合ニ相成候哉又ハ徳川之振合洋

法杯茂御取交ヒ申都合ニも可有之哉品ニより候而ハ其邊心得候人物至急ニ出京も可被 仰付何様得斗御模様相窺候上
様子可申達候間先左様御聞置候様存候

(別紙)

刑法事務總督被 仰出候事

細川 右京大夫

正月十七日本藩津田山三郎徴士及ひ刑法事務掛を拜命す

〔一新録自筆狀〕

(正月二十日發溝口三宅兩人より通報の稜書)
同十七日

一世子依召御參 内之處刑法事務惣督被 仰付候事

但津田山三郎徴士被 仰付刑法事務掛被 仰付候事

〔一新録自筆狀〕

(正月廿日附溝口三宅より家老中老常り他狀に添付せる四通の内)

正月十七日也

津田山三郎

今度可爲徴士被 仰付候事

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

正月十七日於 御所御假建長谷三位様方御渡

津田山三郎

刑法事務掛被 仰付候事

正月十七日我藩の先發部隊將に桑名城に向て進發せむとするを以て更に騎士若干名砲手若干名

を京都より大津に派遣す

〔一新録自筆狀〕

〔正月二十日發溝口三宅兩人より通報の稜書〕

同十七日

一大津口御出張之 勅使昨日於三井寺參集之諸藩訓練御覽左候而桑名に向明後十九日より御進發ト相決候由右付而下津
縫殿初建議之趣永屋猪兵衛持參今曉早打ニ而罷越候付御役々打寄評議之上 世子思召奉察候處此節之是非御勝利を不
被得候而之難相成願ク澤村八之進も組共被差越度候得とも御人少ニ付先大津口に罷出居候同人組十六人を其儘縫殿へ
被差添相殘面々之追而御國許より御人數着之上進發可被 仰付大筒手池邊啓太門弟茂相殘面々被差出旨被仰出今晝迄
ニ致出立候事

但啓太者 思召之旨被爲在居殘大小砲稽古相倡候様被仰付候事

〔溝口孤雲驪旅中勤勞稜書〕

一大津口御人數ハ桑名城爲攻撃進軍之由ニ付猶又十七日増人數出張

但大垣ハ謝罪之筋相立候由

正月十七日東海道鎮撫總督橋本實梁同副總督柳原前光桑名城攻撃に際し軍令及び各軍の行進日
程を令達す

〔王政復古帳〕

左之三浦於大津被仰出且及連候正月廿日永屋猪兵衛申來候事

軍令

一王師之むかふ草こまゝに僞意を體し首尾不可輕舉

一戰士ハ長官之令をうけ長官者其大將之令を受ケ更ニ不可有異儀候事

一私ニ賊徒ニ應接をしあるいハ方略を暴白する事最可有心得事

〔右一通〕

一明十八日朝七時號砲三發諸隊軍裝用意

一同六時先鋒四藩各祝砲ヲ打順序々々發途

一五ツ半時號砲二發御本陣發途

〔右一通〕
右者去ル十七日夜半被仰出候事

戊辰

十八日

大津出張 石部泊

但道法凡六里拾七丁

右先鋒

大村 備前 佐土原 彦根

同日

大津御出陣 草津御泊

但道法凡三里半

右御本陣

肥後 因州

十九日

明治元年

梁(橋本)少將
光(柳原)侍從

實前

石部出陣 土山泊

但道法凡六里七丁

右

大村 備前 佐土原 彦根

同日

草津御出陣 水口御泊

但道法凡六里拾七丁

右

御本陣 肥後 因州

廿日

土山出陣 龜山泊

但道法凡五里半

右

大村 備前 佐土原 彦根

同日

水口御出陣 坂下御泊

八八一

但道法五里半七丁

右

御本陣

肥後 因州

廿一日

龜山出陣

四日市泊

但道法凡五里

右

大村

備前

佐土原

彦根

同日

坂下御出陣

石藥師御泊

但道法凡五里廿七丁

右

御本陣

肥後 因州

二十二日

石藥師御出陣

四日市御泊

但道法凡二里二十七丁

右

御本陣

肥後 因州

右惣勢四日市揃

右者去ル十七日被仰出候事

正月十九日

正月十七日我藩備頭清水數馬藩兵を率ゐ上京の途次大坂に達す

〔一新録自筆狀〕

(正月廿日發函口三宅兩人より通報の稜書)
同十八日

一京攝間戦争之次第鬼塚嘉太郎持參去ル十一日 御國に着同十三日一番手先陣進發昨夕大坂着之段歩御使番踏越今晚相
建候事

正月十七日豊後國日由變動につき舊幕府西國郡代窪田治部右衛門陣屋を棄て、逃走す

〔尊攘録探索〕

日田表動搖之模様ニ付外聞として差立置候太田黒角馬渡江左衛門聞取書左ニ一書を以申上候

一窪田治部右衛門様當月十五日日田御陳屋御立大野村に十七日迄御滞留同日御自身馬上ニ而御引返猶同村之様御引越翌
十八日鯛尾村之様御引移十九日隈府。御引越之事

一日田表に久留島伊豫守様御人數之由押寄御代官様御立跡御陳屋に四拾騎數四百騎數早速入込候由

一十七日肥後熊本之士と申帶刀三人御代官様甚々迷惑之由ニ付加勢ニ參候段大野村に罷越申聞御代官様之何方に被居候
哉相尋候ニ付最早肥後に御引越ニ相成候段返答いたし候由之處右三人之翌十八日迄滞留いたし其後何方之様罷越候哉
相分不申由

一日田御陳屋に者久留島様代人秋山市郎と申入込居候由

一土州より拾人程十八日晚豊前長谷屋之宿に止宿いたし候由

一豊前倉宿と申所より三百人程參候由何方に參り候と申儀者相分不申候

一薩州より八百人程追々參候風説仕候由

一京都より宇佐郡ヲモト山と申所に御入ニ相成居候由

一華山院様に久留島公より使者御立ニ相成候由子細之相分不申候

一森御領之内段々出陣之用意仕居候由

一隈町西光寺と申所に肥後勢と申相詰居候由十九日も三百人程同所に參向又追々肥後より御出張ニ相成候風説之由

一十九日晚遅ク日田表より渡邊善一郎と申者を呼ニ相成候得共様子相分不申候

一日田表出入口所々に

明治元年

爲 朝廷 久留島伊豫守衛地

右之通建札いたし候山

右者津江表新屋敷組頭利兵衛と申者日田表より罷歸候を聞取候段申越候ニ付御注進仕候以上

慶應四年正月

近 藤 平 四 郎 印

菊池 御 郡 代 衆 中

御 郡 方 御 奉 行 衆 中

正月十八日花山院家理の徒輩と稱する者肥後國天草島鎮撫として富岡に上陸す同地の吏員等御領へ逃避し我藩の警備隊に應援を乞ひ之を討伐せんことを謀る

〔形勢雜記壹〕

覺

天草富岡御陣屋異變ニ付而天草柄本組大庄屋小崎清より別紙之通郡浦三郎八井愛甲謙益手許に飛船を以申來候間不聞御達仕候已上

慶應四年正月

郡 浦 彦 左 衛 門

入江次郎太郎殿

志方 軸 人 殿

青陽御慶芽出度申納候前文略仕候然ハ天草之儀去冬富岡表に浪上舩亂妨相働候後ハ其所彼所浮浪舩之横行不遵枚舉一州安眠致兼居候内當月十四日長崎表御奉行始諸役々都而蒸氣船貳艘より御引拂ニ相成右空營に之土州勢之由相詰居候趣右者土勢より被喚取御奉行始引拂候哉之風聞有之候へ共治定之儀之及承不申候

一昨十八日七時長崎茂木村より花山院前中將殿御内之由三拾九人富岡着有之同所荒木信之助宅に止宿ニ相成候趣別紙寫之通引合來居中候富岡陣屋詰之面々之即刻御領村に引越ニ相成候由ニ而是又別紙之通書付到來仕申候

一十七日ニ三拾四艘十八日ニ拾八艘今日貳拾五艘薩州勢乘組凡五反帆位之船志柿村内瀬戸を通長崎に參申候尤今日之貳拾五艘之富岡に入レ候も相分不申候

一來ル廿一二日比日田表を相襲候管候哉風聞及承申候
一萬冬奪取去候天草之金子之薩之蒸氣船ニ其儘有之候趣船將之兒王孝助と賊申人之由變名大太刀次郎と唱候風聞も御座候事右承及候丈御含まで海岳申上度事も御座候へ共急場略文余者御推察可被下候今晚より御領之方に先出張仕役所詰に面談申上時宜ニ寄富岡に罷越候覺悟ニ御座候右迄極急飛船を以啓上仕候

正月十九日

夜五ツ時

小 崎 清

態ト以急書爲御知申上候然之富岡に昨日薩州浪人數多參り候由ニ而市中家財取片付旁大騒動之趣御上も同所御立去制勝組茂都而御領村に引移り候趣ニ御座候長崎表も大變之由ニ而土州長州薩州之浪士共三百五拾人か押寄候由ニ而御奉行様ニも行衛不知御落ニ相成候最早御奉行所ハ土州領之段建札等いたし候趣茂木村庄屋宅之儀も薩州陳場之旨建札致シ勿論同衣役人衆者都而無何所と御逃去ニ相成候趣ニ御座候富岡之儀も市中都而燒拂候哉も難計家材取片付頓斗空舩之由ニ而誠以不容易天草之大變如何相成可申哉必々御要心御肝要ニ奉存上候右不取敢此段極急書を以爲御知申上候此後之模様相分次第猶又爲御知可申上先々爲御用心是而態々勿々已上

正月十九日

急書を以得御意申進候然之今七時花山院前中將殿御内結城下總之助兒島備後之助御上下三拾九人茂木村より渡海荒木信之助宅に止宿ニ相成別紙寫之通郡中廻達いたし候様申聞ニ相成候付一組大庄屋并庄屋兩人印判御持參出張可被成延

明治元年

八八五

引ニ相成候而之拙者共大迫ニ付此狀御披見次第御出張可被成候右得御意度早々已上
正月十八日

富岡町 役人
會所詰 大庄屋

栖本 組大庄屋衆 中

今般 皇朝御一新ニ付花山院前三位中將家理卿九州爲鎮撫被奉内 勅豊州に渡御被遊候就而之當島兼而人心不居合内
々混雜之趣も相達深ク被遊御憂念候依之拙者共人心一致居合之基本も相立度論達方として出張致シ決而亂暴輕舉之儀
無之候間安心致シ郡中役人共一同集會之上致決議聊奉報天恩度存念候異心無之而々早々受書可被差出候已上

辰正月十八日

今十八日七時比賊徒共多人數富岡陣屋元の上陸いたし就而之同所之儀之不要害之場所ニ付一同開陣御領村に罷越肥後
警衛人數より力を戮せ追討之積制勝組有志之面々一同奮發罷在候ニ付其組之者志有之者之炮器相携に速ニ同村に馳集
へくもの也

辰正月十八日夜九時

御領 役所

大庄屋當り

〔一新録探索報告〕

天草大浦大庄屋小崎清見開書同人直筆之寫

一節得御意候昨十八日富岡渡海いたし候處最早刻開附候賊吏不殘逃去申候付而ハ精々人心歸向ヲ相謀申候處兩三
日中ニも一致味方ニ相屈相見込申候左候へハ一刻も早ク豊州へ走せ集度存候ニ付十五人ニ而も廿人ニ而も即刻御操出
被下度御出張被下候上ハ當所御引渡置快然豊地に罷越候何分共急ニ御操出跡地之賊手ニ入不申様是祈而已早々頓首

正月十九日

結城小太郎
兒玉孝助

大山 壯太郎 大兄
吉井 源馬 大兄

右之書面上ニ封ハ御領村山崎幾之尤當結城下總之助兒島備後之助と有之開封いたし候處右書面ニ而返答出來兼候段相
斷候處右ハ滯崎之土州カンエン隊に遣候書面と入違ニ相成候幾之承に用事ハ今度花山院様軍艦御買入ニ付金二萬兩達
之周旋頼ミ候御請可申哉之旨申聞候付承知之旨相答置候事

右之十九日夜壹人山崎幾之丞宅ニ參り候而之應接

十九日夜五ツ時分二人之内壹人ハ馬上御領村大庄や宅へ參り肥後出兵營へ用事有之候付案内いたし候様申聞御領村正
蓮寺ニ而應接

銘々ハ花山院様御内ニ而今般兩島鎮撫として罷越候前緒御談判共々鎮撫いふし度旨申候肥後勢カハ右之趣承知候間
返書遣ニ相成候

十九日富岡方引合狀上封中共ニ同所逃去候役人中結城下總之助兒玉備後之助と有之文意ハ自分共ハ島地爲鎮撫罷越決
而戰爭等之意無之處農兵等驅集メ交鋒之手當致由左候へハ人民煩ニ不相成場所ニ而可致對戰ニ付戰地可相望候尤此ノ
陣やに取殘有之ケヘル筒十挺大炮壹挺刀何本數ハ軍事必用之品ニ付無散亂可相渡候間戰地可相望旨認有之
返書ノ大意御紙面之趣委細承知決而逃去り候ニハ無之富岡ハ不要害ニ付兼而所替之積今般種々浮説も有之開陣いたし
候儀候勿論決而戰爭相好候儀ニ無之尙一鉢肥後勢へ打合せ居候事ニ而決而戰爭等手當等無之旨極々和之返書
十九日富岡町年寄高島傳左衛門方へ薩士之由立寄怪敷者參り居候由をし亂暴等いたし候ハ、崎陽之薩屋敷へ可申遣何
時も追拂可遣併他領ニ頼もなきハ余り事好候様相當候旨申聞候由

明治元年

八八七

廿日本戸馬場木山爲彦宅へ参り是非面會申談廿一日朝應對候所薩人黒江幸右衛門と中人ニ而長崎茂木ニ而天草變事聞付渡海富岡ニも立寄内 勅之虚實ハ難計併王政復古ニ付而ハモシ亂暴等相働王地之その之難澁をるを傍觀も難叶候ニ付其節ハ可手揮併肥後出兵も有之使者を以談詰可然ク様申觸し候様ニ而ハ人氣撫寄候様有之候へ共此時時ニ而ハ薩ニもセヨ肥ニもセヨ勅 命奉らてハ何事も難成シ薩杯ハ頂々たる小島ニ目を懸候位之事ニ無之段申立何様薩へ頼メかしの模様を兎や角相節且ハ肥後ニ手を出サセン内存賊黒江幸右衛門嘶候所之當り障り無く唯郡内治り之模様ヲ聞合ヲ隔いたし候躰と懸察仕候

十九日朝五ツ時荒木信之助宅へ御陣やへ引移晝ハ極々閑靜ニ而夜も終夜市中其外戒ノ者相廻候兩三日中土薩之内方出勢いたをる候ニ付富岡陣や引渡之上自分共ハ柳川に參る管候旨申聞ル

廿日肥後加勢之者之與撫方承知之返書を添決而戰爭等無之儀ニ付無懈安業可申郡中へ廻達いたし候事

十九日郡中農兵總而可被召出候所難治相斷富岡町農兵惣代ニいたし何角相渡候此趣ハ未タ聞分ケ不申候等之申分

手附手代之者共ハ肥勢へ談判ニて或戰爭ニ決或ハ見合ニ相成更ニ不廿日晝後富岡之方戰書參り候後ハ彌戰等之相止候管ニ相決候 是迄ハ現見

其後尙死を決相戰候管ニ相成候趣候 是ハ聞及候丈

一 躰肥後へ倚頼之躰ニ相成候

肥出兵模様ハ十九日既押出打懸候管ニ相成候處勅ノ字有之ニ付先見合せ候方ニ可有之談判ニ相成其後窪田家之手附手代ニ強而被談せ尙後詰ニ而もいたし候様都合相成須臾して又討候儀ハ相止是以未決

十九日夜富岡使者參候後ハ容易ニ戰爭等ハ不致積ニ相決

廿日晝後熊府へ極急早打ニ而出勢相頼着候上富岡へ推參談判を遂武威を示鎮撫可致哉之示談ニ而既ニ早打出立候趣富岡戰書到來ニ付先見合候而廿一日未明急早差立ニ相成其趣意ハ熊本方出勢いたし置京都豊州を相探候迄如何共可相

決哉之由

日置島津左衛門胤島年寄江口子之助廿三四日迄之内天草へ參る筈

〔一新録探索報告〕

辰正月廿日

天草詰御船頭川上勇作早打之飛脚として今曉明六時當會所着案駄夫を取候申聞取書

一去ル十七日之夜人數五拾人計富岡御陣屋に襲來候ニ付相詰候農兵五拾人計都而散亂大庄屋茂御陣屋遁出御領村御陣屋に罷在候との事

一 御手代四人諸役人共三拾人計御陣所近邊之東禰に遷來大庄屋杯ハ腹巻相固居候との事

一 右襲來候子細者花山院前大納言家理卿之御内ニ而結城總之助小崎豊後之助 御内勅を蒙り天草之人心安堵いたし候様との御主意を奉し參候との事ニ而何之四方助と申者に書附相渡候山之事

一 右ニ付而者當御陣屋に推參討論之筋茂可有之との事

一 當時天草詰之御人數御鐵炮三拾挺御人少ニ而御當惑之由船手共一所ニ御防之御用意との事

一 天草下方之設ニ者御國より之御固有之候ニ付右體之事及差起候杯申候山之事

一 右上總之助列ハ長崎より追拂候哉之風説も有之候山之事

一去ル十四五日之頃ハ薩州長島遣之漁船と相見三四拾艘人數拾人計宛乘組外目廻出來兼候處より本戸之瀬戸を通り御領御陣屋之下を廻り長崎之様通候と相見候處十七日比方素船ニ而歸帆いたし候との事

一 天草御陣屋にホート貳挺拾置其段御手代等より申出候ニ付此方様より御貸渡之筒ニ御取寄ニ相成管之由左候得之襲來之もの共内情も相分可申御評議之由之事

右之通御座候以上

慶應四年正月廿日

中村 庄右衛門 殿

志 方 軸 人 殿

正月十八日長崎奉行退去につき各藩協議の上大村藩重臣及び兵隊を立山役所に置き市中を鎮撫せしむる旨朝廷へ申告す

〔慶應二年八月以後 京都大坂長崎探索書〕

一此度河津伊豆引取候付市中爲鎮撫大村重役之者并兵隊立山役所に繰込罷在候間此段御届申上候以上

正月十八日

各 藩 會 議 所

正月十八日在長崎各藩士書を各國領事に與へ公務及び取締の件朝臣派遣せらるるまでは各藩協議して其責に任すへき旨を告ぐ

〔慶應二年八月以後 京都大坂長崎探索書〕

今般長崎奉行退崎跡公之事務朝廷より其任職之者被指越候迄之儀者在崎之諸藩并土地役々申合我國國民共貴國人民ニ對しほふ行ハ勿論諸事不取締之儀無之様手當いたし置候間聊無懸念交易筋等是迄之通取行候様貴國人民に被相觸候様いたし度貴國人民之儀も尙又暴行ハ勿論不取締之儀無之様有之度此段申進候謹言

慶應四年辰正月

十 三 人 花 押

各國岡士當り

葡萄牙 亞米利加 字漏生

白耳義 丁 抹

〔三條實美公年譜〕

十八日會議所左ノ書ヲ各國岡士ニ贈ル曰(書面同一なれば略す)

正月十八日在長崎各國領事の要求に應じ筑前藩栗田貢肥前藩副島次郎等通商の事を談判す

〔三條實美公年譜〕

李米葡佛四國岡士亦面職ヲ求ム栗田貢等四名之ニ應接ス字岡上等旨ヲ領シテ退ク獨リ佛岡士異議ヲ陳シテ曰ク余ハ大君ノ定約ヲ守リ大君アルヲ知テ國帝アルヲ知ラス今若シ大君ノ約ヲ破レハ兵力ヲ以テ之ヲ制セン副島次郎曰ク此定約ハ大君ノ擅ニ締結スルモノニシテ一昨年改テ朝廷ノ訂スル所ト爲レリ足下定テ之ヲ知ラン抑兵ヲ發スルハ必ス名義アリ足下若シ兵ヲ發セントセバ自ラ其心ニ任セヨ佛岡士曰ク然レバ兵庫在留ノ公使ニ告ルマテハ運上所ノ稅銀ヲ出ササルベシ次郎曰ク稅銀ヲ出サレバ貿易ヲ謝絶スヘシト佛岡士復タ爭フ不能ハス猶ホ今夕飛船ヲ以テ公使ニ告クヘキヲ答フ

〔慶應二年八月以後 京都大坂長崎探索書〕

肥筑佛之應接

一佛言 鎮臺之跡者肥筑兩藩に託スル由ニ付其通ニ相心得候

答云 此鎮臺云捨ニ脱走夫レ故兩藩承知セス諸藩集議ヲ遂元來異人交際之地右異人ト市中是迄之通取計追而朝廷之命ヲ相持居候

佛云 鎮臺イツレゾヤ

明治元年

答云 西役所

佛云 奉行何人ゾヤ

答云 在崎諸藩一休々相成集議相決候得者是則奉行也

佛云 此事ハ元大君よ定約有り即大君を知て帝有を不知大君之定約を守故大君定約を破レハ則兵端を發し制之

答云 兵端を發ルニハ決而有名然ルニ此定約ハ大君自儘ニ計ひ一昨年改朝廷之定約相成候段ハ可相心得大君有を知て

帝有を知サルハ心^{世務カマ}違之第一ト存

佛云 然者兵庫ニ有ノミニストルニ告迄ハ運上所稅銀ハ不出ト云

答云 不納稅銀商法ヲ止抑商法スルモノ、不納稅銀ノ法アリヤ

佛云 今晚以飛脚兵庫ミニストルニ告ル迄ハ稅銀相納也

答云 可也

正月十八日長崎各藩會議所は曩に公金を奪還せし白木保三等に賞金を與ふ

〔三條實美公年譜〕

是日(十八)會議所白木保三等五名ノ功ヲ賞シ金五百兩ヲ給ス

〔慶應二年八月以後
京都大坂長崎探案書〕

一去十四日之夜道臺引拂之節彼船ニ有處ノ金取返し面々に獲金之事

一金壹萬四千百兩

右之内 八千兩 市中人民に施行
六千百兩 備金

中渡案

白	木	保	三
竹	内	宗	之
野	村	余	吉
牛	島	鹿	助
本	庄	豐	馬

右當十四日之夜役々乗組外國船に罷越金子取戻之儀ニ付格別骨折候付爲御褒美被下置

辰正月

正月十八日舊幕臣勝安房書を越前藩主に贈り兄弟齋に聞かは外邦其隙に乗するありて遂に印度支那の覆轍を踏まむことを恐るとして朝廷へ代訴せむことを請ふ

〔文久元より慶應三迄
尊攘録諸家建白並御届書等〕

近く官軍問罪之御舉ありと臣子之分共只一死ある而已何そ患とするに足らん其是非曲直ニ至て強て今分別を論せず空漠ニ附して百歳公議之人を待而已昨今米利堅之報告ニ云官軍兵庫の居館を襲ふ故に城を築き兵士を分て其地を固守し猶軍艦を呼と英佛亦然り長崎地方之如きは未だ其確爾を得不得と雖も恐クハ同轍ニ過さるべし臣愚聞之痛哭悲歎不堪遠クハ印度之破れ近くハ支那之地長毛官兵ハ是非曲直を鳴して同屬相喧西洋諸國其慮ニ乘して今や 皇國始と同轍ニ陥らんとす口に勤 王を唱ふと雖も其形勢今日ニ及び公平を唱て大私を狭み 皇國土崩萬民塗炭ニ陥るを不察是何とか云ん臣上進して微忠を懇訴せんとすれ共今ハ有罪之小臣我主と一死ヲ待而已然レども此千載之遺恨と云如何せん臣斬首前に逼れども黙止する事を不得希クハ此微忠を以て參與閣下に代訴せられん事を誠恐謹言

〔海舟日記〕
〔正月(十八日)〕
(海舟日記に此書越前家へさして差立候三通なりとあり又起筆に近々官軍、署名に徳川陪臣勝安房とあり)

徳川

陪臣

同(正月)十七日。京師より問罪の官軍東下す、三道之小侯議論紛々といへども、多くは驅役せられ、或は其城邑を燒かむと云説、日夜不絶、東府之諸士は、軍を率ひて箱根箱吹に待たむといふ者あり、或は軍船を以て大坂を衝かんと云、紛々擾々其方向を辨せず○十八日越前へ介して參與え一書を呈進す

正月十八日勝安房書を東海外二道の諸侯に與へて其忠憤を勵まし且つ官軍の東下恐るゝに足らず吾れ軍門に參して是非曲直を争はんとの意を致す

〔尊攘録諸家建白並御届書等〕

其形を取て其情を盡さるハ天下之公平ニ非ず伏見之舉小卒の誤リニ發す既ニ先五六年毛利家閣下に不敬ありといへとも其情實判然たる時は亦今日之如し天朝といへ共一も誤なしといわんや況我徳川氏に於てをや其誤を誤とし其情實を盡し其條理を正し(海舟日記に據り訂正す)初而公私如何と決すへきなり事倉卒に出て大令倉卒に出づ侯伯之職其忠謀盡力一死を以て國家ニ可致の時乎聞く三道之侯伯其城邑を火ニせんとする風聞あり或ハ首鼠兩端不決之評ありと殊ニ痛神ニ不堪處なり既ニ舊歲協力同心 皇國を富強し萬民を撫育する令あり 天朝亦舉賢一新之大令あり然ニ不思條理情實を捨て主家ニ敵せんとするを忠諫之事なきハ尤以可怪 皇國土崩を不愁歎空議今日ニ及びし歎小臣至愚と雖も其解せざる處一朝變變之軍ニ到るや猛卒百萬を卒て東下すとも決而臣輩の恐るゝ事ニ非ず軍門ニ推參して是非曲直を問ん今先ニ一書を以呈進ス空擲捨するなれ謹言

辰正月(十八日)

三道 城主 机 下

勝

安

房

〔海舟日記〕

此日(正月十八日)諸官輩建言して、御敷願之御書持參すべき者は、小臣可然と云を以て、聞老此議を被命、即時上京すべき旨を以答へり、然るに或人云、若安房をして御使命せらるれば、其御旨を達せむ、然れども抑留せられ、甚不可なり、しかず餘人を以てせられんにはと、即夜御免被仰渡、後宮より女中某御使之事あり、小臣又三道之城主へ一書を呈す使を以て差立べきにあらず、公に達せむは僭なり、酒井左衛門尉之留守居へ話して、同席へ示されむ事を望む、

正月十九日會計事務裁判所を金穀出納所内に設置せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

(正月廿日紀州藩より回達)

一會計事務ニ拘り候儀都而會計事務裁判所に可申出候事
但シ右裁判所金穀出納所内ニ被設候事

右之通可相達旨參與衆被申渡候仍申入候也

正月十九日

參與役所

紀伊中納言殿 加賀宰相中將殿
仙臺中將殿 肥後中將殿
筑前宰相殿 因幡中將殿
備前少將殿 伊賀中將殿

家來中

明治元年

八九五

追而廻覽之後返却可有之候也

正月十九日我藩政府は舊幕西國郡代退去につき特に日田天草等嚴重に警衛すへき旨を令達す

〔嘉永年間以降記録〕

日田天草別府之儀是迄幕府より之命ニ依而御警衛御人數等被指出置候處今日ニ至候而者全く之王土ニ歸し殊ニ窪田縣令茂陣屋立退之様子付而者猶更主宰も無之事ニ付各藩穩ニ申合當分有之ケ所々々嚴重ニ守衛不致候而者難相成時宜ニ付同意之藩々何方たりとも相請持之心得を以共々力を合其地之人民鎮定撫育之儀專要ニ心を用可申旨ニ候事

正月
付紙
本紙之通候處日田天草之儀者縣令立退ニ付而ハ津野田儀左衛門を兩筑肥前に被差出共々御警衛ニ相成度との趣被仰

進管候且又別府之儀ハ御私領同様ニ而最前より此方様御支配ニ相成居候付各藩へ御警衛之儀被仰進連者無之候得共諸藩より共々警衛いたし度段申來候ハ、許諾致し可申との事ニ候

日田天草等出張之面々心得方之儀ニ付而御沙汰之趣別紙書取一通差遣候條奉得其意大河原次郎九郎并高松詰同役は早々可有通達候以上

正月十九日

奉 行 所

鶴崎御郡代衆中

改訂 肥後藩國事史料 卷七終

342
483

終

